
プレス・オブ・ファイア ドラゴンクォーター

社 九生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブレス・オブ・ファイア ドラゴンクォーター

【Nコード】

N7732V

【作者名】

社 九生

【あらすじ】

はるか昔、世界に？大いなる災い？があつた。

空は焦げ、瘴気はあまなく地表に満ちた。

見上げるべき空を失った人々は、足の下に生きる術を見つけ出す。

大深度地下都市。シエルター。

覆われた、第二の世界で、幾世代もの刻が過ぎる。

人々はもう、空を忘れたのだろうか……？

下層地区のレンジャー、リュウは、任務で訪れたバイオ公社（生物化学工場）で、奇妙な体験をする。

閉ざされた地底の世界の物語が、動き始める……。

あらすじはゲーム公式サイトより引用。

本作はP S 2専用ゲームソフト「ブレス・オブ・ファイア? ドラゴンクォーター」のノベライズです。

私は二丁ナ

夢を見ている。小さなブリキの箱の中。

そこには少女の、失われた日常があった。

家があつて、暖炉の温もりが橙色に輝いて、テーブルのうえにはごちそうがある。

この香ばしい匂いの湯気に包まれた肉は何の肉で、濃い黄色の、細やかな緑の葉が乗ったスープは何で出来ているのかは分からないが、政府から配給されるまずい米やパンの類でないことは明らかだった。

お母さんの手作り。もふもふとした薄黄色のスリッパを履いて、赤と白のチェック柄のエプロンを身に着けて、キッチンに向かつてふと「ママ」と呼びかけると、こちらを振り返って微笑んでくれる。そうやって作られた料理が、まずいわけがない。

食卓には母とともに、父の姿もある。楽しそうに笑っている。

私もうれしい。家と、光と、母と、父と、そこには一切の悲しみがなかった。

たった一つだけあるとすれば、目の前の景色が全部、現実でないということ少女が自覚していることだった。

このまま目覚めないで。パパとママも、ずっとそこにいて。しかし、夢は夢だった。

暖炉の火が消える。ごちそうが石に変わる。天井の隙間から影が伸びてくる。途端に空気の質感がニセモノっぽくなって、視界から色が、光が、急速に失われてゆく。ブリキの箱が壊れてゆく。

やめて。行かないで。パパ、ママ。私を置いていかないで。

虚空に伸ばしたか細い腕が、こつりと岩肌に触れた。

痛くはない。悲しい。

涙があふれ、頬を伝うのを感じながら、少女はぼんやりと天井を

仰いだ。

暗い。コールタールのような深い闇がよどんでいる。そこにはでたらめに隆起した岩のシルエットが絨毯のように敷き詰められ、空気がさらさらとして埃っぽい。

ああ、ここは現実だ。あるいは、？悪い方の？夢だ。家も、暖炉の温もりも、父と母の姿もなく、凍える風が吹き抜ける洞窟で、少女が一人、孤独に時を過ごす夢。

あれからもう二年が経つというのに、涙は一向に涸れてくれない。でも、大丈夫。悪い夢は今日で覚めるから。

少女は手の甲で涙を拭い、傍らに生えた頂点の丸い岩を支えに立ち上がった。遠巻きに人々のざわめきが聞こえる。炊き出しの時間だ。

おもむろに歩き出そうとして、すぐに足を止める。大切な友だちを踏みつけてしまいそうになったからだ。

くまのぬいぐるみ。幼い頃、父にプレゼントされた。

名前はブキ。素材が貧弱なのか、ちよっと両手を握ってダンスの真似事をしただけで、両腕がブキ、お腹がブキツと音を立てて千切れるからだ。

おかげで継ぎ接ぎとボタンだらけになった身体は、あちこちパッチワークされてとてもカラフル。外見こそ変わっているが、少女にとってはいつも傍にいてくれる大切な友だちだ。

少女はブキをぎゅっと抱きしめて、少し早足に洞窟を出て行った。寸胴鍋で煮詰められるスープの匂いに食欲をそそられたのもあるが、少女には会いたい人物がいた。

広場は列を作る人でごった返している。俺が先に並んだ、いや俺だ、と口論している男たちもいる。この最下層区ではさほど珍しくない光景だ。

背の低い少女は、懸命につま先立ちをしたり、高いところに登ったりして、人混みのなかに青年の姿を探した。

彼がこの集落を訪れたのはおよそ二週間前。いまと同じ炊き出し

の時間に、少女が広場の隅でぼそとパンを口にしていると、気さくに声をかけてきた。

薄いピンク色の頭髮、額にかけたゴーグル、白いラインの入った皮製のジャケットに、それと同じ柄のスキニーパンツ。腰には短めの両刃剣を携えていた。

身なりからして最下層区の人間でないことは明らかで、少女はブキを抱いて警戒心を募らせたが、青年はチヨコレートをくれた。欠片一つじゃなく、一枚丸ごとだ。

それでも見慣れぬ人間への警戒を緩めるつもりはなかったが、チヨコレートは甘かった。

涙が出るほどに。こんな甘いお菓子を口にしたのは何年振りだろう。前に食べたときは、お母さんが一緒だった。

思い出が涙となってブキの額にこぼれ落ちる。

青年は少女の傍に腰を下ろし、ささやきかけるように話し始めた。「僕はここから一つ上の階層で、レンジャーという仕事をしている。凶暴なデイクから街を守り、犯罪者を取り締まる。自分で言うのもなんだけど、正義の味方なんだ」

顔を見せてごらん、と指で優しく顎を起こされ、にっこりと笑う青年の顔が視界いっぱいに広がった。とても印象的な、心に火を灯してくれるような笑顔だった。

「困ったときは、正義の味方に相談してくれ」

それからというもの、青年は度々顔を見せるようになった。飴やチヨコレート、そしてたくさんさんの土産話を持つて。

青年の話はユーモアに満ち、その耳にずっと入り込んでくる柔い声質で語られる話はどれも、一日の大半を狭いほら穴で過ごす少女にとっては夢にあふれた冒険譚だった。

少女は引つ込み思案な性格だったが、やがて青年が集落にやってくるのを心待ちにするようになり、自らの過去についても少しずつ打ち明けるようになった。

言葉も、舌も足りなくて、ときに感極まって思うように話が出来

ないけれど、青年はずっと黙ってうなづいていてくれる。

ブキも聞き手としては優秀であるものの、青年のように背中をなでてくれたり、温もりのある言葉をかけたりはしてくれない。少女は青年を心から信頼し、そして尊敬していた。

やあ、と手を振って、青年は人好きのする笑みを浮かべた。少女は胸の内がきゅんと高鳴るのを感じながら、足を早めてゆく。行き交う人にぶつかりそうになる。小さな足を踏みつけられそうになる。それはいけない。この靴は青年からもらった物だ。少女がずっと裸足で過ごしているのを見かねて、下層区の街で女の子用のスニーカーを買ってきてくれたらしい。白とピンクのツートン・カラーでやや派手だが、少女の宝物だ。

「じゃあ、行こうか」

おもむろに歩き出した青年の背中を、少女はぱたぱたと跳ねるようについていった。

今日という日をどんなにか待ち望んだことだろう。

パパとママに会える。

青年が約束してくれたのだ。

君をまた、パパとママと一緒に暮らせるようにしてあげる、と。いくら堪えようとしても頬がほころぶ。足元が軽快に弾ける。

パパとママに、会えるんだ。

青年と交流を深めていくなかで、少女はこの世のあらゆる理を知っていた。

齡十にもなれば、誰もが常識として頭に留めていることのほとんどを少女は知らない。家の外にもほとんど出たことがなかった。

「外は空気が汚いし、怖い人たちがたくさんいるから」

それが母親の口癖だった。

だから少女は、絵本や、テレビで放映しているアニメ番組、そして窓越しに見える範囲でしか世界を知らなかった。

青年はかすかに驚きつつも、少女が疑問にぶつかる度、そっと手

を差し伸べるかのように教えてくれた。

千年もの古に地上で起きた？大いなる災い？。それによって空は焦げ、瘴気があまねく地表に満ち、人々は足元に生き場を求めた。

大深度地下都市。それが少女と青年が生まれた地底の世界だ。そしてこの社会には、？D値？というヒエラルキーがある。いつからともなく人々に課せられた絶対のルールだ。

たとえば青年のD値は1/2048。出生と同時に計測され、割り出された数値がパーソナル・ナンバーとして名前の後ろに付加される。少女は両親から世界の成り立ちを教えられてはいたが、D値については一切教えられなかった。

それに漠然とテレビのニュースを見ていても、不意にチャンネルを回されることがあったり、新聞や特定の本を読ませてくれなかったりと、両親には不可解な行動が目立った。

「両親は、君にD値について知られなくなかったのだろうか」と青年は言った。

分数様式で示されるこのD値は、分母の数が分子の？1？に近いほど潜在能力が高く、優秀な人材であるとされる。そして人々はD値によって職業や居住区が決定されるのだ。

D値が高ければ衛生環境の良い上層区への居住が許され、政府の要職に就けるなどエリートとして扱われるが、D値の低い者は空気が汚染が深刻な下層区にしか住めず、出世も望めない。一生？ローデイ？呼ばわりされて差別や偏見の対象になる。少女が暮らす集落にしているのはみなローデイで、実質社会から切り捨てられた層の人間たちだ。

「D値による区分は絶対だ。それがたとえ親子であっても、D値に大きな差があれば別々に暮らさなくちゃいけなくなる。君の両親は上層区の人間なんだろう？

そこに、D値の低い君が八歳になるまで暮らせていたのは、君の両親が――

最後まで言い切らぬまま、青年はぶつりと口をつぐんだ。

それでも少女には分かった。父と母は自分を匿ってくれていたのだ。小さなブリキの箱のような家に。胸いっぱい愛情と温もりのなかに。

それを想うと、また涙が出た。同時に、D値の低い自分を恨めばいいのか、世界を恨めばいいのか、矛先の定まらない憎悪が胸を渦巻いた。

青年はしばらく黙って背中をさすってくれていたが、やがてこう言った。D値は生涯変わることのない数値だが、ある手術がそれを可能にする、と。

「上層区に住むに相応しいD値を手に入れて、パパとママと、堂々と暮らすんだ」

ぽん、と肩を叩かれると、少女の鬱蒼とした心に光が差し、希望が騒いだ。

手術の費用は全額、自分が出すと青年は胸を張った。

どうしてこんなに優しくしてくれるのだろう。

自分の知るどんな言葉を持っても感謝しきれない。彼は本当に正義の味方だ。ヒーローだ。

集落を出て十分も歩くと、リフトポートに着いた。

人口増加とともに都市全体が拡大しているため、階層や区画の移動にはもっぱら高速移動車両が用いられる。

この場所に来るのは 顔を重厚なマスクで覆った人間たちに連れてこられた、あの日以来だ。

薄暗いホームの隅にわだかまる闇、底冷えした静寂、電灯が放つ鈍い青色の光、そこにたかる羽虫たちが作る不気味な音像。

この空間には何か得体の知れない呪いがかけられている。当時はそんなふう to 身体が拒絶反応を起こしたが、いまホームへと階段を下りる少女の足取りは軽かった。

片側の線路に全面黄色で統一されたリフトが停車している。その前には白衣を着た男が立っていた。

青年の言っていた「お医者さん」だろう。フレームの細い眼鏡をかけ、金色の髪は上品に整えられている。いかにも学者然とした風情だった。

「や、これが、あなたの言っていた……」

男は挨拶一つすることもなく、二人を前にするといきなり言い出した。

眼鏡のテンプルを二、三回、くいと上げて、少女を見つめる。

あたかも品定めするかのような目つきだ。

男の眉尻一つ動かない、どこか機械じみた表情に、少女は急に心細くなつて、青年の腕に手を伸ばした。

「ええ……？ 素材？ です」

ぴたり、と青年の袖口を掴もうとしていた手が止まる。いまのは誰の声だろう？

紛れもない。青年の声だ。声質の変化に思わず耳を疑った。

おそろおそろ青年の顔を見上げてみると、そこにはいつもの優しさがなかった。目は鋭く、ある種の残酷さともいふべき冷気を帯びている。

「や、ごくろうさまです」

？ 値踏み？ が終わったのか、男は少女から視線を外すと、ポケットからおもむろに財布を取り出した。

「これは、まあ、前金ということだ」

青年は何枚かの紙幣を受け取ると、掌のなかでくしゃっと丸め、用は済んだとばかり踵を返した。

少女は慌てて青年を呼び止めたが 冷たい言葉が返ってくるだけだった。

「あばよ、お嬢ちゃん」

そして遠のいていく青年の背中。去り際に見えた横顔も、言葉遣いも、何から何まで別人だった。

どういうこと？ あなたは正義の味方じゃ、ヒーローじゃなかったの？

ぼとり、とその小さな胸からブキがこぼれ落ち、足元を転がった。
「さあ、行きましようね。どこへ？ や、君は、彼に教えてもらわなかったのかね？」

パパとママに会わせてくれると言った。手術をして、D値を高くして、みんなに認めてもらえる家族になるんだって。

「お父さんとお母さんにですか……それは、まあ、安心して下さい。手術が無事に済んだら、また一緒に暮らせるようになります」
取ってつけたような男の口ぶり。誠実さや心に訴えかける感情のきらめきは微塵も感じられない。

でも、このまま元の場所に戻ったところで、何があるのだろう。
ローディたちの不潔なざわめきと、明日の見えないどん詰まりの闇が待っているだけだ。

少女は横様に倒れていたブキを拾い上げると、手招きをする男の元へと、柵を引きずるような重い足取りで向かった。リフトに乗り込んだ。後戻りはもう出来ない。

二本のレールにつながるような軋みをあげて、リフトは発進した。
少女はふっとまぶたを閉じてみる。狭い岩窟をひた走るリフトの、身体と心を蹂躪するような振動。大気のうねり。胸を占める喪失感とも、絶望感ともつかぬ巨大な虚しさ。

それがみな、三秒数える間にどこかへ行つて、少女を、あの暖炉の温もりに約束された、父と母のいる永遠の安穩へと帰してくれる。ほら、一、二の、三で、まぶたを開けてみよう。

そこには、きっと

「や、ところで、君の名前はなんと言うのです？」

悪夢は覚めてくれなかった。男の無機質な声が、少女の期待を静かに打ち砕いた。

少女はほとんど息絶えたかのような面差しになって、しばらく。そのくちびるがひっそりと動いた。

「私は……ニーナ」

(?) ルーチン・ライフ・前篇・

ぼんやりと 空調用のプロペラの羽が、くるくると低速回転しているのが分かる。

耳を包むのはテレビの音声だろうか。空気汚染の深刻化がどうの、中層区の水没領域がどうの。

何か夢を見たような気がするけれど、一片の映像さえ覚えていない。ただ、見たかもなあ、という憶測めいた余韻だけが頭に残っている。

少年は上体を起こして、眠気の膜を剥がすかのようにごしごしまぶたをこすった。寝覚めはあまりよくない。このところディク狩りが続き、ろくに休暇を取れていないことが原因だろう。

今日も任務だ 少年は短い梯子を使って二段ベッドから降りる。ベッドの下端に同居人の姿はない。近くの壁に埋め込まれた薄型の液晶テレビがつけっぱなしになっている。部屋の明かりも、フットライトも。

少年はまだ本調子でない目をめぐらして同居人を探しつつ、バスルームへと向かった。洗面所の照明もまたつけっぱなし。

少年のいささかやつれた、不健康そうな顔がのっそりと鏡に浮かんだ。洗面鏡の両脇に備え付けられた棒状の照明具。その淡い橙色に照らされると、少年の肩先まで伸びた髪がツヤめき、何か特別な魅力を宿しているかに見える。

本当は忙しさにかこつけて伸ばし放題にしているだけの、何の変哲もない黒色の髪なのに。少年は手ぐしで髪を梳き、肩先にかかる部分を赤い紐でまとめあげると、頭のてっぺんできゅっと結わいた。すると背筋に血が通って、心持ち眠気が晴れた気になる。このあとはごくありきたりな朝の手続きだ。毛並みの悪い歯ブラシで口を洗い、顔面に水をかぶる。

フックにかけられた白いタオルを手にとろうとすると、隣には同

居人のタオルがあり、わずかに水気を帯びている。つい数分前に彼もここで身支度を済ませたのだろう。

少年は最後に荒れた肌の具合を確かめ、ささっと前髪を整えると、洗面所を後にした。もちろん、明かりを消して。

再び部屋へと戻ってきた少年を、誰にともなく語られるテレビの音声が出迎える。相変わらず同居人の姿はなかった。

一足先にロッカールームで用意を進めているのかもしれない。起こしていつてくれたらよかったのに。

少年は今さらのように頭のなかで独りごちながら、テレビを消した。手前には四角いテーブルと二人分のスツールがあり、その一つにフレームの赤いゴーグルが置かれている。

昨晚、ロッカーにしまい忘れてここまで持ってきてしまったのだ。最近は何々こういうことがある。疲れが頭に蓄積しているのか、どうにも手足の感覚や意識が冴えない。

骨組み丸出しのベッドでは熟睡出来ないからだろう、空間を造る壁や照明の色に癒しの力がないからだろう。しかし、寝て、起きて、仕事をこなす。たったそれだけのことを繰り返すレンジャーに、特別な部屋が必要ないのも事実だった。

少年は短いステップをのぼりながら、額にゴーグルをかけ、自動で開かれたドアの向こうへと踏み出してゆく。

さあ、退屈な一日の始まりだ。

ロッカールームへは、自室から宿舍の廊下を歩いて二十秒とかからない。同居人の姿はやはりそこにあった。

部屋は通路のように細長く、壁の両脇に所狭しと板金製のロッカーが並び、パイプやフェンスが張り巡らされた天井には大きなプロペラ。

それが薄暗い室内に充満する埃っぽい空気をゆるゆると攪拌し、どことなく息苦しさを覚える。少年はゴムでコーティングされた床に散らばる紙くずを踏んづけていきながら、同居人に話しかけた。

「テレビ、つけっぱなしになってたよ……」

同居人はニットのインナーを着込んでいる最中だった。

やがて襟からするりと頭が飛び出る。上品に切り揃えられた金色の頭髮が、静電気でくしゃくしゃにはねた。

「また一段階、空気汚染がひどくなっただってな」

彼は特に悪びれる様子もなく、淡々と会話を続ける。

その細くも筋肉質な腕が、ロッカーから緑色のジャケットを取り出した。

「政府はどうするつもりなんだろう。野生デイクの数も増えるばかりだし」

「さあな。特にこれといった政策は示されてない。いずれにしても中層区から下の話だから、最悪、連中は見捨てるのかもしれないな」
ジャケットに袖を通しつつ、彼は空いた手でロッカーの戸を閉めた。

「ゆがんでるぜ、この世界は」

ボタン、と音を立て、今度は少年がロッカーを開けた。

「で、今日の任務は何？ またデイク狩り？」

「いや、リフトの護衛だとさ」

彼はジャケットの裾をピンと張り、身体のアちこちを触って装備漏れがないかを確かめていた。

「護衛？」

「ああ。積荷を乗せたリフトを端から端まで送るだけ……」

言葉半ばに、彼は振り返った。「ローディの能無しでも出来る仕事さ、リュウ」

その目はいつものように相手を見下すかのような冷気をはらんでいた。ジャケットの襟が耳たぶを覆うまでにびしっと立てられ、彼の傲慢な雰囲気より一層と引き立てている。

ボッシュ11/64。エリートである彼にとって、この程度の任務は暇つぶしにもならないのだろう。

「先に外で待ってるぜ、相棒」

去り際に片手を挙げ、彼はロッカールームを出て行った。

その腰にぶら下げていたのはレイピア。彼のスマートで、攻撃的な精神がそのまま形となったかのような剣。

一方、リュウが取り出したのは、ごく一般的な細身の両刃剣。ついで紺の地に赤のラインが入ったジャケットをまとう。こちらもボツシユの派手な色合いのそれと比べればはるかに地味だ。

ぎゅっと、革の手袋をはめながら、リュウは思う。これまでも疑問に感じていたことだった。

どうしておれは、ボツシユとコンビを組んでいるのだろうか？ 相棒、と呼ばれているのだろうか？

あいつは言った。ローディだと。能無しだと。おれのことを言っているのか？ リュウ「1/8192、おれのことを。

きつといつもの軽口だ。ボツシユは度々、ああやって乱暴な台詞を吐く。しかし、その無邪気な口ぶりに心がかすり傷を負うこともある。

リュウはロッカーの戸を閉めるのと同時に、あえて思考を停止させた。

ボツシユ「1/64にとって、サード・レンジャーという仕事は、栄光に満ちたキャリアの第一歩に過ぎない。深度九八〇メートルに広がるこの場所から、頂点へと這い上がるスタート地点に過ぎない。だが、リュウにとっては永遠の仕事であり、永遠の居場所でもある。彼の前に道は用意されていない。昨日までにしてきた退屈な任務を、代わり映えのしない日々を、これから先もずっと続けてゆく。そうやってルーチンに沈んでゆくだけの運命をありありと示している。1/8192という値が。

よそう、未来について考えるのはよそう。何の意味もないのだから。

リュウはいささか逃げるようにして、足早に部屋を、いずれまた帰ってこなくてはならない部屋を、出て行った。

ブリーフィングにはまだ時間がある。そう言って、ボツシュは街の食堂で腹ごしらえをしておこうと提案してきた。

すると呼応したかのようにリュウの腹が鳴る。彼は下層区定番の？ハオチー肉入りスープ？のどろりとした湯の質感と、付け合せに出るぱさぱさとしたパンの食感を思い浮かべながら、ボツシュの後を追った。

二人のいる廊下はレンジャー基地の二階に相当する部分で、片側は窓のない吹き抜けとなっている。急峻な崖の岩肌が迫り、時おり深い暗闇の向こうから風が入り込んでくる。

階下は街とリフトポートの進入路を隔てるジャンクション（中継地点）。整地や壁の加工がされていない天然のトンネルだ。

藍色で統一されたダウンライトや電球が壁面に取り付け、ないしチェーンで吊り下げられ、闇の奥地で灯火のように底光りする外観はいつそ神秘的でさえある。

そのなかでリュウたちと同業であるらしい身なりの者が連れ立ってリフトポートへと向かったり、外灯の下で一組の母子が人を待っているかのように立っていたり、重厚なマスクで顔を覆った者が壁際に設けられたテレコーダー（公衆電話）を使って誰かと会話したりしている。扉が開かれると、リュウたちも彼らと同じ空気を吸った。ジャンクションへは二階から直接階段で下りられるようになっているのだ。

かん、かん、と鉄条網で出来たステップに音を立てながら、ふと、リュウは誰かに呼びかけられたかのように天井を仰いだ。

深い。巨大な断崖が、急峻な闇が、果てしなく広がっている。そのうちに奥からふつと手が出てきて、自分の魂をさらっていくのではないかと錯覚してしまうほど、得体の知れない世界が崖の狭間でゆらいでいる。

「何ボケっとしてんだよ、リュウ」

「いや……何でも、ない」

リュウの心に脈絡もなく芽生えた感情。

空。かつて人は、その広大な青さとともに生きていたという。今の時代からは想像もつかない。本当にあったのかどうかも定かではない伝説。

二人の向かう下層区街の天井は、全面が色とりどりの絵の具で塗られている。空を？模した？のだ。更に人の手によって？太陽？が造られると、元は地底の大空洞であつた場所に一日のサイクルが生まれた。

人工太陽の消灯時間が夜。それに光が灯るのが朝。夜に至るまでの時間が昼。どれもかつて人が地上で暮らしていたときに使われていた言葉なのだという。他にも？ユウガタ？という表現があるようだが、こちらは使われていない。

ただ、下層区街に描かれた空は、ユウガタの表情に近いと、リュウはどこかで耳にしたことがある。そうか。空は刻々と変化して、一定の形を持たないものだったのか。

分らない。すべては現代に遺された史料から発する憶測に過ぎない。だから、リュウはこの目で確かめてみたいと思う。

いつか、本物の空を。

(?) ルーチン・ライフ - 後篇 -

しかし、結局のところ、空などという存在はお伽話。ありもしない空想だと、一般的には認識されている。

「空が見たい」などと言おうものなら子供呼ばわりされて恥をかく。相手がボツシュのような現実主義者リアリストならなおさらだ。

リュウはふつと芽生えた感情を心の奥底にしまい込む。こうやって人々は、空に対して強い憧れ、好奇心を持っていながらも、リュウのように忘れよう、忘れようとしていくのだ。

街の食堂は多くの人で賑わっていた。カウンターに並ぶ列が店の外にまでみ出している。客のほとんどはレンジャーや地底掘削要員といった公的労働者で、家族連れなど庶民の姿は見受けられない。逼迫ひっ迫した食糧問題を抱えている下層区において、彼らのように国の事業や公安に携わる人間には優先して食料が回されるようになっている。

いまの時間帯はちょうど朝。この店は街にいくつかある大衆食堂の一つで、公的労働者専用というわけではないのだが、この時間帯は決まって彼らに独占されてしまうのだ。

サード、というレンジャー内では最も階級の低いリュウもいちおうは官憲であり、これまでも食事に困ったことはない。

だが、人口増加に対する都市拡大や、それに伴う居住区の治安維持のために、公的労働者の求人率は年々高まって来ている。今や五体満足で経歴に問題がなければほぼ採用といった状態だ。

すると今度は公的労働者内で早い者勝ちの食物競争が起こるわけだが、それでもリュウが食事に困らないのは、ひとえに、ボツシュ彼の1/64というD値が傍らにあるおかげだ。

ボツシュは長蛇を成す列などまるで眼中にないといった風情で、ずかずかと店に入って行った。どうにも後ろめたくて、リュウはず

つと顔を伏せたままだ。

当然のように誰かが罵声を飛したが、ボツシュの顔を見た途端にその口が引っ込んだ。代わりに舌打ちや陰気なひそめき合いが店内を包む。

「セツト二人分。俺のにはスープはいらないから、代わりにブレットを一つ増やしてくれ」

カウンターで接客を務める少女は、見るからに不服そうな顔つきだった。

「あんさんは、まあ、千歩ゆずってしゃーないとして、そっちの力はどうなん？ D値高いんか？」

つと向けられた彼女の青い瞳から、リュウはさつと視線をそらした。

彼女の名前はクリオ。てっぺんに赤いぼんぼんを乗せた帽子をかぶり、その独特な風貌と口調で客を出迎える店の看板娘だ。

「このボツシュⅡ1/64の相方を務めるやつはD値が悲惨なワケないだろ。ほら、俺たちにはあまり時間がないんだ」

クリオはいぶかるような目つきで二人をにらみながら、後ろの厨房に指示を出した。

やがてクリオが運んできたプレートには、どちらも同じように灰色のぎつたりとしたスープとパンがついている。

注文通りでないことにボツシュが文句を言うと、「うっさいの！ 顔面にスープぶちまけたるぞ！」という怒声が返ってきた。

やれやれ、といった調子でボツシュはチップと交換にプレートを受け取り、二人はテラスの席についた。店内はもう満席だったのだ。路面の赤土が風に巻き上げられるためにあまり良い席とは言えない。テーブルもスチール製で安っぽく、ボツシュは「これだから下層区は」とでも言いたげな顔をしていた。

「リュウ。このスープやるから、ブレットくれよ」

言いながら、ボツシュはリュウのプレートからブレットを取り、ついでハオチー肉入りスープの入ったお椀を置いてきた。

ハオチーとは地底全域に生息する芋虫型のデイクで、その硬くて埃っぽい味のする肉は？庶民の味？として下層区では広く親しまれているのだが、エリートの口には合わないようだった。

「それにしても」

「なに？」

ボツシュはブレットをちぎり、欠片を一つずつ口に運んでゆく。

その気になれば丸ごと一口で食べられる大きさにのに、リュウはこういった所作にボツシュの育ちのよさを感じる。

彼は上層区の出身なのだ。

「さっきの女。あの喋り方、下層区訛りつてやつか？」

「いや……普通の人は、あんな喋り方しないよ」

「ふーん」鼻先で答えながら、ボツシュの目が何気なく街に向けられる。

仕事に出向く労働者たちの往来、レンジャーごっこをしている子供たち、そして彼らの頭上に広がる、空。

中天はホワイトとエクリュ・ベージュの中間色で描かれ、地平線に向かう連れてオレンジとエメラルドが混じる。

それらの色彩が人工太陽の光を受けてまばゆく輝き、白みかがつたオレンジの明るさが街を満たしている。先ほどジャンクションから街へ入ったときに目が眩んだのはそのためだ。

生まれも育ちも下層区であるリュウにとってはごく見慣れた景色だが、ボツシュは違う。三ヶ月前に初めてこの街を見た彼は、一言、「汚ねーな」と言った。

確かに、本物の空がこの天井に描かれたもの通りであつたら失望する。生きている感じがしないのだ。このスチール製のテーブルのように安っぽくて、拙い抽象画のようにさえ見えてしまう。

「そろそろ時間だ。あんまり待たせると、隊長、怖いからな」

ボツシュはプレートを持って立ち上がり、リュウは二杯目のスープを口に流し込んだ。

「お前、よくそんなもんをゴクゴク飲めるな……。見た目といい匂

「いい、ほとんどゼロだぜ」

ボッシュはうえつと口を尖らせた。リュウの腹のなかで？ゼロ？と言われた汁がどろどろとゆれている。当分はもう何もいらないだろう。

プレートをカウンターに返して店を出て行こうとした折、ふと、一台の小型レッカー車が通りがかった。

人々が左右に道を開ける。その間を低速で進む車の前後には、マスクと警棒を装備した警備兵がついている。

バイオ公社か、とボッシュがちらりと呟いた。レッカー車は大きな真四角の鉄檻を乗せた台車を牽引しており、檻のなかでは一体のデイクがおとなしく座っている。

その獣らしい底光りする目を遠巻きに眺めながら、二人は歩き出して行った。レンジャー基地へと戻る道中、二人の話題はもっぱらバイオ公社が中心となった。

生物化学工場としてデザインド・クリーチャー、略して？デイク？を研究、開発する機関。それが一般に知れ渡っているバイオ公社の企業内容だ。

乗り物用から食用に至るまで多種多様なデイクを生み出し、人々の生活を豊かにする一方、一部のデイクは野生化し、人々に危害を与えることもある。

そんなモンスターから街を守るために政府公認のもと組織されたのがレンジャーだが、よくよく考えてみればおかしい話だ。

先ほどのように新規開発した実験体を連れて街を横断するのも珍しくない。噂によれば下層区の少年少女をさらって非人道的な研究の対象にするとも聞く。

そんな？国家事業？の名にかこつけて図々しく、企業実態について様々な憶測が飛び交う彼らこそが、今回の任務のクライアント（依頼主）だ。

「任務の辞令はいつ受けたの？」

「昨日の夜。お前が仕事から帰るなりベッドに倒れこんだあとだ」

「リフトって言ってたけど……積荷の中身は？」
「聞かされてない。ま、たかが護衛の俺たちが知る必要もないけどな」

リュウの足がぴたりと止まる。そこは街の出入り口付近、階段を上ったところにある広場で、片側は見晴台になっていた。

バイオ公社の高層ビルが、スモッグや粉塵で濁った景色の向こうに高々とそびえている。あのなかで今日も、ボツシュが気味悪がるようなスライムめいた何かが生産されているのだろうか。

ボツシュは颯爽とレンジャー基地のオフィスへと入って行った。

事務机に向かって報告書をまとめていた女がたと顔を上げる。与太話をしていたと思しき男の二人組みがぴたつと話を止める。

「エリートのお通りだ」とでも言うように、ボツシュは肩を鳴らしながら青いタイル張りの床を突き進む。この真ん中にすうつと赤いガラスの入ったドアの向こうが隊長室だ。

「ボツシュⅡ1/64、リュウⅡ1/8192。以上二名、参りました！」

ボツシュの力強い声が整然とした室内に響き渡る。

「よろしい……」下層区レンジャー基地の監督官、ゼノⅡ1/128が静かに呼応した。

ブラインド越しに差し込む人工太陽の明かりを背に受ける彼女は、その燃えるような赤とは裏腹に、淡々とした声で語り始めた。

「すでに聞いているとは思いますが、今回の任務について、確認しておきます」

資料を眺めながら話す彼女の手が、さっと眼鏡のテンプルに触れる。彼女の？クセ？だ。

「警護任務、レベルE……。バイオ公社の下層実験棟より発進する輸送リフトに同乗し、貨物を警備する……」。

知っていると思いますが、バイオ公社では機密性の高いものを扱っています。積荷の中身について、細かい報告はありません」

彼女はキツと素早く顔を上げた。無駄を嫌う軍人らしい動き、口調、峻厳な眼差し。

しかしそれはあくまで職業的な態度であり、彼女がもっと心優しい人物であることをリュウは知っている。

「何か質問は？」

「特にありません。ですが……」

ボツシュの声が一瞬、上司に対する口調とは思えない怪しげな響きを帯びた。

「任務の前に、少しお話が」

「いいでしょう。リュウ、先に出なさい」

事態が把握できずに呆然としていた彼は、慌てて敬礼し、部屋を後にした。

扉が閉まり、リュウの気配が遠ざかったのを確認すると、ボツシュはだらりと肩の力を抜いた。

ついで歩き出し、隊長の執務机のうえにどさつと腰を下ろす。いっそ暴拳とも言える部下の行いを咎める素振りもなく、ゼノはむしろ怯えているようであった。

「隊長、分かつてると思うけど……」

両足を組み、退屈そうにつま先をゆらしながら、ボツシュは脅迫めいた声音で喋り始めた。

「俺のD値は1/64。この値はセカンドやファーストはもちろん、^{メンバー}？統治者？にすら、手が届く資格なんだ……」

だから、俺に足りないのは手柄なんだよ。こんなチンケな任務じゃなく……もっと、ハデな手柄がいるんだよ」

ばた、という音を立てて、ボツシュは床に降りた。

「今回の任務は、機密レベルの高いものです。無事に終われば、上層部にはそれなりの報告を……」

不意に言葉が途切れる。ボツシュの手がすうっと、忍び寄る影のように肩へと下りてきたのだ。

「分かっただけいいんだ……」

ゼノは彼が部屋から出て行くのを背中に知りながら、自らの不甲斐なさに拳を握り締めていた。

ボツシュ「1/64。地下世界を統べる統治者の一人にして、？
剣聖？ヴェクサシオンの一人息子。

隊長として何たるザマだ。たかだか十六の少年に、足がすくむほどの恐怖を覚えるとは。

しかし、ゼノは決して彼自身が怖いではなかった。彼の背後にちらつく、偉大なる剣士の影に怯えていた。

「ボツシュ……」

隊長室から出てきた彼に、リュウは「何を話してたんだ？」と訊ねた。

ボツシュは白々しくかぶりを振り、その口元は相手を小ばかにするような笑みをたたえていた。

「別に。任務のことさ」

不信心、というほどではないが、リュウはボツシュの横顔に平穏ならざる思惑を感じることがある。

三ヶ月前にここへやってきて、自分が彼と同年齢だったためか、隊長命令でコンビを組むことになった。

彼は自らの過去について多くを語らない。が、その翠緑色の双眸は、燃え爆ぜるような野心を奥底に秘めている。

それに不安を感じる一方で、リュウはうらやましくも思う。ボツシュには未来を掴み取る資格がある。だからあれこれと、心のなかで野望をめぐらせることが出来るのだ。

だけど、おれは。

「さて。さつさと任務を終わらせようぜ、相棒」

言って、早足に歩き出す彼の、エリートの背中を、リュウは追いかけていくことしか出来ないのだった。

(?) 竜の声・前篇・

リュウとボツシュは下層区のリフトポートへとやってきていた。任務開始地点であるバイオ公社下層区実験棟へは、リフトを経由して行かなければならないからだ。

閑散としたホーム。片側にはリフトが停車しているが、そちらは目的地とは反対方向の路線。

とつくにバイオ公社行きのリフトが来ていても良い時刻なのにせつかちなボツシュは、ホームに一人佇む係員に訊ねた。

二、三言やりとりしたのち、ボツシュは呆れたようなため息を吐きながら引き返してきた。あの重厚なマスクで顔を覆った係員は、彼になんと答えたのだろう。

「ボツシュ、どうかした？」

「お決まりの、リフトの故障……」

ボツシュは愚痴っぽく言いながら、薄暗いトンネルの先を指差した。

「このボツシュ11/64に、線路の上を歩けとさ」

しょうがないね、とリュウは小さくうなづいた。

野生化したデイクが我が物顔でうろつき、ライフラインや施設の老朽化が甚だしい下層区では、あれが壊れた、これが無いというのは日常茶飯事なのだ。

係員曰く、目的地へはこのままリフト道を歩き、途中にある整備用のエレベータを乗り継いで行けば良いということらしい。

しかし、係員はひどく無愛想で、具体的にどの何のエレベータに乗れば良く、また道中は多数の野良デイクが棲息しているから気を付けろといった助言はしなかった。

リュウたちも特に深くは言及しない。レンジャーは街のため、人のため日々働いているが、「政府の人間」ということで一部から忌み嫌われているのだ。

「道、分かる？」

「何となくな。ついこの間、任務でリフト道のディクの一斉討伐をしただろ」

ああ、と答えながらリュウは線路に降り立った。

「道の途中途中に標識があった。それを頼りに行くしかない……急ぐぞ」

腰につけたポーチからペンライトを取り出し、ボツシュは早足に踏み出してゆく。

トンネルの両壁には白い電球がチェーンで鈴なりに張られているが、明かりは灯っていない。ディクが電気系統を食いちぎったためだろう。

じやり、じやり、と音を立てながら進入してゆくトンネルはまさに闇の棲み処。ペンライトの作るスポットが薄黒い染みだらけの壁を、滲み出した地下水が滴る天井を、すっかり錆びついた二本のレールを音もなく撫でてゆく。

歩き出してから五分ほど経過したところで、べちゃ、という液体音がボツシュの足元で弾けた。二人はすぐに身構えたが、スポットのなかでうごめく物体を見ると剣の柄から手を離れた。

ハオチー。今ごろリュウの腹のなかで消化されているだろう肉の主だ。

身体の半分が肌色と薄緑色のツートン・カラーになった芋虫型のディクで、体表に粘着性の高い液体をめぐらして普段は天井や壁に張り付き、パトロール中のレンジャーの前に落下してくるのは珍しいことではない。

「リュウ、お前の好物が落ちてきたぞ」

ボツシュはからかうように言いながら、うねうねと身体をしならすハオチーを蹴り飛ばした。

きりもみするように転がっていくハオチー。と、その先から喉を鳴らすような獣のうなり声が聞こえてきた。

一、二、三………合わせて六つ、白く底光りする獣の目が暗闇に

浮かんでいた。

「さっそくお出ましか」

邪公^{じやこう}。地下世界に広く分布する二足歩行型のデイクで、丸みを帯びた小太りな胴体に、大砲のように顎が突き出た頭の乗ったアンバランスな体つき。耳まで裂けた口の両端には鋭い牙が生えている。

ある程度の知性を持ち、何らかの防具を身にまとって両手に棍棒や斧を装備して狩りを行う。なかにはライト・ボウガンを持つ者もいるが、撃ってこないところを見ると目の前の三体はどれも近接タ
イプらしかった。

リュウは剣を抜こうとしたが、ボツシュに止められ、その手にペンライトを渡された。

「お前は？照明係？だ」

言うやボツシュは颯爽とレイピアを引き抜き、相手を挑発するかのように刃を立てる。

先頭の邪公が高らかに斧をかがげて雄叫びを上げると、三匹が一斉に躍りかかってきた。

しかし、ボツシュの間合いに足を踏み入れた途端、一匹が額から血を噴出させて倒れ込み、半秒遅れてもう一匹も地面に伏した。

瞬く間に仲間をやられ、残された一匹は慄くように後ずさりを始める。いよいよ背に壁が迫り、邪公は最後のあだ花と言わんばかりに大きく吼えた。

それを鼻で笑いつつ、ボツシュは突きの構えを取る。

「死んでいいよ」

弾丸のごとく繰り出されたレイピアの先端が、邪公の片目を貫いて壁にまで到達した。

邪公は悲痛な断末魔をもらし、やがて魂が抜けたようにふっと全身の痙攣^{けいれん}が止まった。

獣剣技^{じゅうけんぎ}。自身が学んだ剣術を、ボツシュはこう呼んでいた。

「全員、死んだの……？」

「見りゃ分かるだろ」

脳、心臓、三体はどれも正確に命の在り処を射抜かれていた。

血は乱暴に噴き出るのではなく、穿たれた穴から滾々（こんこん）と湧き出るように流れ、その顔はべろりと舌を突き出して獲物はどこかと叫んでいる。あたかも生きたまま時間が止められたかのような姿だ。

一方、ボツシュは返り血一つ浴びていない。彼がレイピアを鞘に納めてしまうと、本当にそこで戦いがあったのか疑わしく思えるほど、一瞬の出来事だった。

リフト道のディク掃討作戦があつたのは一週間前。大勢のレンジャーとともにリュウとボツシュも作戦に加わった。

討伐した邪公の数は述べ百頭。セカンドやファーストといった上級レンジャーもいたなかで、サードであるボツシュは相当数の敵を討った。

元から高D値のエリートとして注目されていた彼だったが、そのときの戦果が彼の名と実力を決定付けた。いまでは彼に取り入ろうとゴマをすってくる下級レンジャーもいるほどだ。

かの作戦で居住区近辺にのさばる邪公たちを仕切っていたリーダー格の討伐に成功。他にも脅威となりそうな大型の邪公はあらかじめ片付けられた。

ヘッドを失った群れは散り散りとなり、いまでは狩り逃した残党、いわゆる？雑魚？が残っている状態。先ほどトンネルで鉢合わせた三頭もその一組だろう。

邪公は高い知能を持っている。その朱色を帯びた全身と、鬼のごとき面差しは見るからに獰猛だが、不用意に人間の縄ばりに踏み入っていくほど頭の悪い生き物ではない。

だからこれまでは大規模な掃討作戦が行われてこなかった。こちらから近づかなければ、邪公は決して人間を襲うことはない。いや、なかったのだ。

明確な理由は分からない。おそらくは邪公が獲物としていたディ

クが、彼らに狩りつくされてしまったのが原因だろうと推測されている。

ある夜、数匹の邪公が下層区街に侵入してきた。そして街を荒らしに荒らした。このことがきっかけでレンジャー基地は隊員総出で邪公、およびその他の邪公の討伐に乗り出した。

この日のことを、リュウはあまり思い出したくない。頭の中から永遠に葬り去りたいとすら思っている。控えめに言っても、あの日の出来事は？悪夢？だった。

リフト道はディクの排泄物で汚れ、壁や線路のうえに飢え死にした邪公が転がっている。腐臭と暗闇。ここの空気を吸っていると、リュウの脳裏にあの日の絶望が矢継ぎ早の映像となつて想起される。事が起きる前に、どうして排除しておかなかった？

リュウはトンネルを部分部分で仕切るゲートをくぐる度に振り返る。ここのシャッターを閉ざしておけば、ディクの行く手を塞ぐことが出来る。さっきの邪公だつてかなりリフトポートに近い場所にいたのだ。

しかし、それをすれば当然、リフトの運行が滞る。食料や物資の供給が遅れてしまう。このトンネルがいくらディクの通り道になるとはいえ、物資の搬入路を閉ざすことは出来ない。こと何の権力も持たないサード・レンジャーには。

そうやってリュウが悩んでいる間に、ボッシュはぐんぐんと先を進む。彼の頭にはそもそも「街を守る」という発想はないようだった。

整備用の通路を経由し、二人は天上の高い開けた場所に出た。

歩くところは両側に奈落が広がる橋の上となり、壁に設置された照明灯が岩肌に深い青色の光を投げている。向かいには反対車線の線路が見えるが、橋はその半ばでぶつりと途切れていた。

淡い白光を放つ虫がゆらゆらと宙を舞い、鬼火のような光の軌跡が暗がりには描かれては消える。燐虫。奈落からは時おり思い出した

ように風が吹き上がった。

リュウはその都度足がすくんだが、ボツシュはまるで堪えていない様子だった。

「ボ、ボツシュ」

「なんだよ」

「ちよつと、進むの早くない？」

「おまえさ……」苛立ちげに頭をかきながら、ボツシュは立ち止まった。

「バイオ公社が時間にするさいのは知ってるだろ？ このままだとリフトに置いていかれるぞ」

「まさか……だって、おれたちはその護衛じゃないか。少しぐらいは」

「待ってくれねーよ」リュウの言葉を取り次ぎ、ボツシュは再び歩き出した。

「あそこはそういうところなんだ」

橋を渡り終えると、またトンネルが二人の前に伸びていた。

しばらくブーツで砂利を踏んでゆく音だけがこだましていたが、

「そついや、お前、まだ見るのか？」

ボツシュが唐突に問いかけてきた。

「え、何を？」

「夢だよ。最近、変な夢にうなされるって言ってただろ」

「あ、ああ……それは、そうなんだけど」

リュウは困ったように鼻頭を指で搔く。彼との会話はいつも急に始まるのだ。

「何を見たのか決まって覚えてないんだ。ただ、見たって気がするだけで」

「なんだよ、それ。自分が見た夢ぐらいしっかり覚えとけよ」

そう言われても、とリュウは頭のなかで独りごちた。

「なんでこんな話を？」

「別に？ ただ、今朝はちよつと覚めぎわの悪い夢を見たんでな」

「どんな……？」

ボツシュはゲートの横につけられた開閉レバーに手をかけながら、肩越しに言った。

「？竜（ドラゴン）？に喰われちまう夢さ」

ガシン！ 銅造りの壁や天井に大きな音を立て、扉は開かれた。

二人の足がぴしやりと止まる。白タイトルの敷き詰められたホームのうえに邪公の死骸が横たわり、そこに無数のコウモリが群がっていたからだ。

彼らは外敵の存在を察知するや、威嚇するような奇声を上げながら瞬く間に二人を包囲した。

「手厚い歓迎だな……」

ボツシュは素早くレイピアを構えた。それに遅れてリュウも剣を抜く。

敵陣の真っ只中で、二人は背中合わせに立っていた。

「こっちは俺がやる。もう半分はおまえだ」

ついでボツシュは脅迫めいた声で言った。「出来るよな？ 相棒」

そしてボツシュの背中が勢いよく離れていくと、リュウは少しよろめきながら目の前の敵と対峙した。

ランタン・バット。鋭く尖った耳に、顔の半分を占める大きなガマ口。皮は邪公と同じく朱色を帯びている。

負けるもんか リュウは十字型の剣を振りかざし、大・小それぞれ体格の異なるランタン・バットの群れに飛び込んでいった。

しかし、振り子のように宙を羽ばたくランタン・バットを彼の剣が捉えることはなく、斬撃はことごとく空を流れた。

一匹一匹は怖くないが、ランタン・バットは数で攻めてくる。リュウは防戦一方になり、敵を斬り倒すための剣はやがて敵を振り払うだけで精一杯の？棒？と化していた。

バットたちにたかられて手も足も出ないリュウは、ふと目に飛び込んできた空白へとその身を投げた。

一旦は間合いをおき、戦局を立て直す作戦だったが 突然、目

の前に鮮紅色の粒子が漂い、一点に集約し始めた。

しまった！ 群れのなかの一匹が気流を生み出すかのごとく羽を素早く動かし、その身は目の前にあるのと同じ色の粒子をまとっている。

ランタン・バットは何も噛みつくだけではない。？パダム？という火炎系の魔法を操るのだ。

「くっ！」

眼前で小さな爆発が起きた。とっさに飛びのいたので直撃は免れたものの、しばらく前後不覚に陥った。

左肘に鈍痛が走る。うまく受身が取れなかった。更に爆風によって巻き上げられた塵が紗幕しやまくとなって周囲を覆い、敵の位置が分からない。

しかし、リュウは静かにまぶたを閉じた。ゆっくりと深呼吸し、神経を研ぎ澄ます。

何も死を覚悟したのではない。ゼノⅡ1/128はリュウとボツシユの直属の上司であるが、リュウにとっては剣術の指導官でもあった。

訓練生時代、彼女が演習場で技を実演して見せてくれたときのことはいまでも脳裏に焼きついている。

『全ての生物は体内に？気？を宿している。そして剣士にとって、剣とは身体の一部。刃の切っ先に気を集中させ、振り下ろしとともに放出する。よく見ておけ』

彼女の周囲には細長いコンクリートの柱が並んでいた。彼女は一對の剣を両手に持ち、ふとまぶたを閉じた。

時間が静止したような沈黙。それは次の瞬間、コンクリートとともに砕け散った。

リュウは空気鉄砲を食らったかのような衝撃に吹き飛ばされ、おずおずと起き上がってみれば、あれほど堅牢に見えたコンクリートが彼女の足元で白い粉末と化している。

啞然とするリュウに、彼女はさっと眼鏡のテンブルを触れてから、

言った。

『おまえにこの技をくれてやる。名づけて

？ 絶命剣？ だ』

(?) 竜の声・後篇・

リュウは目を見開き、剣を両手で逆さに持ち上げた。

全身の気が躍動して刃の切っ先に流れ込んでゆく。砕ける。あのコンリートのように。

「行くぞっ！」

リュウは全力をこめて剣を地面に突き刺した。

めりこんだ剣の先から爆裂的な勢いで波動が広がり、周囲にいたランタン・バットは真空の刃に斬り刻まれて次々と落ちていった。

やった！ リュウは両肩で大きく息をしながら、口のなかでつぶやいた。

しかし 振り返ったときには遅かった。一匹のバットが猛烈な勢いで突進してくる。攻撃も防御も間に合わない。

だが、どうしたことだろう。きつく閉じたまぶたの先で覚悟していた痛みは、一向に訪れなかった。

「危ないところだったな、リュウ」

まぶたを開けてみると、目の前には左翼から腹の中心にかけて串刺しになったバットの姿があった。

ボツシュ。彼が助けてくれたのだ。バットは穿たれた穴からどす黒い血を流しながら小刻みに震えている。

ボツシュはさつと剣を振るい、まるで唾を吐くようにバットを床に打ち捨てた。

「さて、先に進もうか」

そう涼しげに言う彼の背後には、バットの死骸が鈴なりになって横たわっていた。

死骸は眼球大の穴が腹や頭、身体のどこかしらに穿たれ、その数はざっと見ただけで十数匹はいる。

これだけの大群を相手にボツシュは息一つ切らすことなく、そればかりか「これぐらい出来て当然だろ？」というような佇まい。

リュウは身体を力ませた。ボツシュの前でせえせえと息を喘がせるのが恥ずかしく思えたからだ。

喉の奥で息が詰まりそうなのをこらえつつ、リュウはボツシュの後についていった。

「廃棄デイク処理施設？」

埃や煤をかぶって汚れているものの、壁に掲げられたプレートには確かにそう記されている。

つまり、二人の目前にあるエレベータは廃棄デイク処理施設に通じているのだが、二人はそこを目指しているわけではない。

いままで二人は標識が示す通りに進んできた。ここに来る直前、最後に見た標識には、廃棄デイク処理施設と二人の目指す場所が同じ方向で示されていた。

「ようするに、ここを通って行けってことだろ」

早々とそう結論付けたボツシュはエレベータに乗り、リュウも慌てて彼の後に続いた。

整備用エレベータは簡素な柵が周囲にめぐらされただけの四角い箱。ボツシュが柱についた赤いスイッチを押すと、鉄のチェーンがじやりじやりと金属音を立てながら巻き上げられていった。

バイオ公社下層実験棟へと繋がる通路は、レンジャーが度々世話になるホスピタルの廊下をリュウに思わせた。

床はエメラルド色のリノリウム、所々が張り出した壁は真っ白だ。これまでの銅色で出来た薄汚い建物とは違い、ずいぶんと清潔感があるものの、ハオチャー一匹の気配すら感じられないほどの底冷えした静寂が広がっている。

ぱったりと、前を歩いていくボツシュの足音が聞こえなくなる。

彼の足は扉へと向かい動き続けているのに。それをどうしてか、リュウは不審に感じなかった。

心がある種、恍惚とした状態にあった。誰かが自分を呼んでいる。

いまの彼はそのささやきに誘われるままの人形になっていた。

扉が開かれた。廃棄デイク処理施設。先に入っていったはずのボツシユの姿はなく、リュウの視線は一点に注がれていた。

？竜^{ドラゴン}？。この地に足を踏み入れた者を待ち受けるかのごとく、それは扉を入ってすぐ真正面のところで礫にされていた。

大空を自由に掛けていた翼は溶け、大地を揺るがした両足は姿さえなく、脊椎骨がむき出しになって垂れ下がり、世界の行く末を見守っていた目は大きな空洞となっている。

いまや無残に朽ち果てたドラゴンの巨体。しかし、リュウには分かっていた。この耳に聞こえる声の主が？彼？だということを。

？長い、終わりのときが……終わった。とうに潰えた我が試みを、呼び覚ます者……？

リュウはすうつと伸びた橋の上を静かに歩いてゆく。妙な予感があつた。

それはドラゴンとの距離が縮まっていく毎に輪郭を帯び、？彼？の前に着いた頃には確信に変わっていた。

この絶望に満ちた日常が変わる。いや、変えてくれる。そうだろう？

？いいだろう、小さき友よ……？

まばゆい閃光がドラゴンの口先から広がり、リュウの身体を、絶望を、ゆっくりと？み込んでゆく。

？今一度、空へ？

「リュウ！ おい、リュウ！」

聞き覚えのある声に鼓膜を揺らされ、リュウは目覚めると同時に飛び起きた。

「あれ！？」右に左にめぐっていた目が、一点に止まる。

「ボツシユ……？」

「はあ？ いきなりフラツと倒れたと思ったら……寝惚けてるのか

よ」

「倒れた……おれが……？」

ボツシュはリュウの肩を掴み、強引に立たせた。

「おい、しっかりしてくれよ。行くぜ!？」

いまのは一体なんだったのだろ。夢、なのだろうか。

場所はバイオ公社下層実験棟へ繋がる廊下。床も壁も何も変わっていない。ただ、あの心を押しつぶすような静寂はなくなっていた。前を歩くボツシュの足音もちゃんと聞こえる。そうだ。エレベータでこのフロアへと降り、そのまま普通に歩いていただけなのにまるで現実と夢の境目を感じなかった。

不思議に思いながらも、リュウはボツシュとともにL字型の通路を右に曲がり、突き当りにゲートを見つけた。

なぜか見覚えがある。この先は、あの、ドラゴンがいた部屋じゃなかったか……？

リュウの予感当たった。部屋の奥で、巨大なドラゴンの白骨体が十字に組まれた鉄柱に磔にされている。

「なんだ、これ……!？」

ボツシュは思わず驚嘆した。

施設は天井が高く、各フロアに通じる扉へは橋が懸造りで渡されており、下はデイクの死骸や鉄くずが山積している。

なかには人骨と思われるものまであった。隣虫が舞い、死骸から発せられる臭気と塵が銅色の霧となって視界を覆うなか、その奥に浮かぶドラゴンの巨像はあたかも死神のようであった。

掌や腕、心臓には四本の大きな鉄槍が打ち込まれている。ドラゴンは正面を向いて固定されていたが、それは骨格標本というにはあまりにも不吉な姿だった。

リュウはボツシュとともにしばし啞然としていたものの、不思議と声を感じない。よりおかしい方をすれば、ドラゴンから？ 生氣？を感じないのだ。

夢のなかでは心が恍惚とするほど強大な引力を持っていたのに、

いまのドラゴンにはそれが無い。ただの死骸だ。

不審に思っただけで見つめていると、ボツシュはリュウが怯えていると思っただけ、

「死んでるんだぜ？　噛みつきやしないさ。さ、行こう。リフトに遅れたらまずいぜ」

くるっと踵を返し、ボツシュはさっさと歩き出していった。

リュウは永遠に黙して語らないドラゴンの口先を仰ぎ見ながら、問いかけるようにつぶやいた。

「？アジーン？……？」

どうしてそんな言葉が口を突いて出たのかは分からなかった。

「リフトが出ちまう。急げ、リュウ！」

発車のベルがけたたましく鳴り響く。

ホームへの階段を駆け下り、ボツシュは一足早くリフトに乗り込んだ。

リュウも後に続こうとしたが、係員が前に立ちはだかり、ペンとボードを突き渡された。

どうやら乗員リストに名前を書けということらしい。ボツシュの分も。

「おい、何してんだ、リュウ！」

黄色く塗装された三両編成のリフトの先頭から、ボツシュが柵から身乗り出して急かすように手を振っている。

誰のせいだよ　しかし、いまは悪態をついている時間さえ惜しい。

リュウは記入を終えると同時に振り返り、すでに発進したリフトの後部車両へと飛び乗った。

両手でしっかりと梯子を掴み、呼吸を整える。予定よりも到着が遅れたのは確かだが、何せリフトが故障していたのだ。

リュウは頭のなかで文句を言いながらゆっくりと梯子を上り、小さなバルコニーへと出た。

不意に身体がぐらついて慌てて手すりを掴む。高速輸送車両と名が付くだけあって結構な速度だが、こんなに急いで何を届ける気なのだろう。

屋根の中央には丸いでっぱりがあり、そこはハンドルで開閉するタイプの上蓋がついたハッチとなっている。すなわち、積荷は今まさに自分の足元にあるのだ。

好奇心に引き込まれそうになる身体を強く吹きつける風が阻む。

リュウは片腕で顔をかばいながら通路を進み、銃座の前で柵に背を預けた。

かん、かん、かん。鉄造りの梯子を踏む音が聞こえる。やがてボツシュがその顔を見せ、挨拶代わりに手をあげた。

「リュウ、そんな気難しそうな顔しないで、もっと気楽にいけよ」
ボツシュの視線がちらとハッチに向かう。「何を運んでるのか知らないけど、レンジャーの護衛までついたリフトを襲うやつはいないさ」

貨物を狙い、盗賊や？トリニティ？の連中がリフトを強襲するのは間々ある話だ。そのために置いてきぼりを食らいそうになりながらも、こうしてレンジャーがリフトの護衛につく。

道中あった橋の一つが見るも無残に崩壊していたのだった。つい数日前に何者かがリフトを爆破したからだ。犯人は捕まっておらず、動機や目的は不明のままだが、おそらくは？トリニティ？の仕業だと見られている。

メベト「1/4という男が率いる？反政府？を掲げたレジスタンス組織。リュウたちレンジャーの敵だ。」

確かに、もしも彼らの襲撃にあつたら、という不安がないわけでもなかったが、リュウが気難しそうな顔をしているのは別の理由だった。

「ボツシュ、君には、ドラゴンの声が聞こえた……？」

ボツシュは質問の意図が分かりかねるように眉毛を曲げた。

「急にどうした？」

「さっきの大きなドラゴンのことだよ。不思議だけど、おれ、名前知ってるんだ」

「名前？」

「？アジーン？……それが、あのドラゴンの名前だ」

バカバカしい、とボツシュは鼻先で笑った。

「お前も知ってたんだろ？ ドラゴンっていうのは、？大いなる災い？を引き起こした、言うなりや？邪神？だ。あいつらのせいで俺たちはこんな薄汚い地下で暮らすハメになった。もう千年も前の話だから、地上の暮らしがどうだったかなんて知らないけどな……。とにかく、そんなやつに直々に声をかけられたんだ。お前、やばいかもな」

「ボツシュだって、夢のなかで喰われたんじゃないのか？」

「あれは、別だ」

痛いところを突かれたように答えて、ボツシュは一息、間を置いた。

「ところで、リュウ。お前……俺に手柄をゆずる気ない？」

リュウは耳を疑う。「えっ！？」

「俺の能力だと、あとは大きな手柄があれば昇進できる。うまく行けば？統治者^{メンバー}？の一人にだって、なれる」

別段見るところもない岩窟の景色が矢のように過ぎ去ってゆく。それをぼんやりと眺めていたボツシュの目が、じろりとリュウに向けられた。

リュウは彼の眼差しに寒気を覚えるときがある。暗闇に浮かぶ邪公の両目玉に見つけられたときのような恐怖、危機感。

ドラゴンのことで頭がいっぱいだったリュウは、つかの間の白昼夢から現実へと引き戻されるような気分だった。

「統治者^{メンバー}になんて、まさか……」

「リュウ、俺にはそれだけの資格があるんだ。そう、このボツシュⅡ1/64は、この世界を統治するメンバーの一人になる。いや、ならなきゃいけない」

初めは理想を語るようだった彼の口調が、それがさも自らの？義務？だとも言つような堅苦しい響きへと変わっていった。

「なあ、リュウ。D値1/8192だと……おまえはサード・レンジャーより上には行けない。俺が昇進すれば、お前の後ろ盾になつてやることも出来る」

ボツシュは真つ向からリュウを見据えて、よく言い聞かせるように言った。

「リュウ、俺のために働いてくれ」

ボツシュはその身にどんな過去を、使命を背負つて生きているのだろうか。

これまで謎に包まれていた友人の心が垣間見えた気がする。いや、いまとなつてはもう？友人？とは呼べないのかもしれない。

彼の翠緑色の瞳は力強く自分を見つめているようで、視線はずっとその先に向かっている。ボツシュのなかで、自分は単なる踏み台でしかないのか？

リュウはしばらく黙りこくっていたが　その耳はただならぬ危機の気配を感じ取った。

中央に連なるつらら石をはさんだ向かいの線路に、人型のデイクがリフトを追うように走行している。

背中には人がまたがり、こちらに鋭く何かを向けた。一発、二発、銃声が響き渡る。

一つはリュウの袖口をかすめた。リュウは慌てて銃座につき、ろくに照準もあわせることなくトリガーを引いた。

「強襲デイク？　トリニティか！？」

銃声の隙間にボツシュの怒号が聞こえる。

敵はハンドガンで応戦しながらやがてリフトを追い越し、その姿は闇に消えた。

「あきらめた……？」

目を凝らしながら、リュウはつぶやいた。

「いや……」ボツシュが？前方？に敵の姿を捉えた。

「ちくしょう！　ぶっ壊してでもリフトを止める気だ！」

彼の背中越しにリュウにもしかと見えた。リフトのフロントライ
トに照らされ、敵が何かを　　？ロケット・ランチャー？を肩に担
いでいるのが。

やがて砲口が火を噴いた。この世のすべてが一瞬にして破壊し尽
されるような凄まじい衝撃のなか、リュウの意識は深い奈落の底に
投げ出された　　。

地平線の果てまで真っ白に塗りつぶされたこの景色は、おおよそ
この世の物ではない。

ひどく傷ついた身体を引きずるように、リュウはよたよたと歩い
ていた。

どこへ行き着く当ても、標もないのに、何か強大な力に引き寄せ
られるように足が動く。

何だ？　何と言っている？　自らの息遣いだけがこだまする真空
のような静寂に、それは空間のどこからともなく聞こえてくる。

？おまえを……？

突然、リュウの脳内に幻像ヴィジョンが流れ込んだ。

ドラゴン。その見るも無残に朽ち果てた巨体が全身を震わせ、目
の前で飛び立とうとしている。

聞こえた。いま、はっきりと、それは打ち鳴らされた鐘のように
大きく響いた。

？おまえを選んでやる？

(?) 飛べない羽を持つ少女・前篇・

「今日は歴史の勉強だ、リュウ」

眼鏡の柄をさつと触れて、ゼノはスツールから立ち上がった。

なめらかな岩肌が黒板、四角いコンテナが机。レンジャー演習場の片隅に作られた、ゼノの特別教室だ。

「かつて、世界には？空？という色があった。そして太陽という？光？があり、月という？闇？があった。とても美しい世界だった。

そこには我々の祖先が暮らしていた。人間、獣人、妖精……誰が王様ということもなく、彼らは大空の下を自由に駆け回っていた。

しかし、彼らの平穏を蝕む存在があった。？竜？。彼らは世の安寧を守るために、学問を拓き、魔術を生み、科学をこしらえて兵器を作った。

そうして長い年月に渡り、彼らはドラゴンと戦い続けた。気が遠くなるような闘争の歴史のなかで、高度な科学技術を手にした彼らは、ドラゴンの邪悪な力を利用しようと考えた。

すると今度は彼らのなかで血で血を洗う戦いが起こるようになった。かつて？邪神？と畏怖されたドラゴンは、もはや彼らの手駒、兵器になっていたのだ」

手に書物を開きながら、悠揚ゆうようと歩いていた彼女の足がぴたりと止まった。

「ここまでの歴史が記されたところで、古文書は唐突に終わっている。？大いなる災い？。その一文を残して」

ぱたん、と分厚い書物を閉じ、彼女はおもむろにリュウの机に置いた。あずき色の布で装丁された本は所々がけば立ち、金箔で印字された表題はかすれている。

重い。リュウはペラペラと頁をめくってみるが、この本には膨大な時間が詰まっている。幼い彼の手に、それはまだ大きすぎた。

「それはお前にやる。幼い頃に父からもらった物で、私はもう文面

を思い出せるほど読み込んだからな」

父。どこか懐かしい響きのように感じられたが、同時にひどくよそよそしい感じもする。リュウは両親の顔を知らないのだ。

「ところで、リュウ。この科学や銃がある時代に……どうして私のような？ 剣士？ がいると思う？」

どうせ答えられないと分かっているくせに、ゼノは度々いじわるな質問をふっかけてくる。

リュウはしばらく考えてみたが、やがてふるふるとかぶりを振った。

「魔法も銃弾も、その力を抑えることは出来ても、完全に絶つまではいかなかった。唯一、ドラゴンを倒すことが出来た武器が……？ 剣？ だった。

理由は分らない。純粹に殺傷能力の高さを上げるなら、剣は魔法にも銃弾にも劣る。武器としては最も原始的で、また非効率だ。

それでも邪を払う唯一の聖具として、剣はいかなる時代にも必要とされてきた。無論、その使い手もな」

ゼノはリュウの肩を叩く。「お前は魔法も銃の扱いも苦手だったな。だが、よろこべ。いつかお前の剣は、ドラゴンから世界を救うかもしれないぞ」

これから厳しい稽古が始まる。するとその口元から笑みが消え、彼女はまったくもってドラゴンのようになる。

ゼノは怖いし、いじわるだし、たまに逃げ出したくなってしまうけれど　リュウは彼女との時間が、好きだった。

一度は肉体を離れた魂が徐々に舞い戻ってくるかのように、リュウはゆっくりと目を覚ました。

鉄の焦げるような匂いが真っ先に鼻をつき、視界にはちらほらと火の粉が舞っている。

辺りには黄色い車両が横倒れに、あるいは前部から岩盤に突き刺さり、漏れ出したオイルに引火して所々ぼやが起きていた。

そうか。トリニティの襲撃にあつて、リフトごと谷底まで落ちてきたんだ。

一筋の黒煙がすうつと吸い込まれていく先を目で追うと、そこには闇。急峻な崖と、突出した岩々の鋭さがほの赤く染まっている。幸いにも火が照明の役割を果たしてくれた。明かりがあるだけでだいぶ心が落ち着く。

リュウは通信機を取り出そうと、腰の後ろにつけたポーチに手を伸ばした。がしゃり、と鉄くずを握るような音が鳴る。

通信機だけでなく、ペンライトまでがポーチのなかで壊れていた。おそらくは落下の際に背中をしたたか打ちつけたからだだろうが、しかし、不思議だった。

かすり傷一つ負ってないどころか、よく眠ることの出来た朝のように身体の具合が良い。頭もすっきりとしている。

リュウは小首を傾げたが、途端、一拳に押し寄せてきた不安がそれを打ち消した。ボツシュはどうしただろう。積荷はどうしただろう。

彼は大慌てで確認に向かう。積荷を乗せていた車両は横倒しになりながらも、ハッチは依然として固く閉められていた。が、車体の側面には何か強い力でこじ開けられたような亀裂が入っている。

パチつと勢いよく爆ぜる炎が行く手を塞ぎ、中身の確認も出来ない。リュウはしばし途方にくれた。

いずれにしろ、レンジャー基地に戻る必要があるだろう。任務の失敗を報告しに。

暗い地の底で出口を見つけようと歩き出した彼の足取りは、ひどく重々しかった。

つと、何か曰くありげな物音が聞こえた。火の爆ぜる音とは違し、腹を空かせたデイクのうなり声にしては嫌に甲高い。

人間の悲鳴？ リュウは直感に打たれ、額にかけていた暗視ゴーグルを装着した。

サーモグラフ視界の中央に、鬼火のようにゆらめく熱源がある。

岩間から出たり隠れたりして全体像がおぼつかないが、人型であることは分かった。

だが、リュウは助けを求めて呼びかけることはしなかった。デイクのなかには人間によく似たシルエットを持つ者もいる。サイクロプスやドヴォークウ、彼らは身の丈二メートルを悠に超える一つ目の怪物だ。

リフトを襲ったトリニティの一員が乗っていたのはそのどちらか。鋼のような肉体に、リフトと張り合うほどの馬力を誇る足腰。人を乗せて自在に岩場を飛び、駆け回るために開発された乗用のデイクだ。

もしかしたら、あれは例のトリニティかもしれない。リュウは熱源を追って、狭くてごつごつとした岩道を進んだ。ときに歪な地形に足を取られそうになりながらも、対象との距離を着実に縮めてゆく。

やがて強い光を感じ、リュウはゴーグルを外した。それは廃工場らしき施設の玄関につけられたポーチ・ライトだった。対象は先ほどこのなかへと入って行った。

室内は埃や錆びた金属の匂いで満ち、部屋の四隅に付けられた白熱灯が明滅を繰り返している。ここは鉄くずやスクラップの集積場らしかった。

扉の形をした四角い枠が、次のフロアへの道順を示している。その奥から、どす、どす、どす……。粉の詰まった袋を踏みつけるような音が、不気味な響きを帯びて聞こえてくる。

リュウは気配を殺しながら慎重に、かつ急いで足を運んだ。部屋に入ってすぐのところにあつたスクラップの築山に身をひそめ、ちらと外を覗きこむ。

女の子だ。女の子？ リュウは我が目を疑った。今まさに、サイクロプスが自分の眼前を横切ろうとしている。その分厚い腕のなかで、少女が鎖の束縛から逃れるようにじたばたもがいているのだ。リュウは嘆くように一人かぶりを振る。その声にもならない悲鳴

を聞いた、涙でいっぱい瞳とさえ視線が合った。しかし、無我夢中だったのだろう。少女はサイクロプスと同様にリュウの存在に気付いていない。

このままじつと身を潜めていれば助かる。おれはサード・レンジヤー、D値1/8192のローディ。あんな怪物とまともに戦って勝てるわけがない。

だけど、本当にいいのか？ おれはまた繰り返すのか？ ？お前は？また、無力なままで終わるのか？

ぶつと糸が切れたように、身体底から怒りにも似た闘志が湧き上がる。いままでに感じたことのない力の奔流。

それはやがて真紅のオーラとなって体外へとほとばしり、紺色に澄んでいた彼の瞳は燃えるような赤に染まっていた。

あいつを倒す 彼はスクラップのうえに飛び乗り、剣を抜きざま再び高らかに飛翔。刃は矢のごとき速度と威力を持って、サイクロプスの背中を斬り貫いた。

緑色の血液とともに、その口からどよもすような金切り声が噴き出した。サイクロプスはめちゃくちゃに腕を振り回し、肩口に乗っていたリュウを振り落とした。

スクラップの側面にしたたか背中を打ちつけたものの、まるで痛みを感じない。理性や恐怖もとうに吹っ飛んでいる。いまはただ、目の前の敵を倒す、破壊する。その衝動だけに突き動かされていた。サイクロプスの胸から飛び散る血しぶき。その一滴一滴を正確に捉えるまでに神経が研ぎ澄まされていた彼にとって、眼前に振り下ろされた拳をかわすなどは造作もないことだった。

リュウは素早く背後に回り、剣を握る手と足に力を込めると、一息に地面を蹴った。刃が斜めに閃き、少女を抱えていたサイクロプスの左腕が宙を舞った。

耳をつんざくような絶叫を背中に受けながら、リュウは両手にしかと受け止めた少女の安否を確かめる。シヨックのあまり気を失っているが、呼吸は感じられる。

どす、どす……。あの重量感のある足音が近づいてくる。リュウは静かに振り返り、あらぶる敵と対峙した。

それが顔と言わんばかりの巨大な一つ目。腹筋が六つに割れた雄々しき肉体。片腕を失い、おびただしい量の血を流しながらも、万雷のごとき雄叫びを上げるほどの生命力。

残された三つ指が鉄塊のごとき拳を作り、急加速をつけて振り下ろされたのよりも早く　リュウは先ほど穿った穴の下を貫き、剣の柄尻に左手を添えて、そのまま前へ前へと体重をかけた。

力強く踏ん張っていたサイクロプスは、しかし、リュウの力に負けてかかとかからコンクリートにめり込み、ずりずりと地面を掘り進みながら一直線に押し流されてゆく。

その巨体を壁が受け止めた頃には、サイクロプスはすでに瀕死の状態にあった。一つ目が力なく瞬きを繰り返す。

リュウは素早く剣を引き抜き、終の一刺し。大目玉がぶしゃつと弾け、やがてサイクロプスの全身からふつと力が抜けた。

「はあ、はあ……」大きく息を喘がせる彼の周囲から、真紅のオーラが空気に溶け込むように消えていった。同時に脳内を占めていた破壊衝動が失せ、理性が戻ってきた。

リュウはいまさら腰が抜けそうになるほどの恐怖を感じた。目の前でうなだれるサイクロプスではなく、この数分間の自分に。

何だ？　この力は何だ？　思い返してみれば、戦っている間はまるで自分の意思が働かなかった。この身体を誰かに操られているかのような感覚だった。

リュウは返り血に汚れた掌を見る。それはかすかに震えていた。何だ、何なんだ、おれは……？　誰なんだ？？

動揺する彼の瞳が、遠くで横たわる少女を捉えた。彼は剣を鞘に収めながら駆け寄り、少女の顔を覗き込んだ。

思わず息を呑む。それまで脳内にはびこっていた不安や疑念は、一瞬のうちにかき消えた。

この色素の薄い金色の髪も、白い肌も、か細く流れる四肢の輪郭も、すべてがガラス細工のように繊細だった。

リュウは革の手袋を取り払い、そっと少女の背中に両腕を回した。薄汚い返り血でこの美しさを曇らせてはいけないと、あるいは血の一滴すら少女にとっては致命傷になるかもしれない。

とっさにそう思わせるほど、少女はもろく、無闇に触れてはいけない物なのだと五感が訴えてくる。

少女の顔が一瞬、苦痛を感じたようにゆがみ、やがておぼろげにまぶたが開いてゆく。

それが完全に開かれ、リュウを見つけると、少女は小さく声をこぼしながら彼にしがみついた。まるで深い闇に吸い込まれそうになる身体を必死に繋ぎ止めるかのように。

「大丈夫。あいつは、倒したよ……」

思考が止まった頭のなかから、一つ一つ言葉のピースを探すように、リュウはただたとしくささやいた。

間近に見る少女の黒い眼は、表面に透き通った水をたたえ、なかに神秘の都が広がっているのではないかと思わせるほど、心をひきつける力があつた。

リュウは小刻みに震える身体を肩からおろし、「立てる？」と言うと、少女はゆっくりとうなづいた。

「おれは、リュウ。きみは……？」

少女は腰周りについた埃を払い落とし、おどおどするような視線をリュウに向けた。

「ニー……ニー……」

喉の奥につつかえている物を吐き出そうとするように、少女は懸命に言葉を紡ごうとする。

そして痛そうに、齒痒そうに身じろぎしながら、やっと、それらしい単語を口に出すことが出来た。

「ニー……ナ……？ きみ、声が……？」

リュウの言わんとしていることを察し、少女　ニーナの表情に、

暗い影が降りた。

何か悪いことをしてしまった気がしつつ、リュウはおもむろに踵を返した。

「とにかく、ここを出よう。安全なところまで行かなきゃ」

しかし、ニーナは元の場所で身をすくめたまま動かない。

怖いのだろう。サイクロプスのような怪物が、外の世界が。

「おいで」

リュウは手招きし、力強く「行こう！」と言った。

しばしためらうような仕草を見せたあと、ニーナはぺたぺたと音を立てながら駆け寄ってきた。

彼女は裸足で、手術の際に患者が着るスモックのような、薄地の白いベールしかまとうていない。

そして、何より。彼女の背中には一対の赤い羽が生えている。「翼」と呼ぶにはあまりにもか弱く、彼女が動いたびに白い光の粉がふつと虚空に散らされた。

リュウが手を差し伸べると、ニーナはそれを遠慮がちに、すこしぎこちなく受け取った。

瞬間、何故だろう。彼女を守らなければと、リュウは思った。

二人が立ち去ってからまもなく、とある人影がフロアに降り立った。

生き物のようにうねる長い尻尾。フードに隠れた獣耳。タイトな藍色のシヨート・ワンピースに締めつけられるように膨らむ乳房。薄がりに浮かぶその姿は、あでやかな女体の輪郭を持っていた。彼女は床に飛び散った緑色の血を追いかけて、壁にもたれたまま死んでいるサイクロプスの前で足を止めた。

口から上が暗視レンズ付きのマスクで覆われ、彼女の瞳や表情の機微をうかがうことは出来ないが、彼女はどこか名残惜しそうにサイクロプスを見つめていた。

『今回の任務は』

ふと、彼女の脳裏に低くしわがれた男の声がよみがえる。

『下層区バイオ公社から搬送される……積荷の確保』

彼女は訊ねた。『それは、一体何ですか？』

『人の形をしている。それも、おそらくは……？子供？だ』

そのとき、彼女は自分と男の間の光が怪しく輝いたように感じた。長い沈黙ののち、男は悟ったような、諦めたような態度で言った。

『この世界がいかに疲弊しきっているか……それが分かる事例だよ』
彼女はつと振り返り、その足は二人が向かった先へと静かに動き出していた。

(?) 飛べない羽を持つ少女 - 後篇 -

ニーナ。それが彼女の名前らしい。

何かに怯えるようにうつむき、いつそ亡霊のような足取りで歩く。この手に彼女という存在を握り締めているのに、どこか実体を感じられない。幻なんじゃないかと、思わず疑ってしまうほどだ。

リュウは絶えず彼女を気遣いながらゆっくりと進んだ。こちらはブーツを履いているから何の問題もないが、彼女は裸足だ。

銅でコーティングされた床はざらざらとして表面が粗く、ネジや尖った鉄の断片がそこらじゅうに落ちていている。ディクの排泄跡と思しき染みもある。

そんなところを歩かせるわけにはいかない。右腕と左足首に錘のような分厚い輪をはめている以外、彼女は赤子のように無防備なのだ。

通路の突き当たりでエレベータを発見したが、電気系統をディクに食いちぎられているのか稼動せず、リュウは近くにあつた整備用梯子を使うことにした。

先に自分のぼり、ニーナの手を引く。まるで昏睡状態にあるかのような、意識がはつきりとしていないらしい彼女の面差し。いつまぶたが閉じて、ふっと梯子から落ちてしまふかりュウは肝を冷やしっ放しだった。

だが、それは単に外見から受ける印象であることが分かった。梯子から引き上げられると、ニーナは自分の意思できよきよと首をめぐらし、薄がりのなかで何かを見つけた。

するとそちらのほうにぱたと駆けていってしまい、リュウは彼女が何をするのかと行方を見守った。

「うー？」

所々が錆びた鉄のチェスト。

錠前は壊れており、ふたはうつすらと開いている。ニーナは物珍

しそくに手を伸ばした。

「うあ！」

途端にチェストが跳ね上がり、額に一对の触手を生やした奇怪な生物が姿を現した。

「ニーナ！」

リュウは腰が抜けて動けなくなったニーナの手を取り、通路へと逃げ込んで立てつけの悪い鉄扉を強引に閉じた。

噂でしか聞いたことがないが、宝箱やコンテナを背負って風景に溶け込み、それに近づいた者を襲う巨大カタツムリがいるという。

いまのは明らかにそれだ。リュウは鉄扉に背もたれてほっと胸をなでおろしながら、諭すように言った。

「だめだよ、ニーナ。気になるからって無闇に触っちゃ」

ニーナは上目遣いにちよっと残念そうな顔をして、こくっとうなづいた。

こういった反応を見るに、彼女は言葉を理解出来るらしい。ただ、何らかの事情で声を失っているのだ。

それに自分の意思もはつきりとしている。今だって、好奇心の赴くままに行動したじゃないか。十二、三歳の子供らしく。

彼女をどこか魂の抜け殻のように感じていただけあって、この発見はリュウを安堵させた。彼女には心がある。生きている。

しかし、一方で疑問は尽きない。たとえば肩や首元、腕や足に規則的に刻まれた青い文様について。見るからに飛べそうにない赤い羽について。

思い切って口に出そうとするが、それはいつも寸でのところである。彼女は答えを言うための術を持たないのだ。

だが、これだけは答えて欲しい質問として　どうしてこんな場所にいるのか。サイクロプス、恐らくはトリニティの所有物と思しきデイクに、さらわれかけていたのか。

リュウの脳裏に、車体の側面を引き裂かれたリフトの姿が浮かぶ。まさか。

リュウはちらりと、彼女に悟られない程度に横顔を覗き込む。そうだ。こんなに可愛い子が、リフトの？積荷？であるはずがない。

二人は半壊になっていたドアをこじ開けて、新たなフロアへと足を踏み入れた。

すると、デイク？ 何か平穏ならざる物音が聞こえた。

顔をマスクで覆った人間が、ハンドガンを構えて物陰から飛び出してきた。とつさにリュウも剣を引き抜いて逆袈裟に斬りかかる。

銃声が高らかに鳴り響いた。それにおどろいて地面にへたり込んだ二ーナがおそろおそろまぶたを開けると、リュウは尻もちをついた状態で、相手の首に刃の切っ先を突きつけていた。

一方、相手もリュウの額に銃口を向けている。まさに一触即発の状態だった。

「トリニティか？」

「レンジャー、その子を置いていけ。君では……その子を救えない」
膨らみのある胸、甲高い声質、相手は女だった。

「なに……？」

「我々はその子を必要としている。この腐った世界を変えるためにな……」

女の後ろには長い尻尾が地面を這うようにして垂れている。獣人リュウは一瞬それに気を取られたが、すぐさま視線を女の顔に戻した。

「何を考えているのか知らないけど……犯罪者の言うことを聞く気は、ないね」

女は鼻先で嘲笑った。「立派だね、レンジャー。けどね……」
淡々とした口調で、女は続けた。

「君の目に映っている世界だけが、すべてというわけではないんだよ……」

ただ生きてるだけなら、知らない方が幸せなこともある。君は、私には会わなかった……。羽の生えた女の子もいなかった……。いい

ね？」

ついで、女は少し離れたところにいるニーナを見やった。

「さあ、おいで。私と一緒にいこう」

するとニーナは意を決したように立ち上がり、ぱたぱたとリュウの下へ駆け寄った。

そして自分を守るといわんばかりにリュウをかばい、女をにらみつけた。

「そのレンジャーといっても、君は救われない……」

しかし、ニーナの瞳は頑なだった。

女は困ったようにため息をもらし、やがて根負けしたふうに言った。

「分かった、レンジャー。手を結ぼう。ここを出るまで」

「何を企てる……？」

「その子を保護しようって目的は、同じだろう？」

女はおもむろにマスクを外し、その素顔が露わになった。

リュウが想像していたよりも優しく、それでいてどこか悲しげな

誰かの未来を暖かく見守りつつも、いつかその身を襲うだろう

不幸を憂いてもいる、そんな複雑な表情だった。

「私は、リン。よろしく」

しかし素顔を見せてくれたといって、すんなりと心を許すわけにはいかない。相手はトリニティ、何を考えているのか分からないのだ。

リュウの眼差しから敵意が消えないせいか、リンは努めて親しげに言った。

「あんたも、よろしくな。レンジャー」

リンという女は、なぜか施設の間取りに詳しかった。この階段がどこに通じているか、この部屋は何に使われていたか。

「ちよっと昔、ここで厄介になったんでね」それが彼女の答えだった。

過去にトリニティのアジトとして使われていたのだろうか？ リュウはリンの尻尾を目で追いながら、あれこれと考えをめぐらした。リンが先頭を歩くのは、何も彼女が案内役を買って出たというだけではない。もしリュウが彼女の前を歩いていくとして、いつ後頭部に銃弾が飛んでくるか分からないからだ。

しかし、それはリンにとっても同じはず。更にこちらは用心して剣を抜き身になっているにも関わらず、彼女はハンドガンを腰のホルスターにしまっている。

リュウはますます不思議に思った。ニーナが目的なら、さっさと自分を殺して連れ去ればいいのに。

疑念に耐えかねて、リュウは訊ねた。

「さっきリフトを襲ったのはお前だろう？ ロケット・ランチャーまで使って……なのに、なんでいまは何もしないんだ？」

リンは背中を向けたまま答えた。
「私の目的はその子連れて行くことであって、あんたを殺すことじゃない」

「でも……」

「しつこいやつだね」リンはぴたりと足を止め、肩越しにニーナをちらと見やった。

「誰だって、小さな子が悲しむ顔なんて見たくない。犯罪者にだって……心はあるんだ」

リンは冗談めかして言い、くすつと掴みどころのない笑みを浮かべた。

「そう、か……」

リュウは啞然とするほかに言葉が思いつかなかった。

レンジャー基地、隊長室。

窓に差し込む人工太陽の光が部屋を真っ赤に染め上げるなか、ボツシュは身体を震わせていた。

上司の叱責が怖いのではない。任務に失敗したという？ 屈辱？ に

打ち震えているのだ。

「トリニティの襲撃……リウは行方不明……そうですか」

抑揚のない声で応えながら、ゼノの瞳はかすかに憂いを帯びていた。

「それで、積荷はどうしました？」

「積荷！？ 俺は、殺されそうになったんだぜ！？」

「あれは、極めて機密性の高いものです……。報告に戻るより、積荷の確認を優先すべきでした」

ボツシュの視線が狼狽しきりに足元をさまよう。「あ、あの高さから落ちたんだ……あとかたもなく……」

ぴしゃ、とゼノは書類を挟んだボードを中指で小突いた。

「ボツシュ……上層部は、言い訳を好みません。積荷の確認、そして、確実な？ 処分？ を望みます……」

くつと眼鏡を持ち上げ、ゼノの眼光が鋭く冴え渡った。

「いいですか。？ それ？ が、どのような姿をしているとしても……完全に処分するのです」

ボツシュが慌てて部屋を飛び出して行ってからしばらく。彼の去り際はさながら負け犬のようだった。

高いD値に恵まれたとはいえ、偉大な剣士を父に持つとはいえ、所詮は十六の子供。精神が未熟なのだ。

ゼノはブラインドをめくり、人工太陽をぼんやりと仰ぐ。時々思うことがある。

いや、それは何十年と組織に尽くし、一定の地位についた者なら誰でも胸に秘めることかもしれない。

組織への、そして自分への疑念だ。悪化の一途を辿る地下都市全体の大気汚染に対して、上層部はある計画を推し進めている。

到底表沙汰には出来ない非人道的な計画だ。しかし、大気が浄化され、人々の暮らしが守られるなら止むを得ない？ 犠牲？ なのだというのが、上層部の考えだ。

彼女自身、彼らの？ 手駒？ として計画の邁進に加担している。今

さら「嫌だ」という我を押し通して組織を抜けることなど出来ない。そうするためには、彼女は長く組織にい過ぎたのだ。責任がある。裏切れない信頼や期待、長い年月のうちにびっしりと根差したしがらみがある。

だが、単に勇気がないだけなのではないか、そう指摘されたら言い逃れ出来ないのも、また事実だった。

自分の心はとくに腐っている。命令通りに働くだけの機械と化している。剣の指導員として働いていたときから、彼女は上から与えられたマニュアル通りに幾人もの訓練生を指導してきた。義務的に、何の感情もなく。

そうしてレンジャーになった彼らは、いま立派な人間として生きているだろうか。いや、ほとんどは公儀権力の笠を借りて横暴に振る舞い、ローディたちを踏みにじる下衆と化している。

世界を汚す分子たちの誕生に、彼女は一役買ってしまったのだ。それに気付き、自責の念に苦しんでいた折、彼女はリュウと出会った。

一切のマニュアルを捨て、ときに姉のように、母のように、彼女はリュウに接した。

そのおかげかも分からない。リュウは決して優れたレンジャーではないが、少なくとも自分の利益のために誰かを傷つけるような人間にはならなかった。

ゼノが下層区レンジャー基地の監督官に任命されたのは、リュウの訓練期間が終わってまもなくのこと。それから彼女が教え子を持つことは二度となかった。

リュウ。心から向き合うことの出来た、最初で最後の教え子である彼には、自分の果たせなかった想いを全て託してある。D値の低さなどは関係ない。

だから、生きて、この様々な歪みを抱えた世界の、ほんの一部分でもいい。

変えて欲しいと、願うのだ。

（？）究極の破壊者 - 前篇 -

一二〇〇メートル。自分たちのいる場所は、大体その辺りだろうとリンは言った。

リュウが暮らす下層区街でちょうど一〇〇〇メートル。それより深い最下層区は都市化が進められておらず、採鉄プラントや下水処理場などライフラインに関わる施設が集まった工業地域となっている。

人工化されていない天然の空間は野良デイクたちにとって格好の棲み処であり、現状ほとんど野放しだ。治安も衛生環境も？最下層（世の底）？に相応しい劣悪ぶりだが、一方で貧民層に残された最後の生活圏でもある。

人口増加に対する居住ドームキャパシティの許容量には限界があり、D値が低い者のなかでも高齢、病弱などの理由で職につけない者は次々と淘汰される。罪を犯してD値、すなわち政府発行のIDナンバーを抹消された者も同様だ。

社会からつま弾きにされた彼らはおのずと最下層区に集まり、やがて？貧民窟？と呼ばれる集落群を築き上げた。ちょうどバイオ公社の実験施設から逃げ出したデイクたちのように、自らの棲み処、コミュニティを形成したのだ。

貧民窟はアリの巣のように張り巡らされている。リン曰く、この施設の最上階にあたる場所から貧民窟の一つに出られる。更にそこから下層区行きのリフトが出ているそうだ。

リュウはほつと胸をなでおろしたが、すぐに「相手はトリニティだぞ」と気を奮い立たせた。話が出来すぎている、これはひょっとしたら罠なのかもしれない。

「レンジャー、疑う気持ちは分かる」

心を見透かしたような物言いに、リュウはどきつとした。

「だけど、ここを出るまでは？同盟？だと言ったはずだ。私の言

うこと、少しは信じてもらいたいもんだね」

しかし、リュウの顔から警戒の色が薄らぐ気配はない。

「無理、か……」リンは自嘲気味にくすりと笑った。

廃れた壁や床の具合を見るに、施設は人の手を離れてかなりの時間が経っているらしかった。

しかし、通路の照明は所々生きている。電気が通っている証拠だ。やる気のない工員が施設閉鎖の前に電源を落とし忘れたのか、あるいは浮浪者が住み着いているのかもしれない。

じりじりとストロボのように瞬く黄色の電灯、腐敗した金属の匂い、滴る水が下水管に音を立て、廃墟特有の鬱蒼とした空気と底冷えした静寂とが怪しいコントラストを作っている。

あまり長居したくはない場所だ。かさかさ、かさかさ、という何かがうごめくような音がどこからともなく聞こえてくる。排水溝から虫が飛び出して、一行の前を素早く横切っていた。

鎧のように黒く艶めく扁平状の体、鋭い双眸、カナクイと呼ばれる昆虫型のデイクだ。ひゃっ、と怯えるニーナの肩を、リュウは安心させるようにぼん、ぼんと叩いてやった。

ここはデイクの巣窟となっている。先ほどから耳に聞こえる不気味な物音も、その源を辿っていけばデイクに行き着くだろう。一行の足はおのずと早まった。

T字型になった通路の一方へと進んでいくと、突き当たりの壁に梯子がかかっていた。

ここの工員はもらっぱら階の昇り降りに梯子を使っていたらしいが、リュウは地階にあったもののほかにエレベータはないのかと訊ねてみた。

「それがないから、みんなここをやめちまったのかもね」

冗談っぽく言いながら、リンは梯子をのぼり始めた。

リュウは目のやり場に困る。レオタードのような衣服を着ていながら、彼女はまるで男の視線というのを意識していない。

更に長い尻尾がうねうねと動いて、顔を下に向けていても毛先が

鼻にかかる。これは妨害を目的とした嫌がらせなのか？ と、リュウは盛大にくしゃみをしながら思った。

梯子は三階を抜けて四階まで伸びていた。直線距離にすれば七、ハメートルと言ったところか。

リュウとリンにとつては大した移動ではないが、ニーナは小さく息を喘がせて疲れの色を見せている。

近くに小部屋を発見し、一行はそこで休むことにしたが 先客がいた。

バインド・スパイダ。四本の長い肢と頑強な顎を持ち、普段は天井に張り付いている。

部屋へと踏み入った一行は彼らの歓迎を受けたというわけだ。身体の成熟した者から小さな者まで、次から次へと天井から降りてくる。ざっと目にしただけで十匹近くはいた。

肢を小刻みに動かして前進する姿は一見すばしっこく感じられるが、実際はのろい。

リンは慌てることなくハンドガンを抜き出し、構え、マガジンに装填されている弾丸の数だけ銃声を鳴らした。

あまりの爆音に驚いたスパイダたちは、壁の穴から隙間から、文字通り蜘蛛の子を散らして消えていった。リンは一匹たりとも殺すことはなかった。

もしも彼らを全員残さず倒していたら、通路はこの部屋を抜ける以外には広がっていない。自分たち、特にニーナが裸足で血溜まりのなかを歩くことになる。

それを配慮してのことだったのだろう。梯子の件で、彼女は大雑把で細かいことには無頓着な性格かと思っていたが リュウは少し、感心した。

一行のいるところは工員の休憩室に使われていたらしく、二段ベッドやスチール製の机や椅子などが置かれている。また同じ用途の部屋が道なりに連続しており、一行は二つ目の部屋で足を休めることにした。

何気なく下段ベッドに腰を下ろすリュウ。マガジンに弾を込めているリン。

ニーナは地べたに座り込んでいたが、やがて思いついたように立ち上がると、元来た部屋のほうへばたばた走っていつてしまった。おとなしく見えて、彼女は好奇心の塊なのだ。

「あの子が何なのか、訊かないのか？ レンジャー」

ハンドガンホルスターにしまい、ベッドの細い鉄柱に背を預けると、リンがおもむろに話しかけた。

「訊けば教えてくれるのか、犯罪者？」
トリニティ

本当ならニーナについて訊きたいことは山ほどあるのだが、リュウはとつさに強がってしまった。

「正直なところ……私も詳しくは知らされてないんだ。けど、ね。レンジャー」

リンの目線の先で、ニーナがぼんやりと天井を仰いでいる。

またいつスパイダが現れるか分からない。リンの指先は密かにハンドガンにかかっていた。

「あんたが守ろうとしているこの世界は、それほどまっとうなものじゃない……」

分かっているさ。そう答えそうになったのを、リュウはぐつとこらえた。相手が同業者ならいざ知らず、敵対者に言われて合意するわけにはいかない。

しかし、彼女はなぜこんなことを言うのだろうか？ トリニティとは犯罪者と訳されると同時に、反逆者とも呼ばれる。

元々は政府の人間だった者が、彼らの生み出す不条理に耐えかねて反旗を翻すのだ。ひょっとしたら彼女は、自分と同じレンジャーだったのかもしれない。

「行くよ、ニーナ」

長い沈黙のあと、結局リュウはリンに訊ねることはしなかった。

どうしてトリニティ（反逆者）になったのか。経緯はどうあれ逆賊になった時点で、彼女はIDを抹消されているはずだ。

それは社会に居場所がないことを意味するが、あの忌々しいD値という呪いから解放されたとも言える。

自由の身。いや、本当にそうか……？

前を進むリンの背中が、なぜだか急に小さく見えた。

新たに二つ梯子をのぼり、一行は施設の最上階へと降り立った。

施設内を歩いていて気付いたことだが、ここはどうも廃棄物を処理するだけの場所ではないらしい。

フェンスやパーテーションで室内が分割され、空間的にも少し開けた部屋をいくつか通ってきた。そこに入ると決まって二ナが怯えたように腕を掴んでくる。

部屋にはこの世で最も残酷な拷問を受けたとでもいうような、惨たらしいデイクの屍が累々と横たわっていたのだ。

死体にはどれも個体識別の番号プレートが付いていたことから、おそらくは実験体だろう。すなわち、この施設は過去にバイオ公社の息がかかっていたということだ。

いや、むしろ下層区周辺でバイオ公社の息がかかっている施設を探すほうが難しい。日々粗製乱造される新型デイクの？性能？を試すべく、本来は違う目的で作られた施設が得体の知れない実験機関と化する。

この施設もその一つなのだろう。リンは昔ここで厄介になったと言っていたが、元はバイオ公社の社員だったのだろうか？

リュウは絶えず考えをめぐらしていたが、そうやって気を紛らわせていないと、死骸が発する臭気の渦に飲み込まれてしまいそうだった。

さながら悪夢のような部屋を抜け、分厚い鉄扉で蓋をしてしまうと、一行の前に細い十字路が広がっていた。

このまま真っ直ぐに進めば貧民窟に出られるそうだが、しかし。リュウとリンはさっと身構える。？番人？が立っていたのだ。

ドヴォークウ。サイクロプスと同じ巨人型の乗用デイクだが、あ

ちらと比べると華奢な体付きで、クリーム色の肌や幅広の耳は愛玩動物として親しまれる？地底ウサギ？を思わせる。

彼らは手と足を鎖で繋がれ、低い壁で仕切られたブースのなかで大人しく立っている。

どうやら野生化していないらしく、リュウは自分たちを物珍しそうに見つめる一つ目に愛嬌すら感じた。

通路の左右に連なるブースは二十近くあったが、残っているのは五体のみ。リンは銃をホルスターにしまい、そのなかの一体の首元を優しくなで始めた。ドヴォークウはくすぐったそうに身じろぎする。

デイクは本来、人間に尽くすために生み出された人工動物だ。基本的に人間を襲うことはないし、知能が高いために飼い主の顔を死ぬまで覚えている。

先ほど自分が殺したサイクロプスだって、リンとの時間を記憶しているのだ。もちろん、飼い主である彼女も。

どうする。謝るべきか。リンはそもそも自分のデイクが死んだことを知らないのかもしれないし、あるいは、それを責めたところでどうにもならないと思っているのだろう。

むしろ別行動を取らせていた自分の責任だと悔やんでいるのかもしれない。しかし、相手は犯罪者^{トリニティ}。そして自分は、犯罪者を取り締まるレンジャーだ。ふと、リンがくちびるに指を当てて「しっ！」と静寂をうながした。

フードのなかでぴくりと動く獣耳が物音を聞き取ったらしい。リュウは辺りに視線をめぐらすと、それは通路の先に開けられた穴からのっそりと顔を見せた。

一つ目と目が合う。手足の鎖はすでに断ち切られたあと。野生化したドヴォークウだ。その右腕には何か肉片らしき物体が大事そうに抱えられている。

ドヴォークウはリュウたちと仲間の関係を探るようにしばし目を瞬かせたあと、急に雄叫びをあげた。どうやら？敵？だと判断され

たらしい。

リユウはいちはやく剣を握って駆け出す。が、それはリンも同じだった。

通路が狭いために、二人の身体は絡まるようにつつかえた。

「ジャマだよ、レンジャー！」

「あんただって！」

四の五のしている間に、ドヴォークウは姿勢を低く構えながら突進してくる。

そして左腕を天井すれすれまで掲げ、拳という鉄球をぶん投げるように振り下ろした。

「ぐお……っ！」

リユウは真正面から殴打を食らってはるか後方の壁に激突。とっさに剣を構えて衝撃をやわらげたものの、一時的に気を失った。

「ちっ」舌打ちを一つ、リンは壁に向かって走り出した。

「こつちに来な！」

ブースの低い仕切りを踏み台に、リンはドヴォークウの頭上を飛び越えた。

一発、二発、銃弾を背中に撃ち込むが、ドヴォークウは怯むどころかいよいよ激昂。身体を反転させるやいなや、めちやくちゃに左腕を振り回し始めた。

リンが軽やかな動きで拳打をかわす度に、壁や床が碎け散ってゆく。他のドヴォークウたちは声援とばかりにがり声を上げていた。後退していたばかりのリンだったが、やがて意を決したように突入。ドヴォークウの攻撃をかいくぐり、懐にもぐりこんだ。

そしてふっと地面を蹴り、銃口を顎先に押し当てる。決着だ。「貫け」

至近距離で放たれた弾丸はドヴォークウの脳天を貫いた。

操り糸が一本一本切れていく人形のように、ドヴォークウはふらつき、どつと大きな音を立てて背中から倒れ込んだ。

その胸に抱えていた肉片が血しぶきとともに飛び散り、辺りにほ

のかな腐臭を漂わせる。あれだけ吠え立てていた仲間たちの声もぴたつと止まり、場は一変して静まり返った。

「こいつは、仲間を守ろうとしただけなのかもしれないね……」

リンは誰に語りかけるでもなく、ぼつりと呟いた。ブースに残されたドヴォークウはみな、鎖に繋がれたまま忘れ去られてしまっているのだろう。

そして戦闘中、我を忘れてもなお、彼が肌身離さず持っていた肉片は、決して迎えに来ることのない主人を待ち続ける仲間のための食料だ。

一旦は鎖に向けた銃を、リンはやがてホルスターに戻した。ここで彼らを解き放ってしまったら、仲間の仇討ちをされるに決まっている。

「行こう。ここは、危ないよ……」

リュウはそつと彼女に声をかける。戦闘の一部始終を見ていたが、あの軽快な身のこなしは獣人にこそなせる芸当だ。

敵に回したらかなり手強いだろう。いや、立場としてはとくに敵同士なのだった。それを一瞬忘れてしまうほど、彼女を頼もしく感じている自分がいた。

「傷は大丈夫なのか？」

「ああ。全然、痛くないよ」

あんなに強く吹っ飛ばされたのに？ とリンは怪訝そうに眉根を寄せたが、本当に痛くもかゆくもなかった。ニーナに心配な顔をさせているのが申し訳なく思えるぐらいだ。

やがて足早にその場を後にした一行だったが、リュウはあることに気付いていた。ドヴォークウの手足についている鉄の輪。それはデイクを鎖に繋ぐための物であるのだが、ニーナがはめている輪と形も材質もまったく同じだった。

すると、ニーナは　ここで彼は、考えることをやめた。

(?) 究極の破壊者 - 後篇 -

岩場に出来た隘路あいちろを抜けると、暖かい火の明かりが三人を出迎えた。

鉄くず町。橋の入り口にかけられたアーチには、かすれた文字でそう記されている。

つとリュウの後ろに隠れていたニーナが駆け出した。きよろきよろと辺りを見渡し、ぱたぱたと橋を渡ってゆく。まるで何年かぶりに生まれ故郷に帰ってきたかのような様子だった。

ニーナの進む橋は一段一段の間隔が広く、手すりもつけられていない。梯子を水平に使ったかのような粗末で危なっかしい物だ。

それがいくつも連結されて、町の至るところへ繋がる空中通路になっている。地面まではせいぜい二、三メートルの高さだが、ニーナはガラスだ。

落ちたらひとたまりもないのだが、二人の心配をよそに、彼女は慣れた足取りでどんどん進んでいった。

「あの子、急にどうしたんだろうね……」

リンがつぶやく横で、リュウも同じことを考えていた。

彼女は橋の下に何かを見つけたらしい。覗いてみるに、老婆が若い男の子と一緒に焚き火を囲んでいる。

一行を出迎えた光の源だ。それが貧民窟全体を温もりある色で満たし、妙に懐かしいような、優しい気持ちにさせてくれる。

二人は橋の上で慎重に足を運びながら、目線でニーナを追った。

彼女はスロープを下り、老婆のもとへ駆け寄った。

手振りや身振りで彼女は何事か老婆に訴えかけているが、まったく通じていないようだ。二人がたどり着くと、ニーナはしょぼくれた顔でリュウのところへ帰って来た。

「婆さん、あの子のこと知ってるのか？」

はて、と老婆はリンの問いかけに応えた。

ついで「うーん……」としわがれた喉を鳴らすと、「知ってるよ
うな、知らないような……」と小首を傾げた。

「坊やはどうだい？」

近くにいた男の子の反応も芳しくなかった。というより、彼はま
だ幼すぎて質問の趣旨さえ理解してないらしかった。

彼らの衣服は煤と塵にまみれ、もう何日と洗われていないのが分
かる。まるでボロい布切れを身体のおちこちに貼り付けたかのよう
だ。

どう？ と訊ねたリュウの視線に、リンは静かにかぶりを振った。
リュウの横で、ニーナは膝を抱えていじけている。

「ずうつと前に」

老婆がつと口を開いた。

「あんな子を見たような、気がするんじゃないけれど……」

「どつちなんだい、婆さん」

緩慢とした老婆の口調に、リンは苛立ち半分、呆れ半分といった
様子だった。

「あつ」

老婆に天啓来たり。

二人は固唾を呑んで、その口が何を語るのかと見守った。

「もうすぐ、炊き出しの時間じゃねえ……」

はあ、とリンは踵を返した。

「ダメだ。すっかりもうろくしてるね、あれは」

「でも、ニーナは、あのお婆さんのことを知ってるみたいだったけ
ど？」

「じゃあ、ニーナはここで暮らしてたって言うのかい？ あの姿で
？」

リンは目振りでニーナの背中を指す。まるで持ち主の心の有様を
示すかのごとく、赤い羽はしゅんとしおれていた。

パチツと焚き火が爆ぜ、大空洞の天井を風が吹き渡る音だけが場
を占めてしばらく。リュウがおもむろに口を開いた。

「トリニティ……お前は、ニーナの何を知ってる？」

「さつきも言っただろ。私は、何も知らないって」

嘘だ、とリュウは彼女の言葉を遮った。

少年らしからぬ迫力に、リンは物怖じしたように顔をそらした。

「急にどうしたんだ？ さつきまでは無関心だったくせに」

「いいから、教えてくれ。お前が知ってる範囲でいいんだ」

リュウの脳裏には先ほどの光景が焼きついていていた。

ドヴォークウとニーナ。どう考えても重なり合わない両者が、？

鎖輪？というアイテムで結びついてしまっている。

この共通点が意味することは何だ？ 考えるだに恐ろしくて、リ

ュウは何でもいいから答えが欲しかった。

「ニーナが何者であるか、本当に私は何も知らないし、聞かされてもない……。けど、私の推測を話すことは出来るよ」

すかさず詰め寄ろうとしたリュウを、リンは片手で制した。

「初めに言ったね。ただ生きてるだけなら、知らないほうが幸せなこともある、と……」。

彼女の真実を知ったところで、お前に何が出来る？ レンジャー、

これは感情や興味本位でどうにか出来る問題じゃないんだよ」

「なら、お前たちはどうするつもりなんだ。ニーナに何をさせよう
つて？ 世界を変える？ こんな小さな子に、何を背負わせる気な
んだ」

「しょうがないね……」リンはホルスターに手を伸ばす。

「ここで決着をつけるかい？ レンジャー」

リュウは剣の鐔を鳴らしてそれに答えた。途端に周囲の空気が張り詰める。

そしてリュウは先手を打とうとしたが ふっと、リンの口元がほころんだ。

「あんた、しょうもないバカだよ。本当にこんなところで戦おうと？」

「そつちが言っただろ」

「冗談だよ。今はね」

言って、彼女はスロープに向かい歩き出した。

「この先はリフトポートだ。歩いて十分とかからないだろう。

あそこなら誰もいないだろうし、私たちの同盟もそこまでだ……」

彼女の言葉は、リフトポートへ着くまでに答えを出せということの意味していた。

「これは私の任務なんだ。彼女を組織へ送り届ける……。ジャマする気なら、容赦しないよ」

ガシン！ と、彼女はハンドガンの撃鉄を引いてみせた。その目は刃のような鋭さを帯びている。

本気だ。彼女は必要となったら、間違いなく自分を撃ち殺すだろう。

ドヴォークウに、人間の下僕であるデイクに、あんなに優しい顔が出来る彼女も、感情に流されるほど愚かではない。

ゼノ隊長と何となく似ている気がする。何か巨大な責任や義務の前に、ひたすら感情を押し殺しているような迷いの光。

それが彼女の青い瞳のなかにも感じ取れる。いや、もっと頻繁に、ごく身近なところで見かけてはいなかったか？

鏡だ。毎朝、あの洗面鏡のなかに見る自分自身だ。寝て、起きて、仕事をして。それを繰り返すうちに、どんどん感情をなくして。

リンも、ゼノ隊長も、こんな気持ちで生きていたのか？ こんなにもみじめな気持ちは、D値の低い自分だけが抱えていたものじゃなかったのか？

リュウはニーナを呼んだ。町に飛び交う地底トンボを目で追いかけていた彼女は、ぱたぱたと彼の元へとやってきて、手を差し伸べると、ごく当たり前のようにそれを受け取った。

出逢って一日と経っていないのに、彼女は心を開いてくれている。それは自分が命の恩人だからだろうし、人を疑い抜くには彼女はまだ幼すぎるからだ。人の、世界の非情さを知らないのだ。

ニーナの手を握っていると、不思議と心が落ち着いた。スロープ

をのぼって、一行はリフトポートへと続く通路の入り口に差しかかる。

考える。いま自分の気持ちと向き合って、自分で答えを出すのだ。手遅れになる前に。

リフトポートは静寂に包まれていた。

係員の姿も、停車しているリフトもない。電灯にたかる羽虫だけがじりじりと音を立てている。

「さて、答えを聞かせてもらおうか」

同盟終了。リュウに用意されている答えは三つ。

自分の手で二ーナを守るか、リンの仲間になるか、あるいは、この手を離すか。

リンが彼に奨めているのは第三の選択肢。自分たちと出会ったことは忘れて、元の日常に戻る。賢明な選択だ。

リュウはちらと二ーナを、ついでリンの顔を見た。彼女の指先はかすかにハンドガンに触れている。不意打ちに備えているのだろうか、隙のない奴だ。

いずれにしろ、リュウの心は決まっていた。あとはそれを口にしないで、行動にすればいいだけのことだ。

「おれは」

突如として、トンネルの奥からリフトの警笛が突風のようにホームを横切っていった。

フロントライトの閃光にリュウの目が眩む。口にしようとしていた言葉は遮られた。

たっ、たっ、たっ……ブーツの乾いた音が聞こえる。眩い逆光のなかに立っていたのは、彼だった。

「ボツシュ……！」

リュウは思わず歓喜の声を上げ、彼に駆け寄った。

「ボツシュも無事だったんだ！」

しかし、とうの本人はリュウの横を冷たく通り過ぎていった。あ

たかもリュウの姿が見えていないかのように。

ボツシュの双眸はただ一点、ニーナに向けられていた。

「トリニティが一緒か……こいつで間違いなさそうだ。上出来だよ、リュウ」

一瞬、ボツシュとリンの間で視線の鏖^{せう}競^{けい}り合いが起こる。

抜き身にしたレイピアを右手に持ち、じりじりと、彼の足取りは高慢という名の使い魔でも引き連れているかのようなだった。

「ま、待ってよ、ボツシュ！ ニーナがどうかした……！？ 話を聞かせてよ」

「命令は……積荷の、確実な処分だ。それ以上のことを、おまえが知る必要はない」

すると、リュウはボツシュの前に毅然^{きぜん}と立ちはだかった。

「ジャマする気が……？」

「違う、ちゃんと説明してくれ！ 積荷？ 処分……？ なんだよ、それ！？」

予感があった。ニーナが、考えたくもないが？ 積荷？ であるかもしれないということは。

赤い羽が生えた女の子を見たことがあるか。デイクにはめるものと同じ鎖輪^{くわ}がつけられた人間を見たことがあるか。

ない。彼女がごく普通の人間であるということの証明を、リュウは一切持ち合わせていないのだ。

あるのはただ、ニーナを守りたい。その気持ちだけだ。

「リュウ……俺は、な……」

鋭く、そしてひどく残酷な痛みが右足に走った。何が起こったのか分からなかった。

見れば、レイピアの切っ先が自分の右足を貫通している。刺した？ ボツシュが、おれを？

「ボツシュ、何を……？」

ボツシュは手元をねじり、更に痛みを加えた。うめき声が口からこぼれ、リュウは思わずひざまづいた。

「俺は、こんなところでつまづいてるわけには…… いかないんだよ」とつさにリンがハンドガンを構え、トリガーを引こうとした。が、それはボツシュの後方から発射された弾丸に弾かれ、彼女は丸腰になつてしまった。

リフトから新たに二名のレンジャーが降り立ち、速やかに二人を取り押さえに向かう。

ニーナは慌ててリュウの下へ駆け寄り、彼の両肩をしっかりと掴んだ。

「ふん、ずいぶんとなついてるじゃないか……」

あざけるように言い、ボツシュはリュウの右足から引き抜いた刃の先端を、ニーナの首筋に当てた。

切っ先から赤いしずくがこぼれ落ち、ニーナのほっそりとした胸元を伝つて白いベールに染みを作つてゆく。

液体の不気味な感触と、いつ殺されてしまつか分らない恐怖に、ニーナのか細い肢体はふるえていた。

「やめろ…… ボツシュ……」

彼の反抗心に満ちた眼差しに、ボツシュはいささか驚いたようだった。

「リュウ、お前……」

ボツシュはちらりと刃の切っ先を宙に泳がせ おもむろに、リ

ュウの喉元を突き刺した。

呼吸が途絶える。喉の奥で生温かい痛みがあふれ、リュウのなかのすべての時間が氷結してゆく。

「リュウ…… 俺の道を、阻むな……」

機械のように無感情なボツシュの顔が、真つ赤な視界のなかでぐらぐらと形を失つていった。

おれは、ここで死ぬのか……？

よどみきつた闇がどつぷりと渦巻く底なし沼に、あがくのも虚しく意識が沈む。

声が聞こえた。あの、凶悪で、すべての抵抗を徒勞に変える強大

な力を持った声が。

？おまえを選んでやる？

ふっと、身体の内側で小さな太陽が生まれた。

それは焰^{ほのお}の翼を広げてリュウの手を、足を、心を、一瞬のうちに焼き尽くしていった。

やがて真つ黒にこげた皮膚をびっしりと赤い鱗が覆い、劫火^{じゅうか}に研がれた爪は何者をも切り裂く刃となり、頭からは角が生え、髪は燃え朽ちて灰のような白銀へと色を変えた。

「リュウ……？」

ボツシュの問いかけに答える少年は、もうどこにもいない。

あるのはただ、鮮紅色の火の粉をまとった禍々しい人外の姿。それだけが、間違いなく彼の目の前にあった。

(?) 世界を統べるもの - 前篇 -

六歳ぐらいの男の子だった。

任務からレンジャー宿舎の自室に帰る途中、ふと路上で声をかけられた。

『いいな、おにいちゃん。ぼくもれんじゃーになりたいな』

そう無邪気に言う男の子の目はきらきらと輝いていた。

『ねえ、ぼく、でーち1 / 4 0 9 6 だけど……れんじゃーになれるかな?』

やや答えに迷った末、彼は答えた。

『なれるよ。君は、おれよりずっとすごいレンジャーになれる』

わぁー、と言って、男の子は顔いっぱいに晴れやかな笑みを浮かべた。とても印象的な笑顔だった。

仕事の実態を知った途端に嫌になる職業だが、幼い子供、特に男の子にとって怪物から街を守るレンジャーはヒーローであり、憧れの的だった。

銃や魔法杖、なかには拳一つと、レンジャーの戦い方は各々の個性が色濃く反映されるために多種多様である。

そのなかでもとりわけ子供たちから人気があるのは剣士だった。男の子が声をかけてきたのも、リュウの腰に剣がぶら下がっているのが見えたからだろう。

銃にも魔法にも適正がなく、身体的にも取り立てて目を見張るところがなかったリュウにとって、唯一レンジャーとして戦うために残された武器が剣だった。

たったそれだけの理由で一躍ヒーロー扱いされるのは照れくさかったものの、この日ほど『レンジャーになってよかった』と思った日はなかった。

そんなある種の優越感が彼を深すぎる眠りへといざなってしまったのかかもしれない。その日の夜に鳴らされた敵襲警報に彼は気付か

なかった。

すべてを翌朝に知った。数匹の邪公が破損したライフラインの隙間から居住区へと侵入してきたこと。巡回任務中のレンジャーがバイオ公社製の酒を飲んでいたこと。

路上生活者のなかから若干数の死傷者が出ってしまったこと。そのなかの一人に、あの男の子がいたこと。

リュウは自分を呪った。街を守るためのレンジャーが、あるところか事件の瞬間に眠りこけていたのだ。

アナウンスを知らせる部屋のスピーカーが壊れていたせいもあるかもしれない。そもそも、ローディだから、働く力がないからと、彼らに家を与えてやらなかった政府のせいかもしれない。

あるいは、酒に酔って警備を怠っていたレンジャーが原因を挙げればきりがなかった。強いて言うなら、そう。男の子は世界に殺されたのだ。そして、自分は無力だった。

ニーナと手を繋いでいるとき、リュウはあの男の子のことを思い出していた。心が焼け切れそうになるほどの罪悪感とともに。

だから、思った。ニーナを守ろう。それで世界に居場所を失ったって構わない。もしも彼女の手を離してしまったら、自分の心までも一緒に離してしまう気がする。

生きる。自分の心に従って。しかし、？いまの彼？は、自分から望んでその姿になっているのではなかった。彼自身の心、自我、感覚さえもとうになかった。

竜人。異形。血溜まりのような真紅の双眸ソウ。彼にはもはや破壊に對する飽くなき欲求しか残されていないようだった。

そして彼は欲望を満足させるに必要な力をすべて備えている。爪、牙、角。あとは破壊対象を見つけなければいいだけだが、いた。目の前に。

その腕かいながゆらりと、鮮紅色の火の粉を連れて振り上げられる。音はしなかった。しかし、ボツシュの身体は数十メートル後ろの壁に叩きつけられていた。

もつぐつたりとしてしまっている。なんて脆弱なのだろう。

チクつと、何かが背中を刺した。銃弾だ。

破壊対象の一つが言葉にならない絶叫を上げながら何発と銃弾を撃ち込んでくる。

弾丸は胸を貫くこともなく、ただ弾かれて彼の足元にその数を増やしていくばかりだった。

カチ、カチ、トリガーの空転音がむなしくこだまする。彼の姿がふつと虚空に消えると、男の身体からぶしゃつと血液が弾けた。まるで水風船が割れるかのように。

これで二つ目。破壊対象は三つあったはずだが、近くにいない。男の心臓を深々と突き刺していた右腕を引き抜き、彼はおもむろに振り返った。

見つけた。破壊対象は尻尾を巻いて逃げようとしている。彼は雄叫びを上げながら、頬が裂けんばかりに口を広げた。

怒れる彼の咆哮が劫火となって男を呑みこむ。後には大きな焼却痕と、悲鳴の余韻だけが淡々と静寂を舞っていた。

これで完了。いや、本当にそうか？

この羽の生えた子供は？ 長い尻尾を垂らす女は？

駄目だ。壊してはいけない。なぜ駄目なのか？ 分からない、分からない……。

混乱をきたした彼の意識は、やがてぷつつりと途切れた。

* * *

煌々と、ほの赤い光が揺らいでいる。壁のくぼみに幾本と配された蝋燭の火だ。

「この時期に召集とはな……」

「いずれにせよ、早すぎる」

石造りの聖堂に、二つの低い声が厳かな響きを立てる。

「その時が来るのは確かなこと……それがいつかを決めるのは、僕

たちじゃありません……」

ほっそりとしたシルエツトがちらりと横を向いて、幼い子供の声で喋った。その手は丸みを帯びた流線形を　膝の上に置いた小動物の背をゆっくりと撫でている。

ぱち、ぱちぱち。青白い光の球が忽然と虚空に現れて、小さな稲妻を散らしてゆく。

まばゆい閃光がストロボのように空間を照らし、三人の男と、一人の子供、そして瞳を閉じた女の姿とを映し出した。

統治者^{メンバー}。気まぐれに分散していた光はやがて一点へと収束していき、消えると同時に一つの人型を生み出した。

刀傷のような線が縦に入った赤い瞳。その片方は白銀色の前髪に隠れて見えず、耳の付け根から生えた一對の角が髪留めのように頭を横断している。

世界を統べる者たちの頂点、エリュオン。彼の登場を持って、統治者たちは集団としての完成を見る。

「？竜^{ドラゴン}？が……現れた……」

白と黒の大理石で出来た床に硬い足音を響かせながら、彼は第一声を発した。

「ドラゴンが……！？」

「そう、古の超兵器……我らが、対となるもの。世界を滅ぼすもの。公社からの報告では……起動したのは、すでに活動を終えた個体らしい」

「再起動、だと？　適格者は、すでに滅んだはず……」

「定かではないが、サード・レンジャーに過ぎない、リュウという少年が……ドラゴンとのリンクを保持している可能性が、ある」

「サード・レンジャー……？」鳴らされた鐘のような、気高く、静謐^{ひひ}な女の声が二人の会話に割って入った。

「そのような能力の低い者では……適格者とは、なり得ません。これは？事故？でしょう」

胸の前で祈りを捧げていた手がゆっくりと離れて、その片方が掌

のうえに球を作った。真円のなかで闇色が、時空が、どくどくと渦を巻き始める。

「その者が世界を混乱へと導く前に……私が、空間の断層へと封じましょう」

「まだ」エリユオンは静かにかぶりを振る。

「我々が動くときではない。人のことは、人に……。いまは、上級のレンジャーに確認を命じてある」

そう言葉を残して足早に場を去ろうとした彼の背を、左目に眼帯をつけた男が呼び止める。

残された片目は疑念の光に満ちていた。

「息絶えたはずの超兵器……、滅んだはずの適格者……。エリユオン。貴様、一体何をした……？」

エリユオンはつと足を止め、おもむろに天井を仰いだ。幾層ものステンドグラスが張られた天窓の向こうに、人工太陽の真つ白な輝きが見える。

中央省庁区。すべての都市の、人々のうえに存在する場所。彼ら統治者は、この世で最も空に近い場所にいた。

「デモネド、あの少年は実に凡庸だ……。しかし、読まれぬ歴史こそが、真実のときもある……。すべてはこれからだ」

蠟燭の火は、ただ煌々と燃えていた。

* * *

霧のようにかすむ視界のなかで、大きな黒い眼が二つ。見覚えのある顔だ。どことなく物憂いしげで、儚くて。

「ニーナ!？」

リュウは急発進したリフトのように慌てて飛び起きた。

ボッシュは？ 敵は？ 辺りをきよろきよろと見回すリュウの目に、白熱灯の光が眩しく突き刺さる。

ここはどこだ。リフトポートじゃない……。

つと、素早い足音が背後から近づいてくる。リンだ。

「お前は何だ……！？ 普通のレンジャーじゃないのか……！？」

「な、何を言ってる？」 状況が掴めずに呆然とするリュウの肩を、リンは激しく揺さぶった。

「ボツシュたちはどうした！？ 積荷？ 処分？ トリニティ、お前は何を知ってるんだ。答える！」

「知ってどうする？ さっきみたいに……得体の知れない力を使つて、どうにかしようとしても？」

「うるさい！」

リュウは荒々しくリンの手を振り払う。自分の置かれた状況が分からず、一種のパニック状態に陥っていた。

掌を見てみる。剣を持つ利き手は皮の手袋をつけ、左手は素のまま。返り血でニーナの手を汚すまいと思つたからだ。

どこにも何も異常はない。ブーツも履いていればニット風の胸着インナーも着ている。これは間違いなく自分の身体だ。

それなのに、この、他人の布団を使っているような、ぴりぴりとした違和感は何なのだろう。解消しようのない不安に駆られて、リュウの苛立ちは増幅するばかりだった。

「うっー……、んー、んん」

顔を突きつけていがみ合う二人を見て、ニーナがふるふると首を振った。

やめて、ケンカしないで、と言っているのだろう。が、リュウもリンも強情で、お前のことなんか知るか！ とでも言わんばかりに、お互いぶつちがいに顔をそむけた。

ほとぼりがさめるまでには、それから数分の時間を要した。

今いる場所はリフトポートの貨物庫。話を聞くに、リンが意識を失った自分をここまで運んでくれたらしかった。

昨日うなされた悪夢の内容を細かく説明していくような顔つきで、肅々と語るリンの声に耳を傾けているうちに 徐々に記憶がよみがえり始めた。

映像の断片。感触の切れ端。血だ。悲鳴だ。

戦慄が身体を突き抜けた。これは、本当に、自分がやったことなのか……？

今さら、リュウは胸震いするほどの恐怖を覚えた。

「いきさつはざっとこんな感じだけど、本当に分からないのか？」

リンはコンテナのうえに座っているリュウを見やった。

「ああ……あの力のことは、何も分からない……」

ただ、と付け加えて、彼は自分の両掌を見た。それは麻痺をきたしたかのように震えていた。

「頭のなかで声が聞こえて、気がついたら……」。

とても、怖かった……。自分が、人ではなくなっていくみたいで……」

そつと、ニーナが手を置いた。恐怖に凍えていく心が、ほんの少しだけ温められる。

ニーナは優しく、頭の賢い子だ。つい先ほどもそうだったが、彼女は自分がどのような行動を取ればよいかわかっている。

「分からないことがまた一つ増えた、って感じだね」。

ニーナといい、あんたの謎の力といい……。まあ、私が一番不思議に感じているのは」

「なに？」

「あんたの服がどこも破けてないってことさ」

リュウはぽかんと口を開けて、やがて小さく笑った。

「笑うところか？ 私が見た限り、あんたの身体は一瞬にして生まれ変わったんだ」。

得体の知れない？ バケモノ？ の身体にね。それなのに、今じゃすっかり元通り。不思議に思わないほうがおかしい」

「それは、そうだけど……一番不思議に思っていることが、服のことだなんて、ちょっとおかしくて」

「まあ、裸のお前さんを担ぐことにならなくて、よかったとは思っ

てるけどね……」

リュウは心ひそかに安堵していた。自分はまだ笑ってられる、人間らしくいられる。バケモノなんかでは決してないのだ。

再び前に進む気力を得たリュウは、ニーナの手を引いておもむろに立ち上がった。

「どこへ行くつもりだい？」

「このままじっとしていてもラチがあかない……おれは、ニーナのことを知りたいんだ」

「行く当てはあるのか？」

そう問われると、リュウは口ごもった。

「バイオ会社のラボ……あそこなら、何か手がかりが掴めるだろう」
それまで背を預けていたコンクリート壁から離れ、リンはゆっくりと歩み寄っていった。

「トリニティ、お前までついてくるつもりか？」

「その子の正体を知りたいって目的は、同じだろう？」

リンの口元が静かにほころぶ。「手を結ばう、リュウ」
しばらくしてから、彼は答えた。

「分かったよ……リン」

(?) 世界を統べるもの - 後篇 -

整備用のエレベータを使い、一行は下層区街を目指した。

バイオ公社のラボへは、街にある専用通路を使わなければ入れないからだ。

一行の前に景色が開かれる。赤土の地面が風で巻き上げられ、あの嘘っぽい空の輝きが暗闇に慣れた目に突き刺さる。

ここは街の中央区にあるエレベータポート。

今朝方食堂の行き帰りに見かけたときは故障中だったのだが、ゲート付近でたむろしている作業員たちが復旧させてくれたらしかった。

「変わらないね、ここは……」

歩きながら、リンが横でぼそりとつぶやいた。

「リンも、前はこの街に……？」

「さあ、どうだろうね」

くすつと、リンは冗談っぽく微笑んだ。

一行は何食わぬ顔で作業員たちの横を通り過ぎたが、ふと呼び止められた。

リュウはどきつとする。自分たちはすでに？お尋ね者？になっているかもしれないからだ。

「エレベータ、ちゃんと直ってただろ？」

「あ、ああ……助かったよ」

ふっふん、と、作業用マスクで顔を覆った男は、得意げに鼻を鳴らした。

リュウは冷や汗を拭う。いつも見慣れた街が、人が、牙を隠し持った獣のように見える。

彼らの足取りはおのずと早まった。

「ところで、リュウ。一つ寄りたい場所があるんだが」「なに？」

「ついでに金も出してくれると助かるね。ニーナに靴を買ってやり
たいんだ」

「え？ でも」急がなくちゃ、と続けようとしたリュウを、リンは
手で制した。

「さすがにいつまでも裸足じゃ、可哀想だろ？ 私がひとつ走り買
ってくる。あんたたちは先に行つてな。場所は分かっている」

ニーナの白い足は煤や埃で汚れてしまっている。この先も長い道
のりを踏破していくことを考えれば、多少の危険を冒してでも手に
入れておくべきかもしれない。

いつか彼女がガラス片なり踏んづけて、そのいたいけな足に痛々
しい傷がつくところなど見たくないのだ。

リュウが財布に入っていた札のすべてを渡すと、リンはぽんつと
ニーナの頭に手を置いた。

「あんたに一番似合う色を見つけてきてやるからね」

そして塀の向こうを一瞥、レンジャーらしき者がいないことを確
認すると、リンは足早に通りを突っ切って行った。

少し遅れて、リュウもニーナの手を引いて歩き出す。広場の中央
には、何台もの液晶モニターがつけられた通称テレビ塔が立ってい
る。

モニター各個が違う映像を流し、腰の折れた老人がぼんやりとそ
れらを見上げていた。物珍しさにニーナも足を止めたが、リュウが
手を引く張ると慌てて歩き出した。

町民のほとんどは労働者。いまの時間帯は仕事のピークで、人通
りは少なかった。

それでも人目を避けるために、リュウは細く入り組んだ裏路地を
進むことにした。子供の頃によく他のレンジャー候補生たちと鬼ご
っこやかくれんぼをして遊んだ。

路の窮屈さや、薄汚れた鉄レンガ塀の質感、近くで換気扇が回る
音と、その振動。排水溝からは泥とカビの悪臭がうすら立ち昇り、
リュウの五感はいずれを鮮明に記憶していた。

バイオ公社ラボの専用通路は表通りの目立つ場所にある。いつも警備員が一人門前に立っていて、友人たちとともに物陰から忍び込む機会をうかがっていたものだった。

あのトンネルの真つ暗な入り口は、挑むべきこの世の謎として子供たちの冒険心をくすぐり続けてきたのだ。あれから十年近くが経って、まさか自分がその謎にトライすることになるとは思ってもみなかった。

幼い女の子を連れて、世界中から追われる身になって。手前勝手な考えだとは承知しつつ、ボッシュには無事であって欲しいと思うし、ゼノには恩を仇で返すことになって申し訳なく思う。

しかし、いつだって退屈な未来を予想していた彼は、いま巨大な使命感を胸に抱え、高揚していた。

一本の狭い路が伸びている。ここを抜ければ専用通路の真ん前だ。しかし、おかしい。先ほどから喉がひりひりと痛む。いくら環境汚染が深刻な下層区といえど、身体に不調が出ることはなかった。

ニーナが二、三度咳き込む。「大丈夫？」と背中をさすっている
だいあんじょうと、やがて街全域にアナウンスの大音声だいおんじょうが響き渡った。

『警戒レベル4ノ空気汚染が発生。該当ブロックヲ閉鎖シマス』
一体何が起きたんだ？ 答えを探る間もなく、新たな問題がリュウの前に立ちはだかった。

狭い抜け道の出入り口に、つとガスマスクをつけた作業員風の男が現れた。彼はトランシーバーに何事か吹き込むと、やにわに銃を構えた。

「ニーナ！」

彼女の手を取って走り出すのと同時に、高らかな銃声が空を切り裂く。

放たれた弾丸は通路脇のコンテナに当たり、一発はリュウの左頬をかすめた。

リュウは物陰に飛び込む。が、目の前には新たな追っ手の姿があ

った。挟み撃ちにされたいらしい。

相手が体勢を取る前にリュウは地面を蹴り　　袈裟がけに剣を振り下ろす。

それはポリカーボネート製の透明な盾に防がれたが、リュウは強引にもう一撃。男は胸を斜めに斬り裂かれ、赤い血がパツと虚空に花を散らせた。

デイクとは違う生身の人間の感触。初めてだ。初めて人を斬った。しかし、一瞬の気の迷いが命取りとなった。

「ぐっ！」

右の太ももに激痛が走る。後ろから銃弾を撃ち込まれたのだ。

何とか立ち上がらねばと力を振り絞るが、身体が言うことを聞いてくれない。敵はゆっくりと近づいてくる。

不意に、物陰に隠れていたニーナが飛び出した。その手には木製の魔法杖ウオンドが握り締められている。今しがた倒した敵が装備していた物だ。

ニーナは果敢にも敵を真正面に据え、ウオンドをくると旋回させながら振り上げた。すると敵の頭上にほの白い冷氣が収束、鋭い氷柱となって相手を押しつぶした。

レイガ。空気中の水分を一瞬間に凝結させ、対象に撃ち出す攻撃魔法だ。

「ニーナ、君、魔法が……？」

驚くあまり、リュウは傷の痛みなど忘れてしまっていた。

敵は碎けた氷塊のなかで意気消沈している。だが、死んではいないだろう。

リュウの知る限り、レイガは攻撃魔法のなかでも低級に位置し、威力としてはそこまで高くない。敵が意識を取り戻す前に逃げるのが得策だ。

自分が役に立つことが出来てどこか得意げな彼女の手を取り、リュウは足早にその場を去った。傷がちくりとうずいたが、なぜか急速に痛みが消えてゆく。

見てみるに、傷口が塞がっていた。あれほど生々しい血を流していた穴が、すっかり元の肌色を取り戻している。？再生？した……？ともすれば背筋が凍るような恐ろしい出来事ではあるが、この非常事態。リュウはひとまず考えないことにした。

来た道を半ばまで引き返してみると、リュウは思わず手で口を覆った。紫色がかった霧が路地に垂れ込めている。

間違いない。これは？ガス？だ。リフト道のデイク掃討作戦の際にも使用された神経ガス。

霧の濃度は広場に近づくにつれてより深みを増している。目から涙があふれ、腹から湧き上がる強烈な吐き気をこらえながら、リュウは最後の道を一気に駆け抜けた。

通りを出たところで、ニーナの足がもつれる。慌てて抱き起こしてみるに、彼女の額にどつと冷や汗がにじみ、呼吸は荒い。かなり辛そうだ。

と、リュウは人の気配を察した。ガスマスクをつけた一人のレンジャーが悠々とこちらに歩いてくる。その後ろには彼と同じ出で立ちのレンジャーが二人、どうやら自分を待ち伏せていたらしかった。「よう、サード。お前がリュウだろ……？」

「一体、何をした……？」

ふん、と鼻で笑って、男は顎で後ろを指した。彼の仲間は物見遊山といった風情で、横たえたガスボンベのうえに座っている。街中の空気を汚すものの正体だ。

「お前、ローディのわりに強いつて聞いたもんでね……用心つてやつだよ」

「そんなことで、ガスを……ゼノ隊長の命令か？」

「いや？ あの女は会議だとかで席を外していてね……、なら、好き勝手やらしてもらおうってワケさ」

強い怒りを覚えたリュウだったが、思うように力が入らない。何か強大な重力に押さえつけられているかのようだ。

しかし、何とかしてこの毒ガスを止めなければ。テレビ塔の近くでは、先ほど見かけた老人が苦しそうにもがいている。ニーナも同じだ。

不意に、彼は通りの向こうにリンの姿を認めた。緩やかにカーブする通りを、こちらに向かい走って来ている。

リュウは何事かニーナに耳打ちすると、その背中を強く押し出した。いつものように優しく促してやる余裕がないほど事態は切迫している。

「走れ、ニーナ！」

怒号を上げるとともに、リュウは剣を抜いて男の脇腹を突き刺した。

飛びかかった勢いのまま馬乗りとなったリュウは、一発、二発、拳で男の脳みそを大きく揺さぶった。

しかし、敵は彼だけではない。男の仲間が銃を構え、その一つはニーナに向けられている。

リュウは射線のうえに飛び込み、寸でのところで銃弾をさばいて見せた。銀色に輝く刀身は、真つ赤に燃え盛る彼の瞳を映している。突風のように鮮紅色のオーラがほとばしり、彼は剣を振り上げながら急加速。光の軌跡を残しながら一直線に突き進む姿はあたかも弾丸のようだった。

敵の一人はあられもない声をあげながら無様な死に体をさらし、残るは大男。身の丈二メートルに迫ろうかというその巨漢は、右手に戦斧のように大きい十字剣を握っていた。

しかし、サイクロプスさえも赤子扱いにしたリュウの敵ではない。一、二度斬り結ぶと、大男はがっくりと体勢を崩した。

好機！^{チャンス} しかし、追撃を仕掛けんとするリュウの意思とは裏腹に、足が動かない。急速に力が抜けて、リュウはがくつと片膝をついた。敵がこの隙を見逃すわけがなかった。リュウは一転して劣勢に追い込まれ、一度ならず二度、三度ならず四度、高所から繰り出される攻撃を寸でのところでしのいだ。

やがて顎先に蹴りを食らい、リュウは赤土の地面を成すすべもなく転がってゆく。数秒間のうちに傷を治してしまう再生能力も、内側から命を蝕む毒霧に対しては効果がないようだった。

彼の瞳からは真紅の輝きが消え、その呼気さえも途絶えようとしていたが　しかし、彼は立ち上がった。ゆらゆらと、蜃気楼のよう

に。

「どうしてだ……」

リュウの言葉に気を取られ、敵はぴしゃりと足を止めた。

「おれだけに用があるのなら、街の人を巻き込む必要はないはずだろ……」

「死んだところで……ローディじゃないか。悲しむ奴なんざいねーよ」

言って、大男は高らかに笑った。聞いていて吐き気を催すような下品な声だ。

リュウの額に血管が浮きあがる。柄を握る手に力がこもる。理性はとうに吹き飛んでいた。

「それが……それが、人間のやることかよ!」

穿刺^{せんし}一閃。男の胴体に刃の切っ先よりもはるかに口径の大きい穴がうがたれ、その巨体は弾かれたビー玉のように飛び出していった。攻撃の瞬間、リュウの身体には鮮紅色のオーラがよみがえっていた。砲弾でも食らったかのような穴が男の胴体を開いたのは、オーラの力が刃を通して爆発を起こしたからだ。

ひとまず、敵は片付けた。あとはガスボンベの噴出孔を塞ぐだけだ。

しかし、ガスボンベにはあるべき物がない。ハンドルだ。栓の開閉をするハンドル。

リュウはとつさに振り返る。初めに倒した男が、見せびらかすようにハンドルをかがけていた。

「ざまあ……みやがれ……」

男の腕がぱったりと地面に落ちる。

リュウも限界だった。意識が混濁し、呼吸もままならない。

乾いた音を立てて、彼は地面に倒れ込んだ。闇に覆われていく視界の先に、リンとニーナの姿が見える。

そうだ。そのまま安全なところまで逃げろ　　リュウの意識は、そこで途切れた。

「ニーナ!？」

リンの手を振り払い、ニーナは走り出した。

リュウのところへ向かう気だ。しかし、今さら何ができる？

慌てて彼女を引きとめようとしたリンだったが、その足は止まった。

あまりにも深い霧に臆したのではない。思い出したのだ。ニーナには特別な力があることを。

ニーナは小さな足を引きずるように、ときにはつまづきながら、そのたびに立ち上がってリュウの下へたどり着いた。

彼の瞳は固く閉ざされている。まるで死人の顔つきだ。

ニーナは嗚咽をもらすように数回咳き込んだあと、胸の前でそつと両手を組んだ。

彼女の想いに呼応するかのように、赤い羽がはためき、白い光の粒子が放たれ始める。

光は加速度的に強さを増し、やがて巨大な柱となって天空に打ち上げられた。

紫色の霧が晴れてゆく。汚れた空気が浄化されてゆく。そして光が消失するとともに、彼女は意識を失った。

リンは二人の下へ駆けていった。リーダーの言っていた、?大気汚染改善プログラム?という言葉思い出しながら。

(?) 小さな旅立ち - 前篇 -

「一体、何が……起こったんだ？」

「分からない。ただ、言えるのは……ニーナが飛び込んで行ったら、ガスが中和されて、二人とも無事で済んだってことだ」

「ニーナが……？」

ちらりと、リュウの視線が傍らに向く。

良い子でしょ？ と胸を張るような、ウオンドを手に持ったニーナの姿がそこにあった。

街は沈黙に包まれている。あたかも昼に夜が来たというような、寝息が聞こえてきそうな静寂。

気を失ってから十分と経っていないらしかった。テレビ塔の近くで倒れていた老人が、階段のふもとで女が、路上で子供が、顔に赤土をつけて起き上がった。

どうやら大事には至っていないようだ。リュウはほっと胸をなでおろすとともに、危機感を覚えた。

またいつ新たな追っ手が現れるか分からない、街がまだ寝惚け眼でいるうちに次の行動を取ったほうが良いだろう。

その意思が目線を通してリンに伝わると、一行は足早に広場を後にした。

* * *

バイオ公社ラボの専用通路には、難なく入り込むことが出来た。毒ガスにやられて警備員が倒れていたからだ。ついでにリンがそのポケットから『カードキー』をくすねておいた。

「災い転じて何とやら、だね」

冗談を言いつつ、リンは入り口の認証装置にカードキーを読み込ませた。

セキュリティハッチの内側でロックが外れる音がし、薄ひんやりとした廊下が目の前に開けた。

暗がりの向こうから科学薬品の匂いが漂ってくるだけで、社員や警備員の姿はない。壁や床の構造は、廃棄デイク処理施設に至るアプローチ道とほぼ同一。この廃墟を思わせる静けさもだ。

リュウはまた例の不可解な白昼夢のなかを歩いているのではないかと、しきりに頬をつねった。先を行くリンの足音は聞こえる。後ろをついてくる、ひたひたというニーナの足音もちゃんと　いや、止まった。

その代わりに、けほけほ、けほけほ、ニーナは二度三度、大きく咳き込んだ。

「大丈夫？」

リュウはとつさに彼女の肩を支えた。

しかし、咳は収まるどころか勢いを増し、ニーナはとうとう座り込んでしまった。

「少し、休ませた方がよさそうだね……」

リンの提案に同意し、一行は近くに見つけた小部屋のなかへと入って行った。

何らかの培養装置と思しき台座付きのカプセルが中央を領し、マスの細かい銅造りのタイル床には薬品の瓶やガラス片が散乱している。

常人にはなはだ用途不明なものばかりだったが、部屋の有様からして長らく使われていないことは分かった。

そのなめらかな素足が傷つくことがないように、リュウは慎重にニーナを歩かせ、浅黒い粒子を散らす赤い羽を壁に寝かせた。

咳の合間に、ヒュー、ヒューと、肺が悲鳴を上げているような音が口の端からこぼれる。さぞ苦しくてたまらないだろうに、心配をかけまいと作られるニーナの笑顔が何とも痛々しかった。

つとリンに肩先を叩かれ、リュウは彼女とともに戸口の先まで歩いていった。蝶番の壊れた扉が小さく軋む。

「リュウ、気付いたか？」

「ああ……ニーナの羽が、汚れてる」

リュウの見やる先で、ニーナが強く咳き込んでいる。そのうち血を吐き出すのではないかと不安になるほどだ。

「さつきも言っただように、ニーナが毒ガスを浄化したんだ。

何をしたのか分からないけど……あの子の負担になったってことは、間違いなさそうだね」

「リン、どこへ？」ゆるやかに踵を返した彼女の背中を、リュウは呼び止めた。

「ちよつと先を見てくる。少し思い当たることがあるんだ。あんたは、ニーナの傍についていてやってくれ」

「え？ でも」

「それと、靴を買ってやれなかったこと……あの子に謝っておいてくれ」

優しい笑みを投げると、リンは走り去って行った。

健やかにゆらめく尻尾の先が暗闇に消える。リュウはしばし呆気に取られていたが、やがてニーナの下へ戻った。

「ごめん、ってさ。リンが」

リュウはつとめて明るい声で話しかけた。

ニーナの咳は幾分収まってきていた。それでも呼気は弱々しく、玉のような汗が額に浮かんでいる。

「靴を買ってあげられなくて……けど、ニーナ、近いうちにちゃんと買ってあげるから。君に似合う靴を」

「ん……ん……」眠りに落ちてしまいそうな、けれど確かに声を聞いているらしい瞳のきらめき。咳はもう止んでいた。

リュウはニーナの隣に腰を下ろし、次の声を発するまでにはしばしの沈黙を要した。

「リンは、心当たりがあると……言ってた。やっぱり、君のことで何か知ってるんだと思う。けど、おれには何も言わない。隠してるんだ」

「んー……」

「別に、嫌ってるわけじゃない。リンはいいやつだ。それは分かってる」

「ん……？」

「けど、相手はやっぱトリニティだ。このまま一緒にいて、本当に良いのかどうか」

そこでリュウはやつと気付いた、ニーナが部屋の隅まで歩いていったことに。考え事で頭がいっぱいだったにせよ、物音一つ、気配一つ感じなかった。

ニーナは小振りな尻をこちらに向けて何かを見ている。そのすぐ後ろにガラス片が落ちていて、リュウはどきりとした。

「ニーナ？」

「んー、ん！ ん！」

うれしそうな声を上げるニーナの胸元には、くまのぬいぐるみが愛おしそうに抱かれていた。

継ぎ接ぎだらけの身体に、目がちかちかするような極彩色。それはがらくたの下に長らく埋もれていたらしく、埃まみれだった。

「これは、ニーナの……？」

「んん、ん！」

ニーナの顔がよろこびで弾ける。無理をしていない自然な笑みだ。リュウは心が青く澄んでいくのを感じたが、それも束の間のことだった。

覚醒を促すようなサイレンの音が鳴り響く。やがて数人の警備兵が窓越しに部屋を横切って行った。

リンが見つけたのか？

リュウはニーナをかばうようにして身を潜め、しばらく様子がかがった。

悲鳴が聞こえた。ついで、およそ人間でない者のうなり声が腹に響いた。違う、リンが見つかったのではない。

「ニーナ、ここで待ってられるね？」

彼女がうなづくのを待たず、リュウは部屋を飛び出した。

赤い交閃灯が警報に合わせて忙しく回る。リュウは血塗られたように赤く染まった空間を走った。

また、悲鳴。リュウの行く手に警備兵の背中が立ち並ぶ。彼らの頭上には、禍々しい人外の顔つき。デイクだ。

それは腕というにはあまりに巨大な長物で警備兵を三人まとめて壁に叩きつけた。豪快な破碎音が一瞬、サイレンをかき消し、あとには見るも無残な血しぶきの光景が残っていた。

リュウはとつさに目をそらしたが、またキツと怪物をねめつけた。たった一人残された警備兵は、ただただ怯えて後ずさりを始めている。

「どいてくれ」

「な、なんだ、お前……戦うつもりか？」

リュウは剣を抜き、構える。

「やってみる」

一本角の生えた鉄兜の下で、今にも血の涙を流しそうな真っ赤な双眸がギラリとリュウを見つけた。

目の前にするとかかなり威圧感があるが、巨腹をでっぷりと言わせてがに股に構えている姿はどこか滑稽でもある。

両腕は生き物のそれではなく、先端に三つのアームがついた大振りな鉄の砲身。人間を三人まとめてなぎ払うには十分な長さで太さだ。しかし、元々の肥満体に更なる重装備をしているために動きはノロく、冴えない。リュウは繰り出された腕のうえに飛び乗り、そこを突っ走りながら首めがけて剣を薙いだ。

飛び散ったのは火花。生身だと思っていた部分は堅牢な鉄のプレートを内側に仕込んでいた。迂闊。

敵が腕を振り上げるとリュウは体勢を崩し、宙を舞った。もう片方の腕が横様に接近してくる。

リュウは激しく壁に叩きつけられた。骨が軋む、意識が飛びかける。

それでもなお生きているリュウの身体を、敵はがっしりとアームで捕縛した。ついでぎりぎり、ぎりぎり、と、圧力をかけて潰しにかかる。

リュウの口からうめき声もれ、両側にネジの突き刺さった頭を見据える視界が激痛とともに薄らいでゆく。

と、敵の肩口で小さな爆発が起こった。リュウは力が弱まった瞬間を見逃さず、さっと素早くアームの束縛から逃れた。

見てみれば、遠くにはウォンドを振り上げたニーナの姿があった。いまの魔法はパダム、そしてニーナは再びくるとウォンドを旋回させる。

敵の頭上で紫色の電流が弧を描き、小さな雷鳴が轟いた。稲妻は一本角を通して巨体を隅々まで駆け抜ける。

なおもニーナは小気味よくウォンドを振り回し、一発、二発、続けざまに雷撃を浴びせた。パル。雷属性の低級魔法だ。

「助かったよ、ニーナ……」

続いて裂ぱくの声を上げながら、リュウは胸の中央部を突き刺した。丸いでっぱりの奥でガラス体がオレンジ色に底光りしている。

コア。またの名を弱点。そこが破壊されると敵は巨体をゆるがし、つつ後ずさりしていき、やがて身体の節々から一斉に蒸気が吹き出した。

更に細かなスパークが生じ、感電したかのごとく全身がぶるぶると痙攣けいれんを始めた。往生の姿にしては尋常ならざる気配。

敵は死んでなどいなかった。それどころか理性の箍たがが外れたかのごとく大音声でわめき始めた。暴走。

敵は両腕を頭上高く揃えてかかげ、有無を言わずに振り落とした。凄まじい烈風とともに砕けたリノリウムがつぶてとなってリュウを襲う。

とつさに顔をかばったものの、肩口や太もも、身体の至るところに裂傷が走った。

なおも敵の勢いは留まることを知らない。右腕に反動を溜めると、

それは放たれた砲弾のようにリュウめがけて繰り出された。

半秒遅れてリュウも地面を蹴る。横薙いだ剣でアームを受け止める。このままでは刀身もろとも全身が砕けてしまうが、しかし。

リュウの怒号に呼応するかのように鮮紅色のオーラがほとばしり、それが刀身にみなぎってアームに食い込み始める。

リュウは渾身の力を振り絞り、一直線に駆け抜けた。斬り裂かれ、バラバラと崩壊飛び散る鉄片のあられ。

敵の背後を取ったリュウは、その命の在り処に狙いをつけて突き刺した。コアの部分から刃が根元まで突き出ている。

敵はゆらゆらと平衡感覚を失っていきながら、やがて耳をつんざくような断末魔とともに、力尽きた。

リュウも無傷ではない。戦闘を終えると同時に片膝をつき、二ナがばたばたと彼の元へ駆け寄った。

「た、倒しちゃった……！　すげえな、あんた！」

今の今まで傍観を決め込んでいた警備兵が、驚き交じりに歓喜の声を上げた。

うつ伏せに倒れた敵の巨体からはプスプスと黒煙が上がっている。どうやら生身と機械のハイブリッドらしい。

しばらくして、リュウの全身から痛みが引いた。例の？再生能力？だろう。

警備兵に事情の説明を求めているに、開発途中だったアーム・ストロングという実験体が檻から脱走し、今の事態に至ったということだった。リュウはどこか腑に落ちない気分になった。

「まあ、あんたが何者かはこの際聞かないことにして……礼をさせてくれよ」

「それなら、頼みがある」

リュウは強い眼差しで言った。

「二ナの……この子のことを知っているやつに、会わせてくれ」

(?) 小さな旅立ち - 後篇 -

サイレンが止み、空間は元の静けさを取り戻した。

獣耳をぴくつかせ、リンは辺りに注意を配る。リュウとニーナのことが気がかりだ。

ふっと踵を返そうとした彼女だったが、薄暗い廊下の先にエメラルドのおぼろな輝きが見える。それは半開きになった部屋の扉からこぼれる光だった。

銃を構え、リンは慎重に足を踏み入れていった。すうつと肌寒い空間が広がる。何基もの培養装置が四列に整然と並べられて、カプセルはどれも蛍光色の液体で満たされていた。

そのなかの一つに、いたいけな少女の青白い肉体があつた。背中からは赤い羽が生えて、やせさらばえた身体が蛍光色の海に浮かんでいる。

リンは思わず目を覆った。

少女には、首がなかったからだ。

『大気汚染改善プログラム……』

リーダーはこう言っていた。

『空気を浄化するのは、機械ではダメなのですか？』

『この計画は……人間を、その機械にしてしまおうというものだ』
追想の糸が切れるとともに、リンは思わず独りごちていた。

「なんてことを……」

部屋を出て、リンは認証装置にカードキーを通して扉にロックをかけた。

あの二人にこの部屋を見せるわけにはいかない。そう、本能が彼女に訴えかけたのだ。

曲がり角の向こうから足音が聞こえてくる。この分だと相手との距離はかなり近い。

リンは銃を構えて身を潜め、足音が自らの定めた警戒線を踏み越

えるとともに飛び出した。

ぎらりと剣が閃いて切っ先が眼前に突きつけられる。よく見覚えのある強いまなざし、相手はリュウだった。

「なんだ、あんたか……」

銃を下ろそうとしたリンだったが、それはまた素早く構えられた。暗がりにはうつと浮かぶようにして、二ーナの後ろに警備兵の顔があつたからだ。

「リ、リン、大丈夫だよ。この人は、おれたちを案内してくれてるんだ」

「案内？ どういうことだ……？」

「まー、まー、威勢の良いねーちゃんよ」

警備兵はずいっと身を寄せて、馴れ馴れしく喋り始めた。

「ちよいとこの子に助けてもらつてな……そのお礼をさせてもらつてるんだよ」

警備兵の言葉に付け足すように、リュウは事情を説明した。

リンは銃をホルスターにしまったが、警備兵を見る眼差しからは疑いの色が消えない。

なにせ相手は重厚なガスマスクで顔をすっぽり覆っていて、その下で何を考えているのかさっぱり分からないからだ。

聞けば研究主任の部屋に案内してくれるとのことだが、はなはだ疑わしい。ひよっとしたらレンジャー部隊が待ち構えているかもしれない。

「あんたたちのこと、知ってるぜ？ 政府に追われてんだろ。大丈夫だ、俺はあいつらの一味じゃない……」

思惑を見透かされたような物言いに、リンは啞然とした。

「どうして知ってる？ レンジャーでもないあんたが」

「おいおい、迂闊じゃないのか？ そんな言い方じゃ、自分から相手に正解を与えてるようなもんだ……」

「あてずっぱを言つたつてのかい？ ふざけやがって」

リンは銃口を突きつけたが、男は動揺する気配もなく、ちよこん

と廊下の先を指差した。

「すぐそこが研究主任の部屋なんだが……どうする？」

「信用できないからね。このまま、おとなしくしていてもらうよ」

「はいはい……」

男はぶらりと両手を挙げて、銃に背中を押されるまま歩き出した。ぴりぴりとした不穏げな空気にニーナはすっかり怯えてしまい、リュウのスーツの袖をぎゅっと掴んでいた。

研究主任の姿は部屋になかった。

薄ひんやりとした沈黙が漂い、壁際に置かれた長いデスクには書類が散乱している。

片側には扉で隔てられた小部屋が設けられており、真っ白なタイル張りのなかに手術台が置かれている。

それが長方形の窓越しに目に入るや、ニーナは小さな悲鳴を上げてがたがたと震え始めた。

「ニーナ？ どうしたの？」

彼女の左手からぼろりとぬいぐるみが足元を転がる。リュウの見る限り、手術室のなかは空っぽで何もない。

ただ、ニーナの目には幻か何か、おぞましい光景が見えているようだった。

「や、なんですか？」

不意に声が聞こえて、リュウは振り返った。

かちやかちや、と忙しい手つきで眼鏡を持ち上げ、一人の男が室内に伸びる廊下の入り口に立っていた。

研究主任。リュウは直感的にそう思った。

「やや、その試作品は出荷したはずですが……」

事務的な態度は崩さないまま、男は言葉ながらに歩み寄ってくる。

「何か、動作不良エラーでも……？」

「試作品？ 出荷……？」

ニーナを見る男の目は、人間に対するそれではなかった。あたか

もデイクや機械に接するような無機質な態度。年端のいかない女の子がこんなにも肩を震わせているというのに。

リュウのなかで徐々に怒りが芽生え始めた。

「や、いけませんね。換気肺ベンチレータがこんなに汚れてる……」

「ベンチレータ……？」リュウの存在などお構いなしに、男は図々しくニーナの傍に立って、ためつすがめつ身体の有様をうかがった。そして咎とがめるような視線をリュウに向け、彼は語気を強めた。

「もっと大事に使ってもらわないと」

「何を……言っているんだ？」

「君こそ、何を言ってるんです……？　これは、ここで？　作られた物？　じゃないですか……？」

一度、二度、ニーナの頭をぼんぼんと叩きながら、彼は平板な口調で続ける。

「肺細胞をクローニングして換気肺を培養……汚染空気を浄化する機能を最大に強化……」

「や、すべて注文通りですよ」男はクツクツと眼鏡を持ち上げる。

「何がいけないんです……？」

「？　何が？……？」

鮮紅色のオーラがほとばしる。穏やかにニーナを見守っていた瞳が血の色に染まる。

「言っておきますが、肺の交換は不可能ですよ。ここまで汚れたら、もう、回復も……」

リュウに殴られ、男の言葉は宙を舞った。

しりもちをついた相手にリュウは容赦なく刃を突きつける。

「？　作った？　だと？　ニーナは人間だ！　ニーナに何をした！　答えろ」

「何を、って……私たちは、注文通りに改造を……」

「注文通り？　改造……？　誰が、そんなことを」

男は頬を押さえながら、喉先三寸に迫る死に怯えていた。

「この子は……ニーナは、この先どうなるんだ？」

ニーナの身体を支えながら、リンが心配げな表情で言った。
プロトタイプ

「試作品なので、耐久性はありません……。汚れた空気を身体に取り込んで、処理しきれなくなったら、終わり、です」

半ば泣き出すような声音で言われた言葉が、リュウのなかで途絶えることのない響きとなって反復された。

処理しきれなくなったら、終わり。終わり。

その呪いのような響きの循環から逃れるように、リュウは激しくかばりを振った。

「空気の汚れてない場所なら、ニーナは助かるのか？」

「地下の空気は悪くなる一方です……。それが、生きていけるような場所は……ありません」

剣を握る手に力がみなぎる。「お前は、お前たちは……最低だ」

そして刃が振り下ろされようというとき　ニーナがリュウの背中にぎゅっと抱きついた。

途端に鮮紅色のほとばしりが消え、リュウの心から邪気が払われてゆく。ここで誰かを殺したところで何にもならない。

彼女を救いたいのなら、そう。目指す場所は一つだ。

「行こう、ニーナ……」

剣を捨てて、リュウはその手に彼女の体温を掴む。

優しく、放してしまうことがないように。

「君を、空へ連れて行く。君を……助ける」

リュウの胸のなかで、ニーナはゆっくりとうなづいた。

その昔、人々は空の青さとともに生きていたという。澄み渡った美しさのなかで、自由な翼を広げていたという。

そこに行けば、きっと、ニーナの小さな羽も　。

一行が部屋を去っていったあとで、警備兵がひどく打ちのめされた様子でうなだれる男の前に立った。

その手がおもむろにマスクへかかる。徐々に脱ぎ払われていくベールを前に、男はただ愕然としていた。

「あ、あなたは……ジエズイット、様……？」

「随分と手痛くやられちゃったな」

燃え盛る炎のように逆立つ赤い髪、つり上がった双眸を持つ細面。それが皮肉げな笑みを口元にたたえて、男を見下ろしていた。

ジエズイット。統治者^{メンバー}の一人。

「冷やかしに来たつもりだったんだが……リュウ、か。面白そうなやつだな」

「どちらへ……？」

「追いかけるんだよ。触り損ねた？ ケツ？ をな」

瞬間、青年の姿がふっと虚空にかき消えた。

男はきよろきよろと辺りを見回すが、部屋にはブーツで床を叩く音がこだまするだけだった。

それが次第に遠のいていき、沈黙が重たく部屋に垂れ込めると、デスクに置かれた赤いタブレットが男の目についた。

最高機関の印が刻まれた勅命書。そうだ。

男は、確かに、統治者たちの言うとおりに、ベンチレータを作り上げたのだ。

（？）剣の絆・前篇・

レンジャー基地、メディカルルーム。

ターコイズのカーテンに仕切られたベッドの上に、ボツシュは上体を起こしていた。

その腹や頭、腕は包帯でぐるぐる巻きにされている。実に、実に不愉快だ。

「くそっ……くそっ……！」

ボツシュは苛立つ拳を繰り返し白いシートに振り下ろす。

自分よりもD値ではるかに劣るサード・レンジャーに、リュウに負けた。

これほど屈辱的なことはない。彼の憎悪にも似た怒りはいや増すばかりで、クツションやサイドボードに置かれた備品など、手当たり次第に感情を爆発させた。

「落ち着きなさい、ボツシュ」

カーテンを開けて、ゼノがその顔を見せた。

ボツシュは大きく息を喘がせる。額には破裂せんばかりの血管が幾筋も浮かび、その目は血走っていた。

「なんだよ……笑いに来たのか？ ローディに負けたこの俺を！」

「ボツシュ、D値は能力の最大到達予測値です。あなたが彼に敗れたのは……？ 誤差？ の内でしょう」

「誤差！？」ボツシュのくちびるが震えを帯び、瞳は狼狽しきりに宙を泳いだ。

「そんなもんじゃない。あれは、あれは……？ バケモノ？ だよ」
言って、ボツシュは力なくうなだれた。

肋骨にひりひりと痛みが走る。完治にはまだ程遠いのに、無理やり身体を動かしたからだ。

「そのバケモノにやられて、全身打撲で済んだ奇跡に感謝すべきです。あなたについていった他の二名は見るも無残な……。とにかく、

あなたにはこれ以上任務を続けさせるにはいきません」

「バカな！？ 俺は、任務に失敗したわけじゃない。こんなことでボツシュの名を……汚すわけにはいかないんだよ！」

「ボツシュ」ゼノは静かに、だが相手の心臓をきゅっとわし掴みにするような恐ろしい声音で、彼の耳元で淡々とささやいた。

「上層部から直々に勅命がありました……。？ドラゴン竜？を討て、と。

バイオ公社からの報告では、つい先ほど、リュウたちと思しき三名のグループが……ラボを抜けて氷結廃道へと向かったそうです。私はこれから数十人の上級レンジャーを組織し、彼の、リュウの討伐に向かいます」

さつと素早く踵を返したゼノの背中を、ボツシュは慌しく追った。

「ボツシュ、あなたは」

「いや、行かせてくれ。この目で見てやるんだよ……」

にやり、と、彼は頬が裂けんばかりの、邪悪な笑みを浮かべた。

「あいつが死ぬところをな」

* * *

リュウたち一行は、公社ラボのメンテナンスハッチから氷結廃道へと入った。

地下水脈が凍えて出来た氷の洞窟。床や天井に至るまで分厚い氷が岩肌を覆い、所々に置かれたライトの光が乱反射されて、空間全体がほの眩い銀色に輝いている。

この洞窟は地下の何ヶ所にも出入り口があり、身もすくむような寒さと遭難のリスクを恐れなければ、ショートカット（抜け道）として大いに役立ってくれる。

事実、リンも今回の任務のためにこの洞窟を使ったらしい。彼女はここでも慣れた足取りで先頭を進み、案内役を買って出てくれた。目指すはトリニティのアジト。レンジャーとしてのリュウは敵の本拠地に向かうなど猛反対だったが、そこにはニーナの病状を緩和

するための医療設備があるという。

彼女を想うリュウとしては願ってもない朗報だ。それに今となつてはもう、自分は半ばトリニティのようなもの。変に自分がレンジャーだという意識に固執する必要はない、大事なのは、ニーナを助けることだ。

リュウはニーナをおぶさり、凹凸がひどく、つるつると滑る氷の床に悪戦苦闘しながら、すすいと進むリンの後を追っていた。

ジャケットを着ていてすら冷気が身に染みるのに、裸足のニーナを歩かせるわけにはいかない。だが、彼女は思いのほか寒さに強く、ぬいぐるみをリュウの頭に乘せたり、ぱたぱたと足を動かしてこの状況を楽しんでいる様子だ。

道中には小さく、身体が白く透き通った神秘的な生物が、エラを張って空中を浮遊していた。リン曰く、？クリオネラ？という名の生き物らしい。

ニーナは彼らと触れ合いたくてたまらない顔をしていたが、両手はあいにくウォンドとぬいぐるみで塞がっている。その代わりとばかりリンが捕まえようとしたが、クリオネラは伸ばされた手をひらりとかわして、悠々と空中散歩を続けた。

掴み損ねたものの感触を確かめるように、リンは右手をか弱く開きさせながら、ふと口を開いた。

「リュウ。本当に？空？を目指す気か？」

「なんだよ、急に……」

「それが本当に存在しているかも分からないんだ。仮にあったとしても、あんたが考えているようなものじゃ」

「リン」彼女の口をそつと覆うように、リュウは穏やかに話した。

「地下^{（ミッド）}は、ニーナを救わない世界だ……。それどころか、彼女がいないと、大気を満足に保つことさえ出来ない。

おれは、ニーナを助きたい。だから、ここを出て……」

リュウはゆるやかに歩を進めながら、静かに天井を仰いだ。

その如何ともしがたい堅牢な氷壁の向こうに、彼は、青く澄み渡

った空を見ていた。

リンはこれ以上何も言及するまいといった風情で、短く息を吐き出すと、やんわりとニーナの背を打った。

「あんたは幸せ者だよ、ニーナ」

言葉の意味が分かっているのか、いないのか、ニーナはにっこりと笑った。

彼女にとって、リュウとリンの二人という時間はかけがえのないものであるらしかった。

一行は氷床のうえに建立いそごいされた鉄タイルの橋を渡り、奥の部屋にあった梯子を使って上階についた。

景色は天然のものから人工物へと一変し、銅造りの床と壁、埃っぽい空気などは、リンとニーナに出逢った廃棄処理施設をリュウに思わせた。

せせこましい通路を左に曲がり、突き当たりにあつた立て付けの悪い扉を、始めは手で、次に足で、最終的には身体ごとぶつかってこじあけた。

四方に開け、天井が高い広間。コンテナや鉄筋類が無造作に置かれているところを見るに、ここは施設の集積庫であるらしい。

一同は短いスロープを下って部屋を横断しようとしたが、広間の中央に来るや、部屋の四方にあるゲートが一斉に開き、中から物々しい装備をした連中がぞろぞろとやってきた。

レンジャー部隊。まんまと待ち伏せを食らった。どこで情報が漏れたのかと勘ぐる暇もなく、やがて正面のゲートからよく見覚えのある顔が出てきた。

「よう、相棒」

ボツシュ。額に包帯を巻いてある以外、いつもと何ら変わらぬ高慢さで、彼はスロープのうえからこちらを見下ろしていた。

「生きていたのか、ボツシュ」

「ああ？ それはこっちの台詞だ。下層区でお前を捕まえるために、

クズどもが大層バカげたことをやらかしたみたいだが……でもよかったよ、そこで死んでくれなくて」

「お前の死を目の前で拝めるんだからな」そう得意げに言葉を付け足すのと同時に、かっかっか……静かに足音を立てて、ゼノが彼の後ろからやってきた。

「リュウ」1 / 8 1 9 2……」

彼女は足元を向いて歩みながら、やがてその鋭い眼差しをリュウに向けた。

「お前は、バイオ公社の任務において、特殊な実験体とあやまって接触……その結果、精神に重大なダメージを負っている」

「ゼノ隊長……？ 何を？」

彼の言葉に答えず、ゼノは二の句を継ぐ。

「反逆者と行動をともしたり、保護対象に過剰な思い入れを持つたり……全てのお前の行動は、精神的混乱の結果だ」

リュウはかぶりを振る。「違う、おれは、」

「おとなしく、我々の保護を受けるんだ、リュウ……」

「違う」

「今なら、まだ間に合う……」

職業的だった彼女の口調は、次第に懇願するような響きに変わっていた。

彼女は自分に戻ってきてもらいたいのだろう、それは胸が痛むほどよく分かる。

しかし、この意思是、ニーナを助けたいと思う気持ちは、偽りなく自分のものだ。精神的混乱などでは決してない。

リュウは静かに口を開く。叶うなら、この想いがゼノに届くように。

「行かせては……もらえませんか……？」

「はあ？」ボツシュが横槍を入れた。

「バカかお前。機密を持って行かすと思うのかよ……どっちにしても、お前はもうすぐ死、」

「リュウ、残念だが」ゼノが鋭い声でボツシュを制す。

「それは出来ないんだ……どうしても行くというのなら、仕方がない」

ゼノはリュウたちを包囲するレンジャー部隊に向けて、視線で合図した。

レンジャーたちは各々武器を構え、来る闘志の放出に向けて首を、拳を鳴らした。

「残念だよ、リュウ」

相手はざっと数えただけで十四、五人。彼らの先頭部隊はライオット・シールドを構えてがっちり脇を固め、三方向からじりじりと距離を詰めてゆく。

リュウたちは完全に袋の鼠ねずみだった。しかし、？バケモノ？の噂が広まっているせいなのか、レンジャーたちにはどこか怖気づいた様子がある。

だから思い切った行動に出ないのだ。リュウは何事かニーナとリンに耳打ちし、三人はそれぞれの方向を見据えて背中合わせに武器を構える。

第一に行動に出たのはニーナだった。ウォンドを旋回させながら横薙ぐとともに、右から左へと小気味よく巻き起こる爆発の連鎖が前方に並ぶレンジャーたちを蹴散らした。

それが戦火の号砲とばかり、リュウとリンが同時に駆け出した。敵も黙ってはいない。

「う、撃てえ！」

リュウに放たれた銃弾は、しかし、鮮紅色のオーラを放ちながら爆発的加速で飛び出した彼を捉えることはなかった。

ここで優先すべき撃破対象は銃や魔法杖を持った敵。リュウはライオット・シールドによる防衛網を力づくで突破し、後衛部隊に斬ってかかった。

一人、二人、血しぶきが飛ぶ。三人、四人、刃が鋭く閃き渡る。何発かの銃弾が頬をかすめ、あるいは肩を貫いていった。パダム

による爆撃、パルによる電流も同時に巻き起こる。

攻撃はリュウ一人に集中していた。しかし、これでいい。

リュウは攻撃を受けるたびに獣にも似た雄叫びを上げて、鮮紅色の軌跡を縦横無尽に描いていた。

一方、リンはニーナとともに大型コンテナの裏に身を潜めていた。ニーナが魔法を発動したのと同時に、リンは彼女をかつさらうかのごとく胸に抱えて素早く退避。戦闘はリュウが一手に引き受けるという寸法だった。

これはリュウの提案だったのだが、リンは何となくいたたまれない気持ちになる。確かにこちらの装備はハンドガン一丁で、リュウのような怪物じみた力も自分にはない。

あの包囲網を突破するには、リュウの得体の知れない力を頼りにするほかなかったのだ。ぎりつ、とリンは奥歯をかむ。

やがて銃声の驟雨^{しゅうう}が止み、場が完全に沈黙すると、ニーナが不安げにひよこつと外を覗いた。

硝煙が薄く立ちこめる中で、はあ、はあ、と荒い息遣いがこだましている。リュウが地面に剣をついてひざまづいていた。床やコンテナのうえ、レンジャーがあちらこちらに横たわり、血しぶきが辺り一面に散っている。

ニーナがぱたぱたと駆け出していき、リンも遅い足取りでリュウのところへ向かおうとしたが、その目は殺気を捉える。

リュウの背後、少し離れたところで男がむくりと腰を上げ、今まさに手に持った魔法杖を振り下ろさんとしている。

やらせるか！ リンはハンドガンを抜くや二発、三発、発砲しざまに男との距離を詰めてゆく。

銃弾は男の腹や腕を貫いたはずだが、相手はよろめきつつも倒れない。そして男はふらりとターゲットをリンに変え、最後の力を振り絞るように魔法を発動させた。

氷柱の波が轟音を立てて迫る。レイギル。レイガの一段階上位の

魔法だ。

回避も間に合わず、リンは苦し紛れに腕を広げたが、爆発が起きた。ニーナのパダムだ。

それが何連発と起こって氷柱を砕き、どこまでも無防備な敵の姿が真正面に浮かぶ。あとは冷静にトリガーを引くだけだった。

額を撃ち貫かれ、男は背中からぱたりと大の字に倒れ込む。決着だ。

リンは銃をホルスターにしまいつつ、リュウの下へ向かった。

「すまない、リン、ニーナ……」

彼の震える声とそこかしこが破れたジャケットが、ダメージの深刻さを物語っていた。

「あんたの負担に比べたら、たいしたことじゃないよ。それより

」

リンはキツとゼノをにらみつけた。彼女は戦闘が始まる前と同じ場所に立ち、その横ではボツシュが悲嘆するようにかぶりを振っている。未だ信じられないのだろう、その目に焼きついているはずの光景が、リュウが生きていることが。

現状、敵になりそうなのはあの女だけだ。リンはそう見越して、最後の敵を討つべく静かに歩き出したが、リュウがバツと左腕を広げて行く手を阻んだ。

「大丈夫だ。あの人とは、おれがやる……」

「リュウ？ でも、その傷じゃ」

「戦えるよ。おれは？ バケモノ？ なんだ」

リュウは自嘲気味に言いながら、よろよろと立ち上がった。

ついで剣を振るい、切っ先をゼノに向ける。彼女は初めからこうなることが分かっていたかのように、眼鏡のテンプルを小さく持ち上げただけで、動揺した様子はなかった。

「ドラゴンの力……か」

言って、ゼノは腰に交差させるようにマウントしていた一対の剣を素早く抜いた。

「隊長、おれは、おれたちは……行きます」

「リュウ、それはお前の意志ではない。お前にリンクした実験体の意志だ」

「違う。これは、おれの、」

「リュウ……残念だが、ここまでだ」

ゼノの瞳が鮮明な覇気を帯び、剣を十字に構える。

リュウの身体からはオーラが消えていたが、戦意をなくしているわけではない。

ゼノ（師匠）を倒して、証明して見せるんだ。自分の意志を。

(?) 剣の絆 - 後篇 -

長い沈黙の後で、先陣を切ったのはリュウ　　いや、ほとんど同時に飛び出した。

硬質な金属音が火花とともに飛び散る。リュウとゼノはいつ首が宙を舞うかすれすれの斬り合いを演じ、ときに飛びのき、間合いをつめ、果てることなく刃を交錯させた。

そのなかで形勢は徐々にゼノに傾きつつある。二振りの剣から繰り出される攻撃は終わりがなく、何度受け止め、捌いても、次から次へと息をつく間もない。

止むことのない斬撃の連鎖。リュウは防戦一方となり、じりじりと後退させられていった。

ゼノが腹めがけて突きを放つ。リュウは寸でのところで身をよじり、伸び切った腕をがっしりと脇に挟んだ。

瞬時に剣を右手から左手に持ち替え、袈裟がけにゼノの肩口を斬りつける。相手の反撃もまたこちらの肩を斬り裂いた。

両者の血しぶきが舞い、ひとまず互いに距離を取る。ゼノは呼吸を整え、リュウは剣をまた利き手に持ち替える。あとき剣を移動させたのは、ゼノの腕をホールドした利き手側からは満足な攻撃が出来ないと判断したためだ。

リュウは本気でゼノを殺しにかかっている。それは相手も同じ。この戦いに生ぬるい情けや感情などは無用なのだと、二人は理解していた。

「どうした、リュウ。さっきまでの動きが嘘のようだぞ」
眼鏡の位置を直しつつ、ゼノは挑発するように言った。

リュウは懐かしさを感じる。いつの日だか、こうして、ゼノと剣の稽古に励んだ。

もちろん、真剣ではなくて、命を取り合ったためではなくて。ひたすら、明日を生きるために。

いや、いけない。思い出してはだめだ。リュウは雑念を振り払おうときつくまぶたを閉じ、誓いを立てるように十字剣を胸に構えた。次にまぶたが開いたとき、瞳はすでにいつもの色を失っていた。毒々しいとさえ言える赤が渦を巻き、鮮紅色の粒子が燃え爆ぜる焰のように立ち昇ってゆく。

覚悟は決まった。

「行きます」

残像をその場に残し、リュウの実体は半円を描きながらゼノに向かっていった。

彼女は寸でのところで殺気を感じ取る。とつさに剣を構えたところに斬撃が飛び、これはどうやら防いだが、続いて背後にただならぬ気配。

瞬間的に飛びのいたものの、彼女の頬にはぱっくりと裂傷が出来ていた。リュウの姿はまたも見えず、ただただ大気を引き裂くような不気味な音だけがこだましている。

右か？ 頭上か？ いや

「ここだ！」

ゼノの剣が背後から飛んできた斬撃を受け止める。彼女は素早く胴体をよじって右の剣で斬りにかかった。

次に左で、次に右で、完全に相手の姿を捉えた彼女の剣は、怒涛の連撃を見せた。

リュウの体勢がわずかに傾ぐ。彼女は手元で双剣を揃え、ありつたけの力を込めて突きを放った。

それはオーラの防壁を貫いてリュウの腹に到達。肉を捉えた感触は薄かったものの、リュウははるか後方に吹き飛ばされた。

なおもゼノの猛追は続く。力強く疾駆しながら両腕を交差させ、刃が薄紫色の光を帯びてゆく。そして力がみなぎったところで、ゼノは斜め十文字のかまいたちを放った。

飛ぶ斬撃。リュウはコンテナにしたたか背中をぶつけ、未だ体勢が整っていないところだった。

直撃。コンテナはスパッと四つに分断されて鉄片を散らしつつ宙を舞い、粉塵が立ち込める。そのなかからやがて赤い弾丸が飛び出してきた。

リュウは裂ばくを上げながらゼノへと直進し、三振りの剣が激しく衝突した。瞬間的に鎬しのぎを削る力の拮抗があったのち、両者は弾かれたビー玉のように飛んでいった。

もはや人間同士の戦いとは思えない光景に、リンとニーナ、そしてボッシュはただ啞然とするばかりだった。一方は祈るような思いで、一方は期待と焦燥を募らせながら。

やがて、広間の中央に姿を見せたのはリュウだった。半歩遅れるようにして、ゼノもよろめきながらも戦いの舞台に立つ。

眼鏡のレンズは粉々に砕けて、もうとつくに役割を果たしていないが、ゼノの癖が治ることはなかった。

彼女はいつものように眼鏡を持ち上げると、落ち着き払った声で言った。

「その力……やはり、危険。ここで完全に止めねば」

砕けたレンズの欠片がぱらりと落ち、ゼノは双剣を逆手に持った。それに呼応するかのように、リュウもまた剣を逆手に構える。

絶命剣。二人が持ちつる最高の剣技であり、また戦いの最終局面に打たれるべき終止符。

師として、ゼノは。子として、リュウは。この戦いを終わらせようとしていた。

「行くぞ、リュウ」

彼女の身体が蝶のようなたおやかさで飛翔する。リュウは振り上げた剣の先に力を収束させる。

爆裂。鮮紅色と紫の稲妻が交じり、広がり、止め処ない輝きの奔流となって大気をつんざく。

輝きは次第に失せていき、底抜けの沈黙が土煙とともに舞い戻ってきた。

立っていたのは

* * *

大勢のレンジャー候補生が肩を並べて帰ったあと、一人の少年がぼつんとミーティングルームに残っていた。

少年はしょぼくれた様子で立っている。講習は終わりだ、彼らと遊びに行かないのかと、ゼノは声をかけた。

「みんな……ぼくのことを、ローディだって、弱虫だって……」

少年の目からすうっと一筋の涙が流れ、やがてどっと泣き出した。

「よしよし、泣くな。私がお前に剣の稽古をつけてやる」

ゼノは彼の頭を優しく撫でた。

少年の涙は次第に収まり、彼は上目遣いに問いかける。

「ぼくも、強くなれるかなあ……？」

「ああ、なれるさ。D値なんて関係ない。お前の努力次第だ」

少年の顔に笑みが弾ける。ゼノは彼の名前を呼ぼうとして、しかし、とっさには出てこなかった。

今日が彼の属する第五十六期レンジャー候補生たちとの初めての顔合わせだったからだ。

「リュウ、です。リュウ＝1/8192」

「私はゼノだ。改めて」

ゼノは少年の、幼く、無垢な手を取った。

「よろしくな」

* * *

カラン、とむなしい響きを立てて、ボツシュの前に一振りの剣が転がってきた。ゴクリと唾を呑んだあと、彼は負け犬さながら逃げ出した。

リンはリュウの下へ歩み寄ろうとしたが、その背中が震え、大きな悲しみを宿していることに気付いた。彼は静かに涙しているのだ。

ろつと、リンは直感した。

「ここを抜ければ、工業区に出られる……」そうしてリンが話しかけるには、長い沈黙を要した。

リュウは依然として背中を向けたまま。今にも断崖から飛び降りようとしているかのような、絶望に打ちひしがれた佇まい。

もうどうにも見ていられなくなって、ニーナは彼の胸に顔をうずめた。力いっぱいに、ぎゅうつと、彼の心が消えてしまわないように。

「そつだ。おれは、決めた……。君を空へ連れてゆく。後悔はないんだ」

リュウは自分に言い聞かせるようにささやいて、おぼつかない足取りで歩き出した。

スロープのうえには刀身が紫色がかった剣が一振り、横様に転がっていた。

ゼノの愛用していた紫音剣^{しおんけん}。リュウは彼女の眠れるまぶたにそつと触れるように、剣を手を取った。

これまでの激闘で自分の剣はボロボロになっている。同じ十字型と言えど、切っ先の長さや鍔の形状は微妙に違う。

しかし、紫音剣はリュウの鞘にぴったりと収まった。そこがいつもの場所とでも言うように、あるいは、ゼノが彼とともにいることを望んだかのように。

リュウはキツと顔を上げて涙を払い、力強く前を見据えた。行く、ニーナ。

空へ。

(?) ネガティブ - 前篇 -

ほの赤く発光する蠟燭の群れ。

数あるうちの一本から、いま、ふつと火が掻き消えた。

「ゼノによる上級レンジャーの一団が、敗走した……」

コツリ、と床の大理石に硬質な足音を響かせ、エリュオンは言った。

「やはり……人の手にはあまる、と？」男女どちらか判然としない、幼い声が問いかける。

その横で黒い眼帯をした男　デモネドは、やるせなさそうにかぶりを振っていた。

「その時が来た、ということか……」

「いや、」エリュオンが二の句を継ぐ。

「？ネガティブ？を使う」

「ネガティブ……？　他ならぬ、？人の暗部？ではありませんか！」
清らかな女性の声が、勢いを持った水流のように場を打った。

ついでデモネドが猛然と立ち上がる。叩かれた机と、倒れた椅子、
聖堂にはしばし残響がこだました。

「分かんない……なぜ、こんな回りくどい手を！？」

エリュオンはうつむくばかりだった。

「すでに動き始めた流れのなかで……人は、あまりにも無力だ」

「何が言いたい？」

「だが、それは我々と同じだ……デモネド」

およそ人間らしくない、彼の赤い瞳が眼光鋭く冴え渡った。

* * *

エリュオンは赤絨毯の敷かれた列柱廊を歩いていた。

つと、背後に何者かの気配を感じる。まるで廊下に伸びる自らの

影に追われているかのような感覚。

しかし、振り返るなり辺りを見回すなり、エリユオンに亡霊を探ろうとする様子はなかった。気配の正体が何か、彼はとつくに分かっていたからだ。

「会議の場にいなかったが……どこへ？」

一拍、間を挟み、答えが返ってきた。

「見てきた。俺たちの敵が、どんなやつかをな」

ジェズイット。彼はあたかも初めからそこにいたというように、石造りの壁に背もたれて腕を組んでいる。

「ゼノたちのレンジャー部隊はやられちゃった……。あのガキ、竜ドラゴンの力がある程度コントロール出来るらしい。

意識的なレベルかは分からないが、暴走することはなかった。やつのD値、1/8192じゃ、適格者にはなり得ないはずなんだがな」

「それで、私に何を問いたい？」

「別に？　ただ、あんたは楽しみにしているみたいだからな。あのガキがここへやってくるのを」

「クピトに勅命書を持たせて、現在ネガティブに対象の殲滅を命じるところだ……。彼の命運も尽きるだろう」

「それならそれで、」ジェズイットはおもむろに歩き出す。

「あいつはそこまでの器だったってことだ。それと……隠し事はあまりするもんじゃないぜ、？　オリジン（始原の唯人）？」

振り返りざま、彼はシニカルな笑みを浮かべる。

一方、エリユオンの表情は固く閉ざされたままだ。

お手上げだな、というように肩をすくめると、ジェズイットの姿は暗闇に紛れて消えた。

「何のつもりだ、オリジン」

闇の底で轟くような残忍な声が、つと彼の頭のなかでよみがえった。

「昔を懐かしみに来たか？　失せろ、オリジン。戯れに費いる時間などない」

彼は長らくぶりの再会を喜びはしなかった。牙を剥き、朽ちた翼を躍動させて怒りを露わにしていた。

どくん、と鋭い痛みが走る。エリユオンは心臓の辺りを押さえたが、すぐに痛みは遠のいていき、また落ち着いた足取りで歩みだした。

『時間がないのは同じだ、アジーン』

そう、かつての？戦友？との対話を思い出しながら。

* * *

リユウたち一行は工業区を進んでいた。

工員の姿はなく、辺りを領する闇のなかで何かが蠢く気配と、取り留めもない静寂が広がっている。照明は所々生きているが、数が少なく、この不気味な空気を払うには頼りない。

クレーン装置や何基ものベルトコンベアが配備された作業部屋、通りがけに見てきたそれらの設備から察するに、ここは製鉄工場であるらしい。だが、最下層区にあった施設と同様放置、あるいは一時的に稼働が停止しているようだ。

通路のあちらこちらにデイクの排泄物が散らされ、アブラクイがのさばっているところを見ると前者だろう。前回の施設よりもタチが悪いのは、四足歩行型巡回ロボットであるチャペックが警備の目を光らせていることだ。

単純に考えて彼らを稼働させたまま工場を閉鎖させたのだろうか、ロボットは命令に忠実だ。施設を守る意義を失ってなお、背中に一門のガトリング砲を備え、触手のように伸びた丸い瞳からサーチ・ライトを放射し侵入者はいないかと気張っている。

リユウたちはレンジャー戦の傷が癒えぬ身体で、彼らの動向に注意を配らなければならなかった。発見されたところで倒すのは難しいことではないが、余計な戦闘は避けるにこしたことはない。

暗闇に同化してサーチ・ライトの警戒網を逃れつつ、一行はよう

やく工業区の間地点までたどり着いた。横幅一人分の非常通路、チャペックの監視もここまでは届かない。

辛そうに息を喘がせるリュウ、ニーナを見て、リンは休憩を取ろうと提案した。うなづく間もなく、リュウはどさりと床に腰を下ろした。

「道があっているかどうか、私は先を見てくるよ」

言って、リンは足早に通路を抜けた。

辺りに人気がないのを確認すると、彼女はポーチから通信機を取り出した。

しばらくの呼び出し音のあと、低くしわがれた男の声が耳元に聞こえる。

メベト「1/4。トリニティのリーダーだ。」

「はい……レンジャーの防衛線がありました、何とか」

リンは努めて声を殺し、L字型に曲がった通路の向こうをしきりに伺った。この会話をリュウとニーナに聞かれてはならない。

「先刻、下層区街から報告したとおり、あの少年、リュウは……？
ドラゴン竜？の力を持っています。本人が自覚しているのかは分かりませんが、ニーナを助けるために？空？を目指す、と……」

リンの顔が次第に不穏の色を帯びる。「リュウを組織に、ですか……。現状、確かに彼は政府に楯突く形となっていますが、それはあくまで自分の意志を……」

「はい、はい……。見込みは薄いかもしれませんが、了解しました」
通話はそこで途切れた。指令は引き続き、対象とリュウをアジトに連れて行くこと。通信機をポーチにしまう折、紙幣の束が目についていた。

ニーナの靴を買いに行くからと、リュウに頼んでもらったものだ。それはただの口実で、自分は組織に連絡を入れていたのだが、もう少し時間があれば、本当に靴を買ってやるつもりだった。

二人の下へ戻ってきたリンだったが、ニーナの笑顔を見ると後ろめたい気持ちになる。いつもと何ら変わらないはずなのに、リュウ

の眼差しが疑いをはらんでいるふうに感じられた。

「どうだった？ 道、あつてた？」

気のせいだった。リュウは疑うどころか、本当に自分のことを仲間だと思っている。

リンは普段のように振舞おうとしたが、笑顔が少しぎこちなくなつた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

鉄くずやスクラップが積まれた集積場。

錆び鉄を含んだ汚らしい空気、弱々しく明滅を繰り返す白熱灯。この世の外道たちがのさばるに相応しい闇が、そこにあった。

「ほお、最高統治者の御印……」

赤いタブレットに目を通しながら、男が言う。

その声は不自然に濁った響きを持ち、まるで獣が無理をして人語を喋っているかのようなだった。

「？ 勅命？……ということですか」

細やかな少女の輪郭を持った子供　クピトは、淡々と話しはじめた。

「そうです。あなたたちには、あなたたちに見合ったことを……して頂きます」

くく、と男が不気味に笑う。？あなたたちに見合った？こと。

クピトと対する男は、闇に見開く瞳がペイントされた趣味の悪いマスクで目と鼻を覆い、口はハオチーのそのようにすり鉢状となっている。

レンジャーが身につけるようなジャケット、ズボンに包まれて肉体こそ見えていないが、男は人間と呼ぶにはあまりに異質な姿を持っていた。

その後ろに並ぶ二名も一切の人間らしさを持ち合わせていない。

一人は腕と足のバランスが著しく崩壊した巨人で、もう一人は鉄球

から手足と頭が生えたような肥満体。

彼ら三人を前にクピトは慄くどころか、その眼差しは一抹の哀れみを含んでいた。

「結構、たいへん結構です……。とても、いいですよ。

世界を統べるオリジンが私たちを必要とし、私たちに好きにしろとおっしゃる……。くく、とてもいい……」

ネガティブ。人ならざる彼らは、ただただ、愉快そうに笑っていた。

(?) ネガティブ - 後篇 -

休憩地点を出発して三十分ほどは経過しただろうか。本来なら中層区に到達していてもおかしくはないが、チャペックの目を避けるために遠回りを余儀なくされている。

薄暗い通路を進む一行に口数は少ない。ニーナは息を喘がせ、しきりに立ち止まっては辛そうに顔をしかめる。そのか細い足は悲鳴を上げていた。

しかし、彼女はリュウとリンに置いて行かれまいとして、距離が開いては二人の後をペタペタと追った。

いくら怪物じみた再生能力があるとはいえ、戦闘に次ぐ戦闘、どの角を曲がっても尽きることはない窮屈で暗い空間はリュウの心身を確実に磨耗させていた。先頭を真つ先に進むリンも、疲れを見せまいとしてはいるものの、その額には玉のような汗が浮かんでいる。一行の集中力はかなり散漫な状態にあった。

だから異変に気付くのがいささか遅れたのかもしれない。第二工業区に足を踏み入れてからというもの、チャペックの姿が見当たらない。発見したとしても、それは大破しているかスクラップ同然の有様だった。

施設の老朽化が原因だろう。しかし、それではこれまでの道程にいたチャペックが疲れも知らず働き続けていることに説明がつかない。ただ、今の一行には勤勉なロボットたちの死について考える余裕はないのだった。

漠然とながらもリュウが危機感めいた不穏さを察知したのは、四角くて広い作業部屋に入った時だった。これは……血の臭い？

きやつ、と後ろでニーナの声が聞こえた。壁面に取り付けられた照明が届かないところで人が倒れている。

更に辺りをうかがってみると、ベルトコンベアにもたれかかる形で一人、操縦盤が設けられた司令室らしき小部屋の中で二人、衣服

と床を血に染めて事切れている。

剣やシールドなどの装備を見るに彼らは自分たちを追ってきたレンジャーだ。それがすでに何者かの手によって殺害されているという事実、一行は首を傾げた。

小部屋から出ると、リュウは視界の隅に何かを見つけた。この時間すら凩いているような静寂のなかで、そのシルエットは人の形をし、呼吸に合わせて右に左に微動しているかに見える。

リュウは剣の柄を握りながら、部屋の中央部に至る短い階段を下りていった。近づけば近づくほどに、不気味な影は次第に輪郭を帯びてリュウたちの前に姿を現していく。

ニーナはとつさに顔をそむけた。

「はじめまして、リュウさん……レンジャーたちは邪魔なので、ふふ……私が片付けておきましたよ……」

リュウは始め、自分は一体何を目の当たりにしているのだろうと思った。人間？ デイク？ いや、そんな生易しいものじゃない。強いて言うなら、この世の暗部だ。見てはならないもの、触れてはならないもの、悪魔死神の類。それが目の前でノイズだらけのしやがれた声で喋り、すり鉢状に細かく生え揃った牙が虫のようにぞろぞろと蠢いた。

口からうへは前面に赤い蛍光色で一つ目が描かれた円形のマスクですっぽり覆われ、禿げ上がった頭には所々釘のようなものが突き刺さっている。かすかに見える男の肌はくすんだ灰色だ。

そんな人ならざる異形の姿が傍らにある大型機械に付けられたランプの光を受け、男に備わった異質、不気味さを何倍にも助長させている。リュウとリンは武器を構えたまま半ば硬直していた。

男は両手に持ったダガー・ナイフを勢いよく振るう。その切っ先から飛び散った赤い雫が男の後ろで倒れているレンジャーの血液であることは明白だった。

「それじゃあ、始めましょうか」

言うや、男はリュウに切ってかかった。それは体内に骨があるの

かどうか疑問に感じられるほど常軌を逸した動作ではあったが、見た目に反して振り下ろしは早い。

リュウはとつさに飛びのいて事なきを得る。同時に、彼の背後からリンが駆け出した。弾丸が後ろから男の左肩を貫き、鮮血が虚空を舞った。

「い……痛い……痛い……痛い……痛い……」

リュウたちは思わず両耳を塞ぐ。男の金切り声は痛々しいほど哀れな響きを持っていたが、同時に『もつといたぶってください』とでもいうような余裕も感じられる。

事実、男はかすかに笑っているのだ。リュウは直覚する。こいつは？ 狂って？ いる、と。

男の禍々しさに気圧されてか、ニーナはぬいぐるみをきつく抱きしめたまま立ちすくんでいた。この戦闘はリンと二人でどうにかするしかないだろう。リュウは袈裟懸けに剣を振るった。

しかし、男の軟体生物のような奇怪な動きに翻弄され、なかなか的を射ることが出来ない。それはリンも同じだった。

ときには常人には到底無理な角度まで身体を丸めたり、機械やパイプ管を足場に宙を飛びまわったり、そうして回避にばかり専念しているかと思えば、あらぬ所から攻撃が飛んでくる。

まったく予測がつかない。リュウたちの戦意はことごとく空回りし、一方で男の攻撃は徐々に速度と重みを増してくる。これまではウォーミング・アップだったというわけだ。

「二人がかりでこの程度とは……拍子抜けですねい」

男は足にバネでも仕込んでいるかのような跳躍で天井すれすれまで飛び上がると、下に向けて両手を広げた。

リュウとリンの間に紫がかった黒い球が出現し、急速に膨張するや盛大に弾けた。属性不明の魔法、ブンパ。

とつさに防御の構えを取ったものの直撃を被った二人はそれぞれ壁に激突。舞台には男とニーナが残された。

「逃げなくていいんですか……？ それとも怖くて動けないんです

か……？」

不自然に首をぐらつかせながら、男はじりじりとニーナに迫る。死を目前にしながら彼女は立ち尽くしたままだ。

「ふふ……今、ラクにしてあげましょうねい！」

男は刃を振り上げた　　が、刹那、男の足元で赤い輝きが放たれた。

ニーナはただ怯えていたわけではなかった。リュウとリンが戦っている間、彼女はいくつかのポイントに？魔法陣？を描いておいた。あとは魔法陣のうえに男を誘い込む。そう、見るからに弱々しい女の子を演じて。

魔法陣から爆発的な勢いで生まれた炎はたちまち男を火達磨にし、皮膚の焦げる匂い、聞くにも耐えないうめき声が撒き散らされた。低級魔法陣の一つ、グランパダム。

ニーナの行動にはリュウたち自身も驚かされた。そして窮地から一転、絶好の好機。リュウとリンは『行くぞ』と視線で言葉を交わし、男に向かって一直線に走り出した。

「乱れ舞え！」

リンは新たにカートリッジ・インした弾丸をありったけ男に撃ち込む。

弾丸が身体を貫くたびに男の右手が、左足が、上半身がうねるように躍動し、さながら破滅の輪舞曲^{ロンド}でも踊っているかのような有様だった。

そして最後はリュウの横一閃。男はぴたりと踊るのを止めて、その場に倒れこんだ。決着。

リュウは剣を鞘に収めた後、真っ先にニーナの元へ向かった。頭を撫でられると、彼女は満足そうに笑った。二人の役に立てたことが嬉しいのだ。

しかし、リュウには気がかりなことがあった。今しがた討ち倒した男の正体についてだ。

「なぜ、こいつはレンジャーたちを……政府の戦闘員じゃないのか

？」

薄い白煙を上げ、黒こげとなった男の亡骸を遠巻きに眺めながら、リンは険しい面持ちで答えた。

「非合法活動を専門とする？ネガティブ？と呼ばれる部隊があると聞いたことがあるが……これが？」

「ネガティブ？　なんで、そんなやつが？」

「あんたやニーナは、いよいよ政府にとつて？あつてはならない？ものになったみたいだね……」

リュウは改めて自分の置かれた状況を知った。上級レンジャーだけでなく、政府は人外の者まで使つて自分たちの殲滅に乗り出したのだ。

ネガティブが部隊だというのなら、他にも敵が襲ってくるかもしれない。名前も定かではないが、あの男のように醜悪で？狂つた？連中が。

一行は足早に部屋を後にした。激しい戦闘の余韻すら嘘になった静けさのなかで、男の手足はあらぬ方向に曲がってしまっている。身体の至るところに風穴、ついで胸には肩にかけて大きな刀傷がつけられていた。

しかし、一行が部屋を去ってからまもなく　　男の首が不意に、ぐるりと、勢いよく天井を向いた。

「フハハ……強い、強いですねい……」

(?) 狂おしい心 - 前篇 -

ボツシュはバイオ公社の通路を歩いていた。

その額に巻かれた包帯や頬につけられた刀傷が憎くてたまらないというように、怒りに満ち満ちた表情だ。

「よう、ボツシュ」

研究室の前ではボツシュと同年代と思しき若いレンジャーが立っていた。

ひょうきんというよりは皮肉っぽい表情で、気さくというよりは厚かましい態度で、彼はへらへら笑いながらボツシュに近づいた。「聞いたぜ、ゼノ隊は全滅だってな……オレはこっちの警備に回されて命拾いしたぜ」

ボツシュは少年を一瞥、まるで相手にする気はないというように歩き出した。

「待てよ、腰抜け！」

ぴたり、とボツシュの足が止まる。

「お前、一人だけ逃げてきたんだってな。腰抜け！」

少年の手がそつと肩に下りる。「お気の毒にな、エリート様。今回のは取り返しのつかない失態だ」

腰抜け？ 失態？ ボツシュの額に浮かんだ血管がびくりと動く。両拳が怒りに震える。

彼は思わず大声を出した。

「逃げた……？ 俺が？ 剣聖に連なるこのボツシュが!？」

「そつ、お前は負けたんだ。？リュウ？にな……」

少年の口元が卑しい笑みを作った。

笑われている。見下されている。ここには少年、彼一人しかいないのに、ボツシュは何百という人間に白眼視されているような心地になった。

彼らはあるとあらゆる罵詈雑言をボツシュに浴びせた。負け犬敗

者ニセエリート様。それら激しく交錯する大音声で頭がいつぱいになると　ボツシュのなかで何かが壊れた。

「ボ、ボツシュ、何を……っ!？」

少年の首からはおびただしい量の血が噴き出している。

ボツシュの右手にはレイピア。その切っ先からは赤い雫が滴り落ちていた。

「そうだよ……リュウだ……」

彼の瞳はほとんど焦点が合っており、言葉はほとんどうわごと
のようだった。

「俺、あいつを殺さなきゃ……」

* * *

リュウたち一行はL字型の狭い通路を列になって進んでいた。

先頭はリン、次にリュウ。二人の話題はもっぱら先ほどの男のこと
とで、ニーナは輪に入れずにふてくれされたような顔をしていた。

「トリニティの方でもネガティヴ（やつら）のことはあまり分かっていない……さっきも言ったように、非合法的活動を専門とする政府の暗部だという以外はな」

「同じ政府の人間でもあいつはレンジャーを殺してたし、それに人間の姿をしてなかった……あれはなんだ？」

「恐らくはバイオ公社で肉体の強化改造を受けたんだろう。ディクの生体工学を応用した改造手術さ、それで超人的な力を得ることが出来る。人間の面影をなくしちまうぐらいにね」

リュウは得体の知れない歯痒さを感じた。人間であることを放棄してまで、彼らは何が欲しいというのだろう。強さ？ 尽きることのない命？

分からなかった。ただ、言えることは、もし強化改造が彼らの意志ではなくて、巨大な権力の下に無理やり実行されたこととしたら　リュウは政府を、世界を許すことが出来ない。ニーナの時と

同じように。

「うー！ うー！」

通路を出たところで、ニーナが声を上げた。リュウの袖を引っ張って何事か訴えようとしている。

大型機械だろうか、部屋の隅に丸っこくて歪なシルエットがあった。近くの照明が切れているために一体何なのか判然としないが、それは仰々しい足音を立てながら向こうから正体を現した。

デイク。それもリュウがバイオ公社で倒したアーム・ストロングと似たタイプで、先端に三つ指のアームがついた砲塔のような腕に、胸の中央に埋め込まれたコア。顔半分を覆った鉄兜からはそり立つ角が二本生えている。

でっぷりとした巨腹を支える足は短く、がに股気味に開いている滑稽さは相変わらずだが、いましがた出てきた通路の入り口をすっぱり塞いでしまうほどの大きさにはかなりの威圧感がある。

リュウたちは後ずさりながらも武器を手についたが、不意に背後からつめき声が聞こえた。暗闇に溶け込むようにして、身の丈二メートルを悠に超えるサイクロプス型のデイクが長い腕を垂らして立っていた。

「挟み撃ちか……」

リンは舌打ちした。

壁伝いに張り立つように建立された橋梁型通路はせいぜいが横幅二人分、半機械の怪物が出入り口を塞ぎ、行く手には力と素早さに自信があると見える巨人。

絶体絶命というには充分すぎる状況だ。リンとニーナは怪物を、リュウは巨人を、それぞれ対峙し、あとは戦いの火蓋が切って落とされるのを静かに待っていた。

「ニーナを頼んだぞ、リン！」

先手を打ったのはリュウ。双眸に燃え盛る炎を宿し、真紅のオーラをまとって弾丸のように突進する。初めから全力で勝負をつける気だ。

巨人は両腕を斜め十字に構えてリュウの体当たりを受け、足場の鉄条網に激しい金属音を立てながら突き当たりの壁まで後退していった。

リュウは決着をつけようと巨人の顔めがけて突きを繰り出そうとしたが、急に右腕が動かなくなつた。巨人の手に驚掴みにされたのだ。

まもなくリュウのみぞおちに内臓が弾けんばかりの衝撃が走つた。巨人の拳打をもろに浴びた。強烈な突き上げにリュウの足は地面から離れ、巨人は続けざまに次の攻撃に移る。

それは至つて動物的で、しかし最も威力のある攻撃だつた。リュウの首を左手に掴んで力ごなしに壁に叩きつけ、対象が力を失つたあとは無造作に投げ捨てた。

リュウはしばし前後不覚に陥っていたが、細い鉄棒で出来た橋の欄干を掴んで懸命に立ち上がろうとした。オーラはすでに掻き消えている。かすれた視界のなかで、はるか上方からこちらを見下ろす冷たい眼差しがあつた。

そのうち爆発するんじゃないかと思えるほどの痛みが全身を蝕んでいるが、何せこつちは？バケモノ？だ。悲鳴を上げていた内蔵はやがて静まり、意識もはつきりとしてきた。まだ戦える。

リュウはキツと巨人をねめつけて、いざ斬りかかろうと構えを取つた。が、おかしい、視界が急にぐらついた。足にも腕にも力が入らず、意識は半ば混乱状態にある。

身体に受けたダメージなら例の再生能力でとくに回復している。巨人が何かしたのだ。相手の脳みそに毒薬を流し込む魔術でも使つて。

立ち尽くしたまま動けなくなつたリュウの身体は巨人にとって格好のダミー（的）。腹を、胸を、顔面を、リュウは鉛のように重い拳で徹底的に打ちのめされた。

ボロ切れ同然のようになつたリュウの首を掴み、巨人は欄干の外に宙吊りにした。ふっと手を離してしまえば、リュウは深い闇のな

かをどこまでも落ちていく。地底に達した頃には再生能力も役に立ってはくれないだろう。

しかし常人ならとくに意識を、いや生命尽き果てている状態でリュウにはまだかすかな意識があった。剣を握る手に力を感じる。

紫音剣。これにはゼノ、彼女の魂が宿っている。

そうだ。この剣を手にした戦いで負けるわけにはいかない。リュウは裂帛を上げながら、がむしゃらに剣を振った。半円状に閃いた剣は巨人の両腕を切断した。

リュウは落下の寸前で欄干を掴み、舞台に振り返くと再び剣を振る。巨人の足元から壁にかけて走った刃の亀裂から電撃が生じ、そしてリュウは高らかに振り上げた剣を地面に炸裂させた。

無数に生じた雷の刃が巨人の全身を斬り刻み、一秒と待たず肉片に変えた。

紫音絶命剣。ゼノが有する最高の剣技で、リュウはこれに打ち勝って彼女との戦いを制した。本来なら滝のように降り注ぐはずの巨人の返り血を一滴残らず吹き飛ばすほどの威力を、リュウは身を持って味わい、いまや自分のものにしたのだった。

ありがとう、いや、さよならか。つと脳裏に過ぎったゼノの姿に、リュウはどんな言葉をかけてやれば良いか分からなかった。

一方、ニーナとリンは苦戦を強いられていた。

巨体がまとった鋼の装甲を前に下級魔法程度では歯が立たず、せいぜいが足止めぐらいにしかない。

拳銃から放たれる小さな弾丸などはもつと役に立たなかった。生身の部分を狙って弾丸を撃ち込もうにも、あの大きな両腕を広げられてはお手上げだ。まさに鉄壁。

しかし、それよりもリンを焦らせていたのは 残りの弾がわずかしか残っていないからだ。レンジャーの防衛線、ネガティブ、これまでの戦いで予備カートリッジのほとんどを使い切っている。

そんな貴重な一発一発を、あの忌々しい怪物は容赦なく弾いてしまふ。リンは舌打ちをしながら、最後のカートリッジを装填した。リュウが戦列に加われれば勝機も見えてくるだろうが、これまでずっと彼一人に負担を強いてきた。

まがりなりにも彼女も戦士、プライドがある。この戦いはどうしても自らの手で決着をつけたかった。それはニーナも同じ様子で、初めて会ったときのような怯えやすぐにリュウを頼ろうとする弱さはなくなっていた。ウォンドを両手に敢然と立ち向かい、今の自分が持ちうる全力で相手に挑んでいる。頼もしい限りだ、彼女と一緒になら作戦を遂行できるだろう。

リンはニーナの耳元に何事かささやくと、相手に向かって右側に走り出した。天井付近に張り巡らされている水道管には流れ弾が当たり、先ほどから水が噴き出している。

リンは穴の近くに弾丸を浴びせ、するとパイプは真つ二つに割れた。ひしゃげたパイプの切り口からどうどうと滝のように水が流れていく。床は水浸し、敵はずぶ濡れ。

相手の振り払いをかわし、リンは通路に飛び込むや叫んだ。

「いまだ、ニーナ！」

ニーナはウォンドを旋回させて魔法を発動させる。雷撃魔法・パル。

下級魔法なので威力は微々たるものだが、大量の水を味方につければ話は違う。小さな稲妻が鉄兜の上で光を放つと同時に、敵の身体は激しい痙攣に見舞われた。

まるで足が床に突き刺さったように硬直し、腹の重さに引きずられていた背筋がピンと伸びきっている。やがてスパークが収まると、身体の節々から黒煙があがり、敵はがっくりと頭を垂れて沈黙した。「やったか……？」

リンはおそろおそろの歩み寄ろうとしたが、鉄兜の下の眼に鋭い光が灯った。更にコアが強く輝き、何やらモーターが高速回転するような音が響き始めた。

そして咆哮。敵は自らを奮い立たせるように帛きぬを引き裂くと、リンに躍りかかった。不意を突かれる形になったものの、リンは寸でのところでアームの猛撃をかわした。

ニーナが立て続けにパルを放つも敵の勢いは止まらない。リンは危ういところで敵の攻撃を回避していたが、とうとう壁際に追い詰められてしまった。

着地に失敗して尻餅をついた際に、ポーチから銀色のケースが飛び出してきた。弾丸を収納している箱だ、中にはもう一発もいや、ある。それも通常とは違う特殊な弾丸が。

これは中に爆薬が仕込んであり、相手に着弾すれば爆発するといいわば超小型ミサイルだ。使い所が難しいのと、暴発の危険を考えて今まで使ってこなかった。

しかしこの状況下でそうは言っていられない。リンはケースの中から爆薬弾丸を一発握りしめると、敵が腕かひなを振り下ろすよりも早く飛び上がった。

相手の左肩に足をつけ、大きく開いた口のなかに弾丸をねじ込む。そのまま飲み込んでしまうことのないよう舌の裏に、だ。

「ニーナ……こいつの口に火をつけてやんな」

リンはさつと飛び降り、勝利を確信したような足取りで悠々と歩く。

顔の周囲に赤い光の粒子が収束し始めていることなど意にも介さず、敵はリンの後頭部に鉄槌を振り下ろさんとしていた。

「爆ぜろ」

ニーナのパダムが炸裂したのに半秒遅れ、小さな破裂音が空を薙いだ。爆発は一瞬、それもごく小規模なものだったが、脳みそを吹き飛ばすには十分な威力だった。

決着。やがて通路の先から、リュウが足を引きずるようによろろとやってきた。

「大丈夫か？ リュウ」

「こっちは何とか倒したよ。そっちも終わったみたいだな」

「ああ、楽勝だったね」

リンは二ーナの頭に手を置いて、にこりと言ってみせた。所々破けたジャケットに、痣と傷だらけの顔。いかにも満身創痍のリユウだったが、こちらの冗談に苦笑いを浮かべていられる余裕はあるようだ。た。

「なんだ、あれは……？」

リユウの後方に光の塊が見える。それは黄金色に煌き、尾を引きながら頭上を旋回していく。

続いてリンの後ろでも同じ現象が起きた。大の字に倒れた敵のコアからぽつと光の塊が浮かび、それらは一つに溶け合うようにぐるぐると渦を巻きながら、やがて消えた。

一行はしばし啞然とし、リンが口を開いたのは随分と後のことだった。

「聞いたことがある。数ある魔法の中には、死者の魂を扱う？亡魂術？というのがあった……」

「今のもそれなのか？」

「分からない。私だって魂を見るのは初めてなんだ」

何か背筋が凍るような思いに駆られた一行は、足早にその場を後にした。

(?) 狂おしい心 - 後篇 -

中層区へと続く最後の部屋で、リュウたちはまたしても異変に直面していた。自分たちを待ち伏せていただろう上級レンジャーたちが血溜まりに伏している。

血が凝固していないところを見るに、まだ死んで間もないのだろう。先ほどの男のような頭の狂った輩が近くににいるのかもしれない、リュウたちは辺りを見回した。

何かいる。広間の中央で不気味に踊る影。わざわざ危険を冒してまで正体を確かめる必要などないのだが、生憎と中層区へのゲートは影の背後にある。

そしてリュウの不吉な予感現実のものとなった。倒したはずのあの男、あの男が、右に左に身体を揺らしながら平然とそこに立っていたのだ。

「やあ、リュウさん……またお会いしましたねい」

リュウは我が目を疑う。いくらまぶたをこすって目の前の悪趣味な幻は消えてくれない。男は確かに存在しているのだ。切れかけた天井の照明を背に、この世のあらゆる醜悪の権化といった風情で。

「改めて自己紹介をさせていただきます……私の名はタントラ。そして？隣にいる二人？は、」

タントラがゆらりと腕を上げると、どこからともなく光の塊が黄金色の輝きを振りまきながら舞い降りてきた。

それらはタントラの左右で停止すると、徐々に形を成していく。見覚えのある姿だ。アーム・ストロングに似たディク、長い両腕を膝頭までだらりと垂らした巨人。

黄金色の光を全身にまとった彼らの姿はおよそこの世のものではない。まるで立体映写機が見せるホログラムのように身体が透けて見える。

「大きいのはディゴン、丸っこいのはギーギガス……。ふふ、リュ

ウさん、よくぞ私の大切な仲間を倒してくれました」

タントラは両腕を広げて天井を仰ぐ。「さあ、私と一つになりましょうねい……」

彼が？大切な仲間？といった者たちの姿が再び光の塊に戻り、ぐるぐると渦を巻きながらタントラの口のなかへと入り込んでいく。

リュウたちはただ啞然とするほかなかった。これが死者の魂を肉体に取り込んで力を得る亡魂術、すなわちれっきとした魔術の一つだと説明されたとしても、にわかには信じがたい光景だった。

二つの魂を吸収し終えたタントラの身体は神秘的な輝きを帯び始めた。内側から発せられる強い光のおかげで、すり鉢状の口、ネジが突き刺さった頭部がより鮮明に見える。

魂が放つ聖なる輝きに照らされたところで、彼の醜さ不気味さが払われることはなかった。

「ふふ、ふ……ありがとう、リュウさん。彼らを倒してくれて……これでまた一つ、私は強くなることが出来ました……」

タントラは小指から人差し指まで順に折り畳んで手招きする。戦いを、いや彼にとっては？パーティー？を始めようというらしい。

「リュウ、こんな肝心なときに申し訳ないんだが……」

リンが罰の悪そうにかぶりを振った。「弾切れだ。今回は役に立てそうにない」

「大丈夫。おれ一人で充分だ。ニーナを頼んだよ」

言って、リュウは剣を構えて前に出る。タントラを鋭くにらみつける。

そんな彼の闘気を受け流すような、くねくねとして憎らしい動きをタントラはやめない。

「それじゃあ、始めましょうねい……！」

消えた。タントラが立っていた場所は暗闇になっている。

「リュウ、後ろだ！」

リンの言葉に反応し、リュウはとっさに身体を反転させる。

剣を構えたところに刃が飛んできた。速い。先刻手合わせした時

とは段違いだ。

タントラは更に攻撃を繰り出す。リュウは反射神経だけでそれらを凌いだ。相手のどの手が、どの足が何をしているかまでは判別できない。

放った拳の一つが腹を捉え、リュウは大きく後ずさった。ぐつと足を踏ん張り、リュウは剣を掲げて突進をかけた。このまま黙ってなどいるものか。

逆袈裟に勢いよく振り上げた剣はことごとくかわされたが、リュウは続いて剣を地面に向かって突き刺す。紫音絶命剣。

「食らえっ！」

上空に逃れた敵を雷の刃が追う。タントラは腹をねじらせ、手を引き、足を回し、見るも鮮やかに身体を躍動させて全弾回避した。

そして身軽く地面に着地。リュウは愕然とした。

「今のはデイゴンの全身を斬り刻んだ技ですよ……彼の魂が死に際の記憶を見せてくれるんですよ……これは痛かっただろうなア

……」

タントラはダガー・ナイフを逆さ持ちにした両手を幅いっぱいに広げる。「おお、デイゴン。この恨みを今すぐ晴らしてあげますからねい！」

またしてもタントラの姿が空白に消える。リュウは防御の構えを取る暇もなかった。顔を、みぞおちを殴られ、瞬く間に全身を切りつけられた。

一撃で殺しに来ないのは、これが細切れにされて死んだ仲間への手向けのつもりなのだろう。彼と同じように、タントラはリュウをじわじわと肉片に変えていくつもりだ。

リュウの瞳に真つ赤な炎が灯る。千切れ飛ぶジャケットの繊維、敵の息遣いまでも捉えるようになった目を使い、彼はタントラの攻撃を受け止めた。

すかさずリュウは剣を薙ぐ。が、タントラは上体を大きく仰け反らせてブリッジの態勢を取り、そのまま強烈なサマーソルト・キ

ツクをリュウの顎先に浴びせた。

直後の攻撃をリュウはしのいだが、相手の動きを止めるには至らない。わき腹に蹴り、更に顔面に後ろ回し蹴りをもろに浴びてリュウは吹き飛んだ。

強い。リュウは上体を起こしながら、改めてそう感じた。だが勝てない相手ではない。これまでだって、いくら追い詰められてもその都度窮地を覆して勝利を収めてきたのだ。

リュウは立ち上がる、その足元から真紅のオーラを沸き立たせて真正面に相手を見据える、剣を握る手に力をこめる。そうだ、絶対に勝ってやる

「ふふ、ふ……？ フォルカッション？」

ゆらりと広げた掌から、紫がかった霧がふつと放たれた。それは今にも全力疾走を始めようとしたリュウの身体を通り抜けて、ブーメランのようにひらりと旋回してタントラの下へと戻った。

がくり、とリュウは膝から崩れ落ちる。真紅のオーラは消失し、リュウの意識はひどく混濁している。これは例の巨人、ディゴンと戦ったときにも起こった現象だ。

「その力はあまりにも危険すぎるんでねえ……？ 没収？ させていたきましたよ、リュウさん」

言葉半ばに、タントラは右腕に力瘤を作ってみせる。「おお、これは凄まじい力だ……ありがたく使わせていただきますよ……」

リュウの力を？ 吸収？ した。タントラの口ぶりはつまりそれを示している。リュウはうまく力が入らない足に鞭を入れ、よろよろと立ち上がった。こうするだけで精いっぱいだ。

「さてさて、パーティーも大詰めですかねえ……」

タントラは再びリュウに向けて掌を広げた。「行きますよ、リュウさん」

リュウの周囲にいくつもの黒い球が生じる。ブンパだ。リュウは懸命に逃げようとするが、かつての機敏さを見る影もない。

黒い球は次々と肥大化して爆発、どろりとした液体が雨となって

降り注いだ。黒い雨が晴れたあと、リュウは床に平伏しながらもまだ生きていた。

紫音剣を支えに、彼は長い時間をかけていよいよ立ち上がった。ニーナが思わず目を覆ってしまうほど、その姿は胸が痛むほどの悲壮さで満ちている。

「さすがにしぶといですねえ……ですが、これで終わり」

タントラがゆっくりと両腕を広げていくと、リュウの身体を幾筋もの白い光条が取り巻いた。

それらは操り糸で操作されているかのように、矛先をリュウに向けたままピンと虚空で静止している。

「？ハンドレドギアス？……」

タントラがふっと手を下ろす。まるで処刑の合図のように。

白い光条はリュウの肩、胸、腹、足、手、首、全身くまなく突き刺さり、拳句の果てには爆発を起こした。

リュウは脳天を銃弾で撃ち抜かれたように力なくその場に倒れ込む。この意識が、時間が凍えていく感覚は何だろう。そうだ、？死？だ。

「さて、お次はこちらですか……」

踵を返し、タントラはニーナとリンに足を向けた。

リンはニーナの前に立って彼女をかばう。ここでどんなに抵抗したところで、それは全てが報われることのない悪あがきに終わる。

それを本能的に察してか、ニーナが魔法を放つことはなかった。

ただリンの後ろに隠れてびくびくと肩を震わせている。

「まったく、ひどいじゃないですか……人の口に爆弾を突っ込んで頭を吹き飛ばすなんてねい……人間のすることじゃあないですよ」

「何が人間だよ、薄汚い化け物どもめ」

「おやおや、威勢が良いですねい……あなたたちにも同じ苦しみを受けていただきますよ。パァーン。脳みそが吹き飛ぶ苦しみをねい！」

タントラの指がくいつと動くのに合わせて、白い光条がリンたち

を取り囲む。ハンドレドアギアス。

ニーナは暗がり倒れるリュウを見て泣き叫び、今にも駆け出そうとしていた。リンはそれを腕で制し、諭すように語りかける。

「大丈夫だ。リュウは生きてる。信じる、ニーナ」

再び、彼女は自分に言い聞かせるように呟いた。「信じる」

終わりが、命の終わりが近づいてきている。リュウに、そして彼が大事に想う二人に。

深い闇へと溶け込んでいく意識のなかで、リュウは必死の叫びを続けていた。ここで息絶えるわけにはいかない、ニーナを空に連れて行くのだ。そう約束した。

礫にされた両翼、朽ちた半身、白骨と化したかつての威容。リュウはあの場所でドラゴンを見上げていた。この心が、身体がどうなっても構わない。頼む。

？力を貸してくれ、アジーン？

身を焼き尽くすような炎がほとばしり、リュウの肉体は異様な変化を遂げる。

逆立った銀髪、血溜まりのような双眸、鋭利な爪、炎のゆらめきが具現化したような緋色の体毛。

竜人。彼はいま一度降臨する。何かを破壊するために。

「これが、噂の、ですか……」

竜人の瞳がタントラを捉える。鮮紅色の粒子が彼の背中で燃え爆ぜた。

「え……？」

突風を感じたと思いきや、竜人の姿が眼前にある。

その右手の爪からは赤い雫が滴り落ち、そしてタントラは気付いた。自分の右腕がないことに。

「い……痛いじゃないですか……え、やめ……」

勢いよく金切り声をあげようとした矢先、タントラは突然に黙り

込んだ。唇が？抉り取られて？しまっている。

竜人は今しがた抉り取った獲物を右手で潰し、今度はもう片方の手を振るった。次々に。間断なく。血しぶきが、肉片が、不気味な液体音を立てて虚空に舞った。

今やタントラに意識はない。腕をなくし、足をなくし、おびただし量の血をうしなつていく過程で、彼はとづくに事切れていた。竜人はタントラの頭を片手でわし掴み、その達磨と化した胴体を宙に吊り上げた。

ぶちっ。それが、彼の脳みそが弾け飛ぶ音だった。あとには得体の知れない肉の塊と、息が詰まりそうな沈黙だけが場に残された。竜人はちらと二人を見やる。恐れ慄き、今にも吐き出しそうな二ノの表情。それがまぶたに焼きついたところで、彼の意識はぶつつりと切れた。

* * *

自動ドアが小気味よく開かれる。研究室に入ってきたのはボツシユ。

その胸元にはつい今しがた斬り裂いて来た少年の返り血がかすかに点々としているが、研究者がそれに気付く様子はない。

ぶくぶく、ぶくぶくと、彼の傍らにある培養装置が音を立てる。

緑光色の液に漬かっているのは、人間ともデイクとも違う、禍々しい黒さを帯びた何者かの？腕？だった。

「結論から言つて無理ですね。D検体とのリンクは……」
オールド・タイプ

研究者は培養装置を目で指しながら、あまり気乗りしないといった風に言った。

その頬はこぶが出来たように腫れている。先刻、あのリュウという少年に殴られた傷はまだ癒えていない。

「何故そう言いきれるんだ？」

「成功の保障が出来ないんですよ。記録にあるだけで三例ですが……」

…うち二例は、リンクの初期の段階で暴走……」

くいつと、男は眼鏡のテンブルを持ち上げた。「最もD値の高い適格者だった最初のリンク例でも……制御しきれず、強制終了した、と聞いています……」

ボツシュはおもむろに培養装置を見やった。リュウに一度は完膚なきまでに敗北を喫し、二度目は戦うことも能わず逃げ出した。

だが、それはリュウがドラゴンの力を手に入れたからで、リュウ自身の強さではない。

ボツシュは不敵な笑みを浮かべる。

「そうだよ、リュウ……お前が？バケモノ？なら」

培養液に浸っていた腕の指先が、ぶくぶくと湧き上がる泡に押されてピクリと動いた。まるで彼を手招きするように。

「俺もバケモノになってやるまでだ」

(?) トリニティ・ピット・前篇・

霧がかった視界に、薄ぼんやりと誰かの顔が浮かぶ。それは大きな眼をきよきよらせて心配げにこちらを覗きこんでいる。

「ニーナ、だ。リュウは破砕鎚で殴られたような頭痛をこらえつつ、ゆっくりと上体を起こした。」

「うー！ うー！」

「もう大丈夫だよ、ニーナ……。ところで、ここは？」

リュウは辺りを見渡す。目の前には太い円柱が天井を支え、床は黄と土色のモザイクタイル、工業区とは違った景色だ。

やがて曲がり角からリンがやってきた。ブレットや水壘を載せたトレーを持っている。

「やつとお目覚めかい」いささか呆れたような口調ではあったが、ほんのりと安堵の響きが含まれている。

リンは床にトレーを置くと、二人に食料を渡し始めた。

「おれ、またおかしくなつてたんだな……」

「そのおかげで私たちは助かったけど。ま、結果オーライさ」

「ここがトリニティのアジトなのか？」

「いや、アジトまではもうしばらく歩くことになる。ここは商業解放区……言っなりや闇市さ。政府の配給品だけじゃ暮らしていけないから、こういう場所があるってわけだ」

リンは大きく口を開けてブレットに噛り付く。それに遅れて、リュウとニーナもぼそぼそとブレットを食べ始めた。ほとんど毎日のように食べていた物なのに、この易々とは噛み切れないブレットの弾力が懐かしく思えた。

「あんな戦いのあとだ、しばらく休んでいこう。ここで装備を揃えるのもいいかもな」

リンは最後の一切れを口に放り込むと、それをもぐもぐと咀嚼しながらポーチのなかからしわくちゃになった紙幣の束を取り出した。

「ほら、これでそのボロボロになったジャケットをどうにかしてきな」

「ありがとう……って、これ前におれが渡したお金じゃなかった？」
リンは悪戯っぽく微笑んだ。「私はここで少し寝させてもらうよ。用が済んだら起こしてくれ」

組んだ両手を枕にし、彼女は壁に背もたれるようにして楽な姿勢を取る。寝るとは言ったものの、本当にここでグース力するつもりはない。

三人のいる場所は商業解放区の出入り口に当たる円形の小さな広場。目の前の円柱越しに、工業区と繋がる長い連絡通路が見える。いつ追っ手が来ても分かるように、リンはここで見張りを立てることにしたのだ。

一方、リユウはニーナの手を取って露店が並ぶアーケードを歩き始めていた。例の再生能力のおかげで身体は何ともないが、衣服まではそうもいかない。これまでの戦いの遍歴が全身くまなく傷となつて刻まれている。

市場というからにはもつと賑々しい雰囲気想像していたが、人の流れはまばらで、露店の数も思っていたよりはずっと少ない。どれもシャッターで閉じきられているものの、アーケードの両隣は商店がずつと先まで軒を連ねている。

この一帯がかつて商業区であった名残だろう。中層区の水没により人が離れ、長らく放置されている間にローディたちがこっそりと市場を開いたというわけだ。

ガスマスクですっぽり顔を覆った作業員とすれ違い、また天井から漏れる水滴を避けて歩いていると、リユウは見覚えのある顔を見つけた。赤いぽんぽんのついた縞々の帽子、真っ白なＴシャツ。

クリオだ。見た目に地味な格好をしている者が多数を占めるなかで、彼女の身なりは異彩を放っている。しかし下層区街の食堂で看板娘を務めている彼女が、どうしてこんな場所で露店を開いているのだろう。

「ん……？ なんや、兄ちゃんどつかで見た顔やな」

「リュウだよ。ほら、ボツシュとよく食堂に来てた……」

彼女は壁のくぼみにテーブルとパイプ椅子を置く形で店を構え、スペースいっぱいには古着やらズボンやらジャケットやらの衣類を取り揃えている。

目まぐるしいほどに色彩豊かな布に囲まれ、リュウはこの二坪にも満たない場所が現実から浮いた異空間のように思えた。

「ああ！ あのクソエリートの腰巾着さんか！」

クリオはぽんつと掌を打って目を丸くする。だが「さん」付けされたところで腰巾着と言われてうれしいわけがなく、リュウは反応に困った。

「下層区街は大変だったんやで！ 毒ガスが回って人がばったばった倒れるわ、ほんつとにトリニティはしょーもないことしてくれる！」

「え？ トリニティがやったことになってるのか？」

「違うんか？ まあ、誰でもええわ。それで何買ってくれるんや。

うちみたいな商売人あきんどが気にするんは治安とか平和とかじゃなくて？
どれだけ儲かるか？ やからな！」

「はっはっは！」と彼女は大っぴらに笑い始める。リュウはニーナと顔を見合わせたあと、「じゃあ……」とテーブルや壁に並べられた商品を見ていった。

「ジャケットが欲しい。出来ればこれと同じやつが良いんだけど」

「おお、レンジャースーツやな！ あるであるで。レンジャーさんはうちの得意先やからな、そういうのは抜かりないんや」

威勢の良い声を発しながら、クリオはハンガーでぎっしりと並べたジャケットの列を慣れた手つきで漁り始める。

「ところで、君は食堂で働いてたんじゃなかったっけ？ どうやってここまで来たんだ？」

「？ 想像力？ を使って」

「想像力？」

「はっはっは、冗談やって。先祖が作った？秘密の抜け道？を使ってここまで来た。うちの一族は代々商売人で、下層区から上層区まで手広くやってるんや。」

食堂で働いてたんは単に知り合いの手伝いをしただけで、こっちが本業。それで、ほい。赤から緑から黄色から青から好きなのを選びっ！」

目の前にざつと並べられたレンジャースーツから、リュウは迷うことなく赤色を選んだ。下級レンジャー向けに大量生産された衣服であるため、今着ているものとまったく同じデザインだ。

更にクリオはそれとセットのズボンを出してくれた。「？豊富な品揃え料？込みやで！」ということで全財産が吹き飛ぶことになったが、思いがけず衣服が一式揃ったので悪くはない買い物だろう。

心残りなのは、またしてもニーナに靴を買ってやれなかったことだ。そのことでクリオに申し出てはみたが、生憎とレンジャー相手に商売をしているため子供用の服などは置いていないらしい。

また市場にある他の店でも子供服を扱ったところはないとのことだ。リュウたちの残念そうな顔を見て、商売人の血が騒いだのか、クリオは「今度会ったときはちゃんと用意しといたる！」と息巻いた。

「さすがにもう会うことはないだろ」

帰りの道で、リュウは購入した品を胸いっぱい抱えながら苦笑混じりに言った。ニーナはにっこりと笑顔を浮かべ、「そうだよね？」と語りかけるように左腕に抱えたぬいぐるみをぎゅっとしてみせた。

リュウの心にすうつと清らかな風が吹き抜ける。こんな安らいだ気持ちになったのはしばらくぶりだった。

「もう用は済んだのかい」

リンは銃の手入れをしているところだった。専用の工具を使って銃を解体し、火薬で汚れきった内部を綿で拭き取っている。

それが終わると今度は足元にばらばらと置かれた弾丸をカートリ

ツジに詰めていく。この闇市ではこういった物騒なものまで扱っているらしかった。

リュウは「着替えてくる」と言っでどこか人目のない場所を探しに行き、ニーナはその場に残った。

「こら、危ないから触るんじゃないよ」

「うー？」リンはニーナの手からさつと弾丸を取り上げ、弾薬入れ（バレット・ケース）に仕舞い込んだ。

銃底にカートリッジを入れ、指先でくるっと一回転させたのち、リンは銃が解体する前と同じ状態かどうか試すためあちこち銃口を向けてみせた。

銃の先端につけられた凸型の照星越しにニーナの顔がでかかと浮かぶ。リンは慌てて手を引っ込めようとしたが、やにわにリュウの怒鳴り声が響いた。

「リン、何やってるんだ！」

まさに今、リンはニーナの鼻先に銃口を突きつけている状況。当然これはニーナの好奇心がもたらした誤解だが、リンは呆れたように肩をすくめた。

「参ったね。あんたの過保護ぶりには……」

リュウの誤解を解くにはしばらくの時間を要した。

* * *

一行はアーケードを抜けて、階段を使い水没被害の最も深刻な区域へとやってきた。

数年前に起きた地下ダムの決壊事故が原因だ。何万トンという水量が一拳に中層区へと流れ込み、ビルも家屋も何もかもなぎ倒して賑わいあった街を廃墟にしまった。

近年の復旧作業によって水はかなり引いたものの、一行の前に広がる光景は見るも無残だ。

激流にめくれあがった地面が、ビルの一構成物であった鉄柱が、

コンクリートが、みなぐしやぐしやの瓦礫となつて横たわり積み重なり、かつての街の喧騒も、人々の生活の跡も、全てが冷たい水の下に沈んでしまっている。

かろうじて水に没してない場所がリュウたちの足場だ。照明はそこにしか設置されていないので、光の届かないほとんどの場所は暗闇に閉ざされている。寂しいところだ、とリュウは思った。

「そこから先が、トリニティのエリアだよ」

リンは正面にある地下通路への出入り口を指差した。その場所までは水面から顔を出す瓦礫の連なりが橋代わりとなっている。

リュウが何気なく石段に足をかけようとすると、後ろから小さな悲鳴が聞こえた。反射的に二ノナかと思ったが、声の主はリンだった。

「リン？ どうした!？」

「な……何が、私の……っ!」

リンは汚らわしい物でも払うかのような慌しさで、辺りをきよろきよろと見回した。

「私の……何？」

「いや、なんでもない……」

リンは自分たちが上ってきた階段の向こうをじつと見つめるものの、そこは暗いばかりでハオチー一匹の気配もない。

ただ、風のいたずらにしてはあまりにも生々しい？ 感触？ があつた。そもそもここにはそよ風一つ吹いていない。リンは首を傾げながらも、先に地下通路へと入っていった二人の後に続いた。

そして一行の姿が消えてからしばらく。硬いブーツの音をこたまさせながら、一人の男が階段を上ってきた。

「なるほど、聖女様のに比べると少しばかりハリが足りないが……」
針山のように逆立った赤い髪、正気なのかふざけているのか掴みどころのない態度。ジェズイットだ。

「ま、悪かない？ 尻？ だ」

(?) トリニティ・ピット - 後篇 -

寒々とした静寂が広がる。どこからともなく水滴が床に弾ける音がこだましている。

ここは中層区で最も栄えていたショッピングモールだ。闇市があった場所と似た造りのアーケードが、一行の前にすうつと伸びている。言うまでもなく人の姿はない。あるのはネイビー色フットライトの脚光に照らされた空白と、剥落した天井の破片が織り成す瓦礫のモザイクばかりだ。

リンを先頭に一行はかつて小売店であつたと思しき店舗に入り、レジカウンターのなかにある裏口から物資搬入路へと進んだ。横幅二人分の狭い通路。

そこではかすかな足音さえも敏感に響き渡り、所々水没しているため一行はその都度膝から下をずぶ濡れにさせなくてはいけなかった。一つ梯子を昇り、一つ水面に建立された仮設橋梁を渡り、幾度となく右へ曲がり左へ曲がりを繰り返す。

ここはさながら迷宮だ。リュウは赤と白のスプレーで壁にペイントされたトリニティのロゴを何度か見かけた。それは決まって道の分岐点にあり、組織のメンバーにアジトの方向を指すサインとして機能していた。

「大丈夫かい？ ニーナ」

つと立ち止まってリンが後ろに呼びかける。ニーナは必要以上に大きく頷いてみせたが、その額には玉のような汗が浮かんでいた。羽もぐつたりとしおれて力ない。

だがリュウがおんぶしてやろうとすると、彼女はかぶりを振って早足に二人を抜き去った。彼らの足手まといにだけはなりたくないのだ。しかし勢いよく駆け出したはいいが、ニーナは当然アジトの在り処を知らない。

すぐに袋小路へと迷い込んでしまつて立ち往生。困り果てた彼女

の肩をぽんと叩き、リンが励ますように言った。「もうひと踏ん張りだ、ニーナ」

いよいよ目にするのも苦痛になってきた迷宮の景色を更にまた十分近く、ゆるやかに下り坂となっているスロープを、梯子を、一直線に伸びる通路を進み、一行は固く閉ざされた大きな鉄のシャッターを前にする。

「到着だ」

重たい肩の荷を下ろすようにリンが言うと、他の二人の顔に小さな歓喜が踊った。デイクと鉢合わせにならなかっただけ幸運だが、やれやれ、テロ組織の秘密基地へ来るのも楽じゃない。

リンは脇に設置されたシャッターの開閉ボタンを押した。シャッターはガタガタといまにも壊れそうな音を立て、三人はそれが完全に上がり切る前になかへと入った。

「ここがトリニティのアジト……？ 誰もいないみたいだけど」

「おおっぴらには歩けない身分だからね、ネズミのように息を殺してんのさ」

リュウはきよきよと辺りを見回しながら先を進む。

この場所もショッピングモールにあるアーケードの一つだ。窓にブラインドが降りた店舗の残骸がひしめくように連なっている。

「お、おい、リュウ！」つとリンの大声が聞こえる。何やらただならぬ気配だ。

驚いて振り返ってみるに、ニーナが力なく床に横たわっている。

「ニーナ！？」

リュウは半ば反射的に飛び出し、ぐったりと頂垂れるニーナの顔を抱きかかえた。息は溺れかけのように不規則で荒く、口元からうめき声が漏れている。

突然の出来事にリュウは何をすれば良いか分からず、ただただ彼女を強く抱きしめるほかなかった。その間にも、リンはアジトじゅうに聞こえる声で助けを求めている。

* * *

ピッピッピ……。歩くような速さの間隔で、心電図がニーナの命の鼓動を伝えている。

彼女は分厚いビニールに覆われたベッドの上で、口には呼吸器を、腕には点滴を繋がられている。

その胸が小さく膨らむたびに、リュウは悲劇の予感めいた不吉さを感じていた。いまにも彼女の呼吸が止まってしまうのではないか。だが架空の悲劇に怯えたところで自分が彼女の代わりになってやることは出来ない。

ニーナの枕元に寄り添うように置かれたぬいぐるみもどうやら彼と同じ心境らしかった。

「命に別状はないそうだ……」

腹の上に鉛玉が乗っているような重苦しい沈黙のなか、リンが儼かに口を開く。だがそれでリュウの険しい表情が和らぐ気配はなかった。

「さっきまであんなに元気そうだったのに……」

「この子なりに無理をしてたんだろう。それに、あの研究主任が言ってた」

辛い思い出を語るように、彼女は二の句を継ぐ。「ニーナはあまり先が長くないと……」

再び息の詰まりそうな沈黙の緞帳じゅんちやうが降りた。リンは努めて冷静さを装うように両腕を組んで壁に背もたれ、リュウはただニーナを見つめて立ち尽くしていた。

「ところで、リュウ。私たちのボスがあんたに話があるそうだ」

「おれに何の話が……？」

「さあね。ニーナには私がついてる。あんたはボスのところへ行っ
てきな」

リンはおもむろに窓の向こうにある通りを指差す。しばしためらいはしたものの、リュウはやがて部屋を出ていった。トリニティの

アジトに医療設備があるとは予め聞かされていたが、ここまで手厚くニーナを保護してもらった恩義がある。テロ組織を束ねるリーダーがたかだか十六の少年、それもいまや政府に追われる身となった元レンジャーに何の話があるのか疑問だが、礼の一つは言っておくべきだろう。

廃屋のなかにトリニティのメンバー数人の姿が見える。壁や扉といった仕切りが一切ないので、その様子は外からでもありありと分かる。

部屋には極端に細長い楕円形のテーブル、畳むのに一苦労しそうな壊れかけのパイプ椅子、ブラウン管テレビ、ホワイトボードがあり、ほか卓上に置かれた図面などを見るにこの場所はトリニティの作戦会議室になっているようだ。

ニーナこそ親切に迎えてくれた彼らではあるが、リュウに対しては親しみを込めた会釈なり挨拶なりをすることはない。ただ冷たく頑なな眼差しで彼を睨み、ボスの居場所はどこかと尋ねれば仏頂面を崩すことなく身振りだけで案内する。

そうして行き着いたのは会議室の奥にあった手押しの扉。ノックをすると低い声で返事があった。

「入りましたえ」

部屋に入ると、スチール製の執務机を挟んで白色のツナギを着た男が静かに立っていた。その横にも一人、部屋の隅でひっそりと猫背の男が佇んでいる。

彼は窓際に置かれたトランジスタラジオのスイッチに手を伸ばした。先ほどからどこからともなく聞こえていたノイズの正体はこれだった。ニュース番組の途中だったらしく、『政府に反抗していた大魔導師の一人が処刑、』のところで音声が止まった。

男は横目でそれを確認すると、また視線をリュウに戻す。

「リュウ君、だな。話は聞いている。私は……、いやもう知っているかな、レンジャー君」

褐色の肌、傷なのか皺なのか判別しかねる目元の線。表情は硬く、

緊張感に満ち、リュウにはこの男が笑うところなどまったく想像がつかなかった。

「ああ、知ってる。メベトⅡ1/4、反政府組織のリーダー、おたずね者だ」

「そう、だがその点はいまや君も同じ……追われる身だろう？」

つとメベトは口ぶりを変える。「いや、君を責めるつもりはない。君がよく戦ってくれたおかげで、我々はニーナを保護することが出来た……」

手を後ろに組んだまま、彼はじれったいほど緩慢な言葉の律動に合わせてリュウに歩み寄る。そして一体何の意図があるのか、ポンと彼の肩に手を置いた。

「知つての通り、あの子は汚れた空気の中では生きてはいけませんが……ここなら薬もある。もう大丈夫だ」

「何が言いたいんだ？ 外へ、空へ連れて行けば、ニーナは助かるんじゃないのか……？」

「空が本当にあるのなら……の話だ」

それに、と続けて彼はリュウに背を向ける。

「もう彼女を連れまわす必要はない。ここにはちゃんとした医療設備があるし、第一あるかどうか分からないものに彼女の命を賭けるのは危険だとは思わないのかね。」

よく考えてみることで、リュウ君……。君が我々の同志となって、共にニーナを守りたいと言うならば、我々はもちろん歓迎するよ」

こういうことだったのか、とリュウは内心毒づく。つまりニーナの命を保障してやる代わりに、自分たちの仲間になれと言っているのだ。

リュウはいささか失望した気持ちになる。元からトリニティのリーダーに希望を抱いていたわけではないが、大人というのはいつだって腹に一物抱えているのだ。それは？ 反政府？ という一見たいそうな正義を掲げた人間も変わらない。

結局何の返事もしないまま、リュウはさっさと部屋を後にした。

ひどく憤慨した足取りで治療室へと向かうリュウの姿を、あの猫背の男が下品と言えそうなくらいやぼったい目つきでブラインド越しにうかがっていた。

「どうして彼を我々の仲間に……？ 元レンジャー、政府の人間ですよ？」

「いささか好奇心を捨て切れなくてね。竜ドラゴンとリンクした少年、？ 適格者？ か……」

メベトは治療室に消えていくリュウの背中を見つめながら、静かに呟いた。

(???) 空の欠片 - 前篇 -

リュウとリンはアジトを出て、商業区へと向かっていた。思い出すにも胸糞悪くなるようなメベトとの面談のち、リュウが治療室へ戻ってみるとニーナの容態が悪化していた。

元から色素の薄い彼女の肌がいつそう青みがかり、唇と爪には毒々しいほどの紫がうずまき、痛苦の息を切らせながら両手で心臓付近を押さえている。まるで体内に巢食う魔物と戦っているかのよう
に、彼女は汗という汗を浮かべて身悶えていた。

彼女の看護に当たった男の言葉では『ウーロサイオン』という薬剤があれば症状も幾分緩和されるとのことだが、生憎と予備を切らせてしまっている。医療設備はあるのに薬はないとはいかにも笑い話だが、リュウとリンは商業区に降りて薬の探索をすることにした。

商業区へはアジトへ来るのに使った搬入路、すなわち複雑怪奇に入り組んだ迷宮を引き返さなければならない。行きにも膝から下を濡らした水溜りに再度足を浸し、梯子を下り、ぐしゃぐしゃに水気を含んだブーツからは歩くたびに気の抜けた音が出た。

悪戯心を起こしたニーナに水を引つ掛けられたり、小石を踏んづけてしまわないよう彼女をおんぶしてやったことが妙に懐かしく感じられる。つい一時間前のことだ。彼女は自分で？き揚げた水しぶきのなかできらきらと笑っていて、病魔に侵されているふうには見えなかった。むしろ安心していて、初めて逢った時よりも元気そうにしていたから。だがその笑顔が自分たちを心配させまいとして無理に作られたものだと思いたいま、リュウは罪悪感に駆られるまま鬼気迫る表情で足を動かしている。

「無闇やたらに進むもんじゃないよ。道はこっちだ」

彼の焦りを悟ったのか、リンは諭すような声音で彼を呼び止めた。

「これから行くところには本当に薬があるのか？」

「商業区にはいくつも薬局やメディカルセンターがある……。他の

食料やら何やらだつて、私たち（トリニティ）はいつも商業区から調達してるんだ」

だから落ち着け、薬は逃げやしない。リンは最後にそう付け足したが、リュウの足取りは勢いを増すばかりだった。

「随分と熱心だね。そんなにあの子が大事かい」

「リンは大事じゃないっていうのか？」

「そういう意味で言つたわけじゃない。ただ……」

彼女の声が心持ち気弱になったのを察し、リュウはびたりと立ち止まった。

「不思議でならないんだ。あんたはここまで来るのに大勢のレンジヤーを倒してきた。

そのなかには友人だつて、大切な人だつていたはずなのに……どうしてあんたは突き進んでいけるんだ？」

「リンは……おれが間違つたことをしているように見えるの？」

「リュウ自身はどう感じているんだ」

これがいつもの冗談や軽口でないことはすぐに分かった。

キツとこちらを見据える彼女の瞳には、ある種思いつめたような光が宿っている。

「自分のやってきたこと、やろうとすることに確信なんてない。いつもそうだったし、いまも同じだ。

だけど……」ふっと、リュウは腰に携えた紫音剣の柄に手を伸ばした。

「引き返すことはもう出来ないんだ」

彼の真摯な言葉を受け取り、リンは納得したというよりは、何やらもう観念したという顔つきになった。

やがて歩き出した二人は水没地帯に伸びた仮設橋梁に差し掛かる。壁の最下部に設置された脚光は水に没しながらも点灯しており、その光は澄んだ水面のゆらめきに屈折しながら、反射しながら、ぼやけながら、二人の行く場所を青く静かな輝きで満たしている。

「ずっと訊きたかつただけ……」振り返ることなく、リュウは

おもむろに口を開いた。

「リンはどうしてトリニティに入ったの？」

途端、リンが後ろで苦笑いしたのが分かった。

「生意気なガキだね。いっぱいしの女に過去を尋ねるもんじゃないよ」

「ご、ごめん……話したくないなら、別にいいんだ」

冗談で言ったつもりが真に受けられてしまい、リンはいささか面食らったように目を白黒させた。

そして短いため息を一つ、彼女はふと立ち止まって水面を見やる。そこではほの青白い光の焰ヒラが音もなくゆらめいていた。

「私の昔話なんてつまらないから、代わりに馬鹿なレンジャーの話をしてやるよ」

「レンジャー……？」リンは最後まで聞けと言うように、リュウの質問に構わず続けた。

「馬鹿である以外に、？そいつ？に特別なものは何もない。両親とはD値の違いで引き裂かれ、物心ついたときにはもうレンジャーとして育てられていた。

だが別に寂しさを感じたり両親を恋しく思ったことは一度もない。そいつには大勢の仲間がいた。みな似たような境遇で、互いに手を取り合って生きていた。

グループの中には一人の男がいて、そいつはみんなのまとめ役だった。冗談が面白くて、優しくて、みんなそいつを慕っていた」ぼんやりと天井を仰ぎながら、彼女は続ける。

「そいつは男と仲が良かった。毎日色んな話をした。今日の任務は突っ立つてばかりで退屈だったとか、あの上官は実力もないくせに口うるさいとか……どれも生きていく上で特にする必要のない話ばかりさ。

だけど、そいつは男と話するのが何よりの楽しみだった。何せみんなの人気者だからね、一人占め出来る時間はごく限られてるんだ。だから男に食事を作ってやったり、編み物をプレゼントしてやったり、馬鹿だね。

そいつが色々頑張らなくても、男には自分を世話してくれるやつが他にいくらでもいたのに。でもそいつはそれで幸せだったんだ」

不意に彼女が黙り込む。垂らした右腕をもう片方の手で包むように押さえて、足元に視線を落とすその横顔は冷たい影に覆われていた。

「ある日、そいつはいつもみたいに男と話すのを楽しみにしていた。だけど、部屋に行っても、仲間がよく集まる広場に行っても、男の姿がない……」。

そいつは男を探して街じゅうを走り回った。別に男の命が危機に晒されているわけでもないのに、ただ姿が見えないというだけで大きな不安に駆られてたんだ。

で、やっとの思いで男を見つけた。下層区のリフトポートでね。そこで男は……小さな子供をバイオ公社の連中に引き渡してたんだ。分厚い札束と引き換えに。

あんたも聞いたことがあるだろ、研究の実験材料として使うためにバイオ公社が子供をかつさらうって噂。それは本当だったし、男は誘拐の実行犯だったってわけさ。そいつはリフトポートを去っていった男を捕まえて問い詰めた。

すると『俺はいつもこれで金を稼いでた』だの『おまえからもらった手袋は博打で負けてもうない』だの白状し始めた。四、五発ぶん殴ったあとだったから情けないぐらいに泣きわめきながらね。いつもの優しい面影なんて微塵もなかった。

結局のところ、男は外面が良いだけのどうしようもない奴だったってことさ。で、信頼しきっていたほかの仲間も男とつるんで色々悪いことしてるのが分かって、そいつはもう何を信じたらいいのか分からなくなった。

そしてある日、トリニティの存在を知ったそいつはレンジャー基地から機密文書を盗んで脱走。笑っちゃうね。あれだけ裏で悪さをしていた男とその仲間たちが、正義漢ヅラしてそいつを捕まえに来たんだ。

追っ手を巻くためにある時は戦ったり、最下層区の薄汚い廃棄処理施設に身を隠したり、色々必死きながら、そいつはトリニティのアジトにたどり着いた……。どうだい、中々笑える話だっただろ？」

リンはくすつと微笑む。寂しい笑顔だ、とリュウは思った。

「いま、その人はどうしてるの？」

「トリニティの一員として立派にやってるよ。レンジャーが乗った高速リフトにミサイルを撃ちこんだり、陰でこそターゲットの情報をボスに伝えたりしながらね。」

そうやって反政府活動に没頭していれば、嫌な思い出もきれいさっぱり忘れられるかと思ってたけど……。そいつは気付いた。レンジャー基地であれだけこき使われてたのに、自由を求めて入った組織でまた同じようにこき使われてる。

何も変わってない。自分の意思で生きてない。もううんざりだ、とか言ってたっけな……」

さつと手すりを離れてリンは歩き出した。その毛むくじやらの尻尾が素早くうねって床を叩く。

「なあ、リン」

しばらくして、リュウは彼女の背中に呼びかけた。

「なんだい」

「その人に言っておいてくれないかな……。君は、独りじゃないって」

リンはまた例の、寂しさを紛らわすときに浮かべるような笑みを肩越しに作ってみせたが 今度の笑顔はちゃんとうれしそうだった。

「ああ、機会があつたら伝えておくよ」

* * *

かつてはモール街として絶え間ない喧騒に包まれていた中央商業区も、いまや薄ひんやりとした暗闇が広がる沈黙の街と化している。

天井の照明が所々点いているのはトリニティがこの一帯の店をよく物色するからだ。食料品から衣類、雑貨、医薬品と、ここで揃わないものはない。

それも店主は水害の際に逃げ出したきりだ、棚にきちんと並んでいなかったり埃まみれでいささか不衛生だったりする点を我慢すれば、店の商品は全て無料^{タダ}で持っていける。

目当てのものはある薬局の倉庫で見つけた。リュウは薬剤の入った黄土色の瓶を棚から取り、しばらく思案げにじっと見つめた。瓶の正面には『ウーロサイオン』と薬品名が記されたラベルがでかでかと貼られている。

「それが探してた薬だね。ニーナの身体が弱るのを食い止められるって……」

リュウは静かにかぶりを振る。「でも、完全にニーナを治すことは出来ない……。いや、ニーナを治せるところなんて、この世界にはどこにもないんだ」

「リュウ……」

「初めから分かってる。だから、一刻も早くニーナを空に連れて行かなくちゃ」

リュウは素早く立ち上がる。瓶を無理やり詰め込んだ小さなポシエットはぎゅうぎゅうに膨らんでいた。

剥落した壁の破片、無造作に転がる瓶やダンボールをまたいで行きながらアーケードへ出ようとした折　銃声が響いた。

リュウは右足に激痛を感じて思わず片膝をつく。あまりに突然の事態に思考が一瞬止まったが、これは奇襲以外の何物でもない。

やがて柱の陰からひどくやばった目つきの男が出てきた。リュウに向けた銃口からは白い硝煙が一筋たなびいている。

「でかしたぞ、リン」

先刻メベトと一緒にいた男、ひどく猫背でいかにも品の悪そうな男。それとまったく同じ顔がシーリングライトの薄汚い黄色のなかに浮かんでいる。

更に一人、また一人とトリニティの面々が場に集い始めた。リュウは直覚する。

自分は罠にかけられてしまったのだと。

(???) 空の欠片 - 後篇 -

トリニティとはあらゆる手段を講じて政府転覆を図るテロ組織だ。彼らの存在を知ったとき、リュウは素朴な疑問を抱いた。

仮に政府を潰せたとして、彼らは何をするのか？ D値という忌まわしい制度を廃絶し、世に光をもたらす救世主にもなるつもりなのか。

組織を率いるメベトⅡ 1 / 4 の真意はようとして知れない。だが歴然たる事実として、リュウはたったいま予告なしの銃撃、すなわち奇襲をその右足に受けた。

そして弾丸を放った張本人 リンがゼブルと呼んだ は、いかにも「してやったり」というような顔である。多勢に無勢、卑劣な不意討ち。これが救世主のやることか。

しかしゼブルや彼を取り巻く連中の性根がいくら腐っているがリュウには関係なかった。問題なのは、リン。

もし彼女が初めから自分を罠にかけるつもりでこの場所に連れてきたというのなら、怒りを通り越して奈落にでも突き落とされたような心地になる。

「リン、おまえは本当によくやってくれるよ」
クク、と齒の隙間から下衆っぽい笑いを交えながら、ゼブルが言う。

「おかげで易々と対象を抹殺できそうだ……」

リンが鋭く男をねめつける。「騙していたのか。初めからこうするつもりで、『薬がない』なんて」

「敵を騙すにはまず味方から……。当たり前じゃないか」

「これはリーダーの命令なのか？」

「非人道的な研究の対象にされた二ナを民衆に見せつけられ、いかに飼育慣らされてる犬といえど飼い主（政府）に反感を抱く……。いいかね、彼女は政府の暗部を証明するための大事な道具なのだ。」

それを小僧なんぞに持つていかれるわけにはいかない」

「だからって殺すのか。トリニティも堕ちたもんだね……」リンは悔しそうにかぶりを振りながら独りごちた。

「さあ、そこをどけ。これ以上そいつをかばうつもりなら、」銃口がリンに向けられる。

「裏切り者としておまえも排除する」

リンはしばらく立ち尽くしていた。自分を殺す銃声がいつ轟くか怯えているわけではない、打ちひしがれているのだ。

また仲間だと思っていた人間たちに騙された事実。そして迷ってもいた。このまま組織に従うか、自分に従うか。

「リン」たまゆら思考の海に沈潜していた彼女の肩に、ふとリュウの手が降りる。

「安心したよ。おれ、リンに騙されてたと思ってたから」

こんな状況にあつてはあまりに不釣り合いな微笑み、言葉。呆氣に取られているうちに、リュウは一步前に出て剣を抜いた。

「小僧、どうして立っていられる……？」

「悪いけど、おれは普通じゃないんだ」

今になってようやく自分の手に負える敵でないと気付いたかのように、ゼブルの表情が一気に強張った。

続いてくいつと顎をしゃくって仲間に合図を出す。戦闘態勢。いっつ鮮血が噴き出すか分からない緊迫感が漂う。

「殺せっ！」

怒号が静寂の殻を突き破って開戦を告げる　　が、それは彼らにとって敗北の始まりでもあった。

二人を追い詰める円形の包囲陣。リュウは最も身近にいた一人を斬り倒すや、即座に鮮紅煌く彗星と化して飛び出した。

次々と。加速度的に。紅色の軌跡が弧を描いていく。ものの二分だっただろうか。あれだけ場を荒らしていた銃声や雄叫びはその一切が痛みに悶えるうめき声に変じている。

リュウはさつと剣を一振り、鞘に収めてリンの下へ歩む。まるで

待ち人を迎えにいくような軽い足取りだ。

「大丈夫。誰も殺してない」

その一言はリンを安堵させた。いくら騙されようが、見下ろす瓦礫の狭間で絶え絶えの呼吸を繰り返す彼らが仲間であった事実に変わりはないからだ。

「リ、リン……」場を去ろうとした二人は半ばノイズのような声に呼び止められる。

ゼブル。高慢で皮肉げだった面影はとうになく、地面に這いつくばって狂おしそくに腕を伸ばす姿はさながら屍人^{ゾンビ}だ。

「おまえ、組織を裏切るつもりか……？」

「違うね。自分の進むべき道を見つけたただけだ」

そしてリンは歩いていった。振り返ることなく、また力強く。

* * *

リュウとリンは来た道を取って返した。右に左に何度も角を曲がるのがいかにもじれったい、いまは一刻も早く二ーナの下へ向かわなければならぬのだ。

トリニティの目論見は二ーナを利用して反政府の気運を高めることにある。これまで噂でしかなかった政府による非道な人体実験が、二ーナという決定的な証拠によって暴かれるのだ。

加えて民衆、特に貧民層は元から政府に良い印象を持っていない。D値制度に地獄を見せられ、いくら待っても食料の配給はなく、あつても反吐が出るほどまずく、二言目には「クソ政府め」と言うような連中だ。

彼らは勇気がないか身体が悪いかして反政府活動に参入してこないだけで、心の中ではトリニティの戦闘員と同じぐらい「打倒政府」に燃えている。

そんな彼らの眠れる獅子に火をつけ、ともに体制を打ち壊そうというのがトリニティの考えるシナリオだ。したがって二ーナを傷つ

けたり、万が一にも殺すというようなことはまずないだろう。

だがリュウは走る。制御が利かなくなった高速輸送車両のごとく、瓦礫を、水溜りを、道中出くわしたトリニティの連中を、踏み越え斬りつけ振り払って一心不乱に駆け抜ける。

後に続くリンは息も絶え絶えだ。無尽蔵にエネルギーを作り出す永久機関でも備わっているんじゃないかと思うぐらい、リュウはたった半秒も休むことなく突き進んでいく。

ハッチをくぐってアジトへ帰り着き、彼はそのまま裏通路を伝って治療室に駆け込んだ。

「ニーナッ!？」

ベッドの上に彼女の姿はない。あつたのはぬいぐるみだけだ。リュウはその頭をぐいと掴むと、アーケードに飛び出した。

辺りを素早く見渡し、後ろを振り返ったところで銃声だ。リュウはとつさに身をかがめる。敵はトリニティの作戦会議室から攻撃してきている。

リュウは右足を踏み込むのと同時に紫音剣を抜いた。ぬいぐるみが手からこぼれおち、リュウに当てるはずだった弾丸の一つがその腹を貫いた。

「ニーナをどこへやった……?」

ものの十秒で黙らせてやった五人のうち、一人の胸倉を掴んでリュウは問い詰めた。

しかし先ほど見舞ったハイキックがあまりに強烈すぎたらしい。これでも手加減したつもりなのだが、やがて男はがつくりと頭を垂れて何も言わなくなってしまった。

他の四人もある者はテーブルにもたれ、ある者は大の字になったまま動かない。どんなに卑劣な人間だろうとリンの仲間だ、殺してしまわないよう紫音剣の柄尻で殴ったり、慣れない徒手空拳で応戦してみたが人間とはこんなに脆いものだったか?

あるいは、自分の力が強大すぎるのか……。一瞬、彼の心に恐怖が巣食ったが、それもすぐに忘れる出来事が起きた。

物陰に隠れていたトリニティの戦闘員が背後から襲いかかった。
たのである。いや厳密に言えば、？襲いかかる？としていた。

敵は完全に気配を絶ち、もし邪魔が入らなければ今ごろはリュウの脳天を撃ち貫いていたことだろう。リュウ自身、物陰から男がばったりと倒れこんできて初めて自分が狙われていたことに気付いた。ほどなくしてリンがやってきて、きつと彼女が敵を倒してくれたのだろうと思ったが、どうもそうではないらしい。そもそも彼女が攻撃する時に決まって聞こえる銃声もしていないし、男を見れば胸にざっくりと引っかけ傷のような三本線が刻まれている。

「誰がやったんだ……？」阿呆らしい問いだと思いつつも、リュウは口に出さずにはいらなかった。

やがて二人は足音に気付く。コツ、コツ、というブーツがコンクリートを打つ硬質な音。

現れたのはメベトだった。その傍らにはニーナがおり、二人を見つけるや一目散に駆け出した。

メベトは彼女の後を追おうともしなければ、三人のうち誰かに銃を向けることもしない。ただ後ろに手を組み、その様子はまるで立つたまま鎮座しているかのようだ。

「メベト……」リンはメベトに向かって二、三步進んだところで足を止めた。

「なぜリュウを襲ったのです？ それにニーナも……彼が組織に参加することを拒んだからですか？」

メベトはじつと彼女を見据えたまま答えない。

「ニーナをさらい、リュウを殺すことがあなたの正義なんですか……？ だしたら、私はもうあなたについていくつもりはない」

「こいつらと一緒にいきます」初めからこう言われるのが分かっていたかのように、メベトはしばしば舌を閉じていた。

一方、リュウは胸に飛び込んできたニーナを片腕に抱きながら、目を白黒させてリンを見つめていた。組織を抜けるという決断がどんな苦悩の末に行われるか、彼は身を持って知っているからだ。

「一緒に行く……。つまり、君もまた空を目指すというのか」

メベトの低くしゃがれた声が厳かに響く。

「ここで君たちを止めることは出来ない。いまの私にはその力も、また資格もない。

だがせめて見定めさせてもらおう。君たちの進む道を、その行く末を……」

言つて、彼はコートのジャケットから何かを取り出した。反射的に身構えたりリュウたちを見て、メベトはふっと小さな笑いをこぼした。

「爆弾などではないよ。これを持っていくといい」

言葉と一緒に放り投げられたそれを、リュウは慌てて伸ばした右手で受け取った。

鍵、だろうか。しかし一般的なものではなく、銅製の取っ手からキーウェイ（差込部）が伸びてダガーナイフのような形をしている。キーウェイ部分はアクリル板のように透き通っており、内部に発光装置でも仕込まれているのか表面に彫られた溝に沿って赤い光の静脈が広がっている。

「君が真に空を手に入れようというのなら、それと同じ物があと三つ必要になる……。だが、残りの鍵も自然と君の物になるだろう」

じっと目を凝らしてみると鰐の部分に小さく『M』というアルファベットが刻まれている。

Mの鍵。リュウは心の中でそう名づけた。

「さあ、行きたまえ。ニーナには時間がないことを忘れるな」

* * *

メベトは他のメンバーがアジトに戻ってくる前に、三人をライフラインの入り口まで案内した。送電線、水道管、ガス、通信設備、都市機能を維持し人々が日常生活を送る上で必須のネットワークが張り巡らされた場所だ。

またそこは表社会を歩けないトリニティたちにとって各階層に通じる裏道でもあった。少々時間はかかるが、ここを伝って上層区へと行ける。現時点で深度は八〇〇メートル。空はまだ遠い。

三人を見送ってからしばらく、メベトは背後に人の気配を感じた。この自分の影に追われているような感覚はどことなく懐かしい。

「隠れて覗き見とは、相変わらず悪趣味だな……」

メベトは誰にともなく語りかける。すると空白の一部分が次第に色を帯び、輪郭を持ち、やがて男の姿となった。

ジェズイット。フットライトの青白い光に照らされる彼の口元は薄ら笑っている。

「バレちゃったか。だが文句を言われる筋合いはないぜ、俺は自分に与えられた能力を存分に生かしてるだけなんだからな」

「アーケードに倒れていた奴をやったのはおまえだろう。よりにもよって統治者が敵を助けるとはな……」

「こつちが思わず助太刀に入っちゃまうぐらい、あんたらのやり方が卑怯だったってことだ」

「それで……？ その覗き見能力でどれだけのことを知った？」
シャドウワーク

「大したことはない。ただつい先日、あんたとうちのボス……オリジンが会つてるところをうっかり見ちゃった」

「うっかりな。とジェズイットはわざとらしい声で強調した。

「あんた、表向きには反政府だの正義だの大層なことを言ってるが、オリジンとの間に約束があるんだろ？」

トリニティと政府の争いは言ってみりゃフェイク・ファイト。どれだけ真面目にやったところで予め勝ち負けが決まってる出来レースだ。

何でこんな馬鹿みたいなことをしてるのか俺なりに考えた。答えは単純。民衆のほとんどは政府に怒りを感じている。

それが爆発してヤバいことになる前に、偽のテロ組織を作って野郎どもの怒りを発散させようって腹だ。違うかい、？元・統治者？さ
んよ」

メベトは彼に背を向けたまま黙っている。偽のテロ組織。出来レース。

彼の言っていることは、表現こそ穏やかではないが内容そのものは正解だ。

「それが人々にとって必要なことならば、私はやる」

「ご立派だな。自分に与えられた使命は最後までやり遂げますつか」

「おまえはどうなんだ？ リュウを、敵を助けたりして……。統治者として問題があると思うが？」

「あれは俺個人の意思でやったことだ。統治者だの何だの肩書きは関係ない。」

あんた、そういうのに縛られすぎなんだよ。ちょっとはあいつらを見習ったらどうだ？」

メベトの脳裏にリンの言葉がよみがえる。『私はこいつらと一緒にに行きます』

リュウが世界を敵に回してでも二ーナを空に連れて行くとしたように、彼女もまた決断した。自分の意思で組織を抜けたのだ。

「だが、あんたもよく分かんことをするな。リュウを殺すよう命じたり、かと思えば？ 扉？を開けるための鍵をあつさり渡したり……。」

あいつらの敵になりたいのか、味方になりたいのかどっちなんだ？」

「私はリュウを殺せなどとは言っていない。彼は私の誘いを断った。だから二ーナを人質に取って強行策に出たが……部下が勘違いしてしまったようだ」

「勘違いじゃなくて、あいつらは元からそうするつもりだったんだろ。新米がボスに優遇されてりゃ腹が立つからな。」

しかし、いまのであんたの真意が分かったぜ。あんた、本当はリュウと一緒に空が見たいんだろ？」

メベトは首も振らなければ口も開かない。ただその眉尻が一瞬ぴくりとしただけだった。

「さてと、俺はあいつらを追うぜ。これから何をしでかすか楽しみだ」

「……およそ世を統べる者の言葉とは思えんな」

「じゃあ統治者は常に自分の気持ちに嘘をついたことを言えってか？ そりゃ無理だ。俺はあんたと違って正直者だからな」

「あばよ」その言葉とともに、彼の姿は空白に消えた。すると静寂の見えざる手が辺りを包み、十秒と待たず空間をすっぱり覆ってしまった。

その異様な静けさは、確かにこの場所を時間が、人が通り過ぎたことをメベトに直感させた。まただ。いつもこうして取り残されてきた。いつも見送る側だった。

そして気付けばがらんとした静寂の中に一人佇んでいる。どこへ行こう、何をしようという当てもないまま。

「自分の意思、か……」

彼は言葉の意味を噛み締めるようにひっそりと呟いた。

(??) 獣剣、再び - 前篇 -

「うー……」

ニーナはひどく悲しそうな声を出した。それに呼応するように背中
中の羽も力なくしおれたが、体調が悪化したわけではない。

むしろトリニティのアジトで治療してもらったおかげで今はすっ
かり回復した。理由はブキ。どんな時も欠かさず傍にいてくれた大
事な友だちのお腹に痛々しい傷が出来てしまったからだ。

「ごめん、ニーナ。あのときは戦うことで頭がいっぱいだったから
……」

リュウは申し訳なさそうに頭を下げる。トリニティの戦闘員と交
戦したとき、流れ弾の一つがブキの腹部に直撃したのだ。

へその上に出来た直径何ミリかの穴から、硬いプラスチックの粒^{ペレット}
がぼろぼろと砂のように落ちていく。これは人間に例えれば血だ。
ブキは大怪我を負ったのだ。

「それぐらい、私が編んで直してやるよ」

そう言つてニーナの肩を優しく叩いてやったリンを、リュウは「
信じられない」という顔で見つめた。

「リン、出来るの……?」

「なめるんじゃないよ」コツ、ではなくボコ、という音がリュウの
こめかみで炸裂した。

「つつても、今は針も糸もないからまた今度だ。とりあえず今はこ
の中に入れときな」

「いってえ……」と顔を覆うリュウを後ろに、リンはアジトから持参
してきた黒一色の大きなバレル・バッグの口を開いた。

中はハンドガン、マシンガン、手榴弾……他諸々物騒なものでい
っぱいだ。リンはその上にブキの身体をねじ込むように押し入れ、
それでも収まりきらないので最終的に足で数回踏みつけた。ニーナ
は少し泣いた。

そんなことをして手榴弾が爆発を起こさないか、穴が開いたままのブキを入れてはバッグ中がペレットまみれになるのではとリュウは心配になったが　彼女は先ほどから妙に気が立っている。

考えてみれば無理もない。トリニティのアジトを発つて十分程度、つまり彼女が組織を抜けてからわずかな時間しか経過していない。本当に自分の選択は正しいのか、そんな不安や後悔が一緒くたになつて彼女を苛立たせているのだろう。

後戻りは許されない、ただ前へ前へと突き進むしかない。これは一種の極限状態だ。

だから彼女はアジトから持てるだけの銃器をバッグに押し込み、これから戦争でも始めんばかりの重装備でいまここにいる。追い詰められた彼女の心模様がバッグの中身に投影されている。だが手遅れにはなっていない、今ならまだ引き返せる。

リュウは訊ねた。

「本当に、おれたちについてきていいのか……？」

決まつてる、というような顔で彼女は短く息を吐いた。

「ついていくんじゃない。進むんだよ。私が、この足で」

彼女の声には自らを無理やり説き伏せるような強引さがあつたが、その瞳に宿る決意は固かつた。

いずれにしろ、彼女がともに来てくれるのは頼もしい限りだ。その激しい気性のどこにぬいぐるみを修繕するだけの繊細さがあるのかは甚だ疑問だが、リュウにはとてもじゃないが出来そうにない。

リンは必要なのだ。ニーナにとつても、リュウにとつても。

「よし、じゃあ行こう」

場所はライフライン下層部。深度は八〇〇メートル。

「空へ！」

力強く、彼らは一步を踏み出した。

* * *

人を待っている。この、呼吸一つ立てるのさえ憚られるような静肅さのなかで。

やがて足音が聞こえてきた。だがそれは革靴が大理石の床を打つ音ではなく、鞘に収められた剣が歩度に合わせて鳴る金属音である。会議室に入ってきたのはヴェクサシオンだった。またの名を？剣聖？と呼ばれる男。彼は閑散とした会議室を見渡し、六つ並べられた席の一つに小ぶりな人影を認めると厳かに口を開いた。

「他の者はまだか？ クピト」

彼、あるいは彼女　クピトと呼ばれた人物は男女どちらか判然としない中性的な姿をしている。その青い瞳や口元は少年のように物言いたげで、きめの細かい白い肌やほっそりとした身体の輪郭は少女のように儂い。

外見の年齢は十歳前後の子供で、両耳が下向きに垂れている。獣人の特徴だ。ヴェクサシオンの声に反応し、背中に一對の羽を生やした小動物がクピトの掌のなかからひょこつと顔を出した。

「まもなくやってくると思います。ジェズイットさんは分かりませんが……」

あの人はいつも気まぐれですから、とクピトは澄んだ水のように透き通った声で付け加えた。

次にクピトの目は自らの席に腰を下ろそうとするヴェクサシオンの動きを追った。ちゃき、ちゃきと彼の腰に携えられた大振りな剣が鞘鳴り音を立てる。

剣聖・ヴェクサシオン。その威厳、その静かなる迫力を前に、人の全ては彼に道を開けるだろう。たとえ運命が行く手を阻んだとしても、彼はその剣で斬り伏せる。

事実そうしてきた証が、黒い眼帯で覆われた十字傷として右目に刻まれている。肌は褐色、髪は金色、顎や口元はいとも端正で、鼻の下にはよく整えられたどじょう髭がたくわえられている。

「差し支えなければ、ですが」

ヴェクサシオンが自らの席　クピトとはちょうど対極の位置だ

についてからしばらく。クピトは言った。

「あなたのご子息、ボツシュ¹/₆₄が消息を絶ったとのことでしたが……いまは？」

ヴェクサシオンは口を開く代わりにかぶりを振った。壁龕^{へきがん}に並べられた蠟燭の揺らめく赤を受けて、彼の所作一つ一つがより貫禄を帯びて見える。

「目下のところ、リケドとナラカに行方を捜させている……。この二人とは以前顔を合わせたことがあるだろう、私の部下だ」

「まだ見つかっていないのですか……。聞くところによれば、ボツシュは適格者の少年と戦い、」

敗れた、と言いかけた声を慌てて喉に押し戻す。クピトは相手に悟られないうちに、素早く「戦ったのちに、行方が分からなくなつたそうですが」と言い直した。

「なに、心配することはない……。あれぐらいの年頃の者はみな予想だにしない行動に出るものだ。だがいずれ帰ってくる。それも大いなる成長を遂げてな。」

ボツシュは私を与えた幾多の試練を乗り越え、一度たりともこちらの期待を裏切ったことがない。私は確信している」

ふと、彼は天窓の奥で輝く人工太陽を仰いだ。その『聖なる』と冠するに相応しい純白の輝きと、一人息子の面影とを重ねるように。

「あれは、私を超える者だ。世界に光をもたらす者だよ。」

我が血に連なる者が私を超えて……。世界を開く……」

ヴェクサシオンの見つめる両手は、歓喜を感じたように打ち震えていた。

「最高の栄誉だと、思わないか……？」

ふっと沈黙が降りた。やがて蠟燭の一本から、予告もなく、また音もなく火が消えた。

それに不吉な暗示を見たかのように、クピトはかすかに不安げな声で言った。

「早く、見つかるといいですね……」

(??) 獣剣、再び - 後篇 -

「なんだよ、これは……」

リンは思わず息を呑む。「仲間同士で殺りあつたのか？」

場所はライフライン上層部。さしたる障害に出くわすこともなく順調に歩を進めていた一行は、角を曲がったところで忽然と現れた光景を前に立ちすくんでいた。

道幅二人分の狭い通路いっぱいに邪公の惨殺死体がひしめいている。床にぶち撒かれた生の五臓六腑が発する強烈な臭気に、リュウたちの心身は吐き気と混乱に襲われた。

この邪公たち、いやかつてはそうであつたこの物言わぬ肉塊たちは、ライフライン上層部を根城としていた野生群だろう。下層区のリフトポートにいた者たちと種類は同じだ。

胸に深く顔をうずめてくるニーナを抱きながら、リュウは手前に倒れている一体を見やった。それは壁にもたれた状態で頭を垂らし、額に穿たれた穴からはどす黒い血が一筋流れ出している。

リュウは愕然とした。「違う、仲間同士で殺しあつたんじゃない……？ ボツシュ？ だ」

「これはボツシュがやったんだ」と、彼はにわかに怒りを含んだ声で強調した。

リュウの脳裏に過去の映像がフラッシュバックされていく。

ボツシュとともに輸送車両^{リフト}の護衛任務を受けた。バイオ公社実験棟まで向かう道のりで三体の邪公と遭遇した。

『おまえは照明係だ』こちらをからかうように言いながら、彼は自慢の？ 獣剣技？ で易々と敵を倒してみせた。

心臓を、脳みそを、目玉を、レイピアは彼らの命の在り処を正確に射抜いた。蛇が獲物に食らいつく時のような速さで。

この傷はそれだ。レイピアにつけられた傷だ。紫音剣のような幅広刃ではこんな小さく鋭い傷は出来ない。

リュウは確信すると同時に、この血みどろの景色が何らかの言葉を含んでいるように思えてきた。すなわちボツシュからのメッセー
ジ。

それは『仲直りしよう』だの『俺も仲間に入れてくれ』だの生易しいものでは当然ない。？挑戦状？だ。

「きつと、この向こうにボツシュがいる……」

「ちよつと待て。ここを突っ切ろうつてのかい？」

「どっちにしろ前に進む道はこれ以外にはない。あいつはそれを知つてて、わざとこんなことをしたんだ」

ボツシュⅡ1/64。統治者という未来が約束されていた彼は、小石につまづいたのを境にその精神を大きく歪めてしまったらしい。血の海、あるいは肉片の集積場ともいうべき目の前の光景は、ばらばらになって元に戻れなくなった彼の精神世界そのものだ。

だが一つ不可解な点がある。壁や床、天井に、何か鋭利な爪で抉つたような引つ掻き傷がいくつか見受けられる。邪公たちの死体の損壊度はひどく、まるで巨大な人型獣が力任せに無理やり引き裂いたかのようだ。

レイピアは『突き』に特化した分、物体を斬るにはあまり向いていないし、記憶に残るボツシュはそもそもこんなむごたらしい殺し方はしない。それはもちろん慈悲ではなく、単に薄汚い獣の血で服を汚したくないからだ。

ではこれはボツシュの仕業ではないのか……？　だが死体の中には明らかにレイピアで刺し殺されたと思しきものもある。

進んで確かめるしかない　リュウは二ーナを背におぶつて、狂い果てたボツシュの精神世界に足を踏み入れていった。

* * *

ほどなくして、一行は開けた場所に出た。

通路は直線で、五メートルも進むと死体の姿はなくなったが、そ

こを手負いの者が歩いていったとばかり血の跡はどこまでも続いていた。壁に刻まれた引つかき傷と一緒に。

リュウは二ーナを背から下ろし、さりげなく紫音剣に手をかけた。トラップを降りたところは正四角形のまっさらなコンクリートデッキとなっており、その中央には ボツシュが立っていた。

ここはライフラインと上層区街の中間にある連絡通路だ。^{アブローチ} 隣虫が青白い光をたなびかせて宙を舞い、ボツシュはそれに見惚れたように天井を仰いだまま動かない。

「よう、相棒！」

皮肉のつもりなのか、彼は白々しいぐらいに陽気な声で言った。

だがこちらを見ようとはしない。不自然に身体の右側をこちらに向けたままだ。

リュウを先頭に三人は慎重な足取りでトラップを一段一段降りていく。先回りされているのだ、罠が仕掛けられているかもしれない。「さつさと降りて来いよ。変な小細工はしてないからさ……」

妙に含みを持たせた言い方をしつつ、彼はおもむろに振り返る。

リュウはぴたりと足を止めた。リンはとっさに顔をそらし、二ーナは小さく悲鳴を上げた。

「ボツシュ、その？身体？は……？」

ぐるり、とボツシュの左手が素早く弧を描いた。人間の手ではなかった。

「俺の相棒がさ……ローディのくせになまいきだから……」

いま目の前にしているものがボツシュなのかどうか、いや人間なのかどうか、リュウには分からなかった。

彼の身体はその左半分が異形と化している。黒々とした、この世に悪魔がいるというのならその類の、五本の指全てに鋭い刃が備わった魔手。

それは肩から手首に至るまでの部分が極端に細長く、掌だけが肥大化しており、表面には橙色に発光する光の静脈が広がっている。その腕がとくに彼のものではないように、顔の左半分もまた、彼

のものではなくなっていた。

剥がれ落ちた皮膚。一切の光が失われ、いまや髑髏のようにつつまな空洞となつた左の瞳。彼の姿はあたかも成長の途中でつまみ出された胎児のように、不気味で、ある種の残虐さすら感じさせた。

「そいつを殺してやろうと思って、俺も、強くしてもらつたんだよ

……」

強くしてもらつた？ 違う。？バケモノ？にしてもらつたんだ。

彼はデイクとの生体融合ブステッドを受けて超人的な力を手に入れた。タントラたちネガティブのように。

リュウは言いようのない怒りを感じ、ただただ拳を握りしめた。

「どうしてだ、どうしておまえはそこまで？ 勝ち？ にこだわる……？」

「教えてやつたつてしょうがないだろ……これから死ぬやつにさ」ボツシュの左手が再びぐるりと一回転し、こちらを手招きした。

リュウは紫音剣を抜き出して彼の宣戦布告に応える。リンが身を乗り出そうとしたが、リュウはそれを手で制した。

「これはおれたちの問題だ。リンはニーナを頼む」

彼の言葉をしぶしぶ受け入れ、リンはニーナを連れて引き下がった。

リュウたちはコンクリートデッキの中央で対峙している。手抜き工事のためか、普段は誰にも使われない仮設構造物であるためか、二人のいる場所に手すりや柵はない。一步外に出たらそのまま奈落の底だ。

「さっきの通路にいたデイクは全部おまえがやつたんだな……。その左手で」

「まあ、ちよつとしたウォーミングアップをかねてな。まだ移植されたばかりであり馴染んでないんだ、ちよつとでも気を抜くと勝手に動きやがる。

言つとくがな、これはデイクなんかの腕じゃないんだ。？D検体？

……言うなりや、ドラゴンの腕だ」

「ドラゴン？」リュウの眉尻がぴくつとつりあがる。

「そう。だが？D・ダイブ？していない今のおまえは単なるローデ
イ。この左手を使うまでもない。だから……」

ボツシュは優雅とさえ言える鷹揚さでレイピアを抜き、突きの構えを取った。

「初めはこれだけで相手をしてやるよ」

オールド・ディーブ。D・ダイブ。リュウには聞きなれない単語だが、どうやらボツシュはドラゴンについて調査の手を尽くしたらしい。

リフトの護衛任務のときはあれほど馬鹿にしていたというのに……そのドラゴンの力を借りたおかげで彼はすっかり変わり果ててしまった。相手を下に見る高慢な性格は相変わらずのようだが。

「ボツシュ、おれは出来れば戦いたくない……。ニーナを空に、一刻も早く連れて行かなくちゃいけない。」

レンジャーの任務でおれを追ってきたわけじゃないんだろ？ だったら、勝負はおれの負けでいい。ここを通して、」

途端、リュウは突風を感じた。レイピアの切っ先が閃く。

リュウはとつさに身をそらし、続く二撃目、三撃目を紫色剣でしのいだ。

「ふざけるな。勝敗はおまえが決めるんじゃない、俺が決めるんだ」衝突した刃から火花と金属音が散る。両者はしばし鏖を競り合わせ、やがて後ろに飛びのき距離を置いた。

「やるようになったじゃないか。俺の獣剣技をかわすなんて」

「ボツシュ、おれは……」

「だが、これならどうだ？」

彼は一切聞く耳を持たず、レイピアを鞘に戻して居合いの体勢を取った。

リュウは悟る。ボツシュにとっての『勝利』とは、相手を殺すことなのだ。

「獣剣技……」

ボツシュは腰を低く落とすや、一足飛びに間合いを詰め 刃を
繰り出した。

「？麒麟きりんしょう翔？！」

逆袈裟に勢いよく振りぬかれた剣先から轟音とともに真つ赤な波動がほとばしる。リュウは剣を盾にして攻撃を受け止めたが、あまりの圧力にデッキの縁まで追いやられた。

構えを解くとボツシュが顔を憎悪に歪ませて突進してくるのが分かる。後ろは奈落。リュウは前進を余儀なくされ、両者は再び刃を交えた。

一度二度、三度ならず四度、その全てがボツシュの攻撃で、リュウは防戦一方だった。もちろん相手が強いわけではない、むしろゼノやタントラと比べれば彼は隙だらけだ。これまでも何度か相手を仕留めるチャンスがあった。

リュウは迷っていた。かつて一瞬でも友人だと思っていた人間を斬る、言い換えれば殺すということに、彼は怖気づいていたのだ。

「リュウ……おまえ、やる気あんのか？」

攻撃の手を止めて、ボツシュは訊ねた。

リュウは答えに詰まったように黙り込んだのち、つと口を開いた。

「D・ダイブ、オールド・ディープっていうのは……一体なんなんだ？」

「はあ？」寝言は寝て言えと言わんばかりに、ボツシュはあざけた。

リュウ自身もなぜこんな質問をしたのか分からない。ふと話題をそらせば、自分たちの関係がまた元に戻るとでも思っていたのか。これ以上無益な殺し合いをしなくて済むと思ったからか。

「バケモノ歴はそっちの方が長いはずなのに、おまえは何にも知らないんだな。」

リンクだよ、リンク。古代の超兵器であるドラゴンと精神的、あるいは肉体的に繋がる（リンク）ことで……俺たちはずっと強くなれ

る。

おまえは既に活動を終えたドラゴンと……アジーンだったか？　ど
ういう原理かは知らないが、あの護衛任務のときにリンクを果たし
て、そしてリフトポートで俺に地獄を見せてくれたわけだ。あのと
きの姿が？　D - ダイブ？　だよ。

いいか、リュウ。俺はあのおまえ、バケモノのおまえを倒さ
なくちゃ意味がないんだ……ほら、D - ダイブしてみろよ」

出来ないのか、とボツシュは鼻で笑った。続けて横目にニーナた
ちを見やる。

「そうか、きつかけか……」

「何をする気だ？　二人は関係ないはずだろ」

「いまのおまえはただの弱虫ローディだからな。バケモノになって
もらわないと」

ボツシュは魔手を高々振りかざし、タラップの上にいる二人めが
けて走り出した。「意味がないんだよ！」

だが彼の疾走はすぐに勢いをなくす。目の前に、つい今しがた後
ろにいたはずのリュウが立ちふさがったからだ。

「確かに、おれは自分の意思ではD - ダイブ出来ない……だけど、
いまのおまえなんかバケモノにならなくても倒せる」

「なんだと……？」

瞬間、リュウの足元から一気に鮮紅色のオーラが噴き上がった。

続いてゆつくりと剣を胸に構え、血だまりのような双眸で相手をね
めつける。

「かかってこいよ、ボツシュ」

リュウはもう躊躇わなかった。迷いがあればあるほどニーナとリ
ンに危険が及ぶことに気付いたからだ。

ボツシュはもう友だちじゃない。敵だ。空への道を阻む敵だ。

「なまいきだ……」ボツシュは悔しさに口元を歪め、ぎりつと奥歯
を鳴らした。

「なまいきだ、ローディのくせにつ！」

ボツシュは狂乱の態になり、再度『麒麟翔』を繰り出した。

続けて突きの連打。

連打。

連打。

連打。

だがいくら放つてもレイピアの切っ先が相手を捉えることはない。裂帛を上げながら、ボツシュは魔手を力任せに横薙いだ。

その手が紫音剣をわし掴む。力の拮抗が生じる。やがて魔手の力に負け、リュウは大きく吹き飛ばされた。

床に刃を突きたて、リュウは寸でのところで落下を免れた。ただちに体勢を整えて反撃に転じる。

ボツシュは居合いの構えを取り、三度『麒麟翔』を出そうとしたが、刃が振り上げられた瞬間、リュウはレイピアを剣で上から押さえつけた。

そこから手首を返してレイピアを頭上高く弾き飛ばす。刃先をボツシュの首筋にあてがう。

「おまえの負けだ」

がくり、とボツシュの両膝が崩れ落ちた。

額には玉のような汗が浮かび、瞳孔は開ききり、口元は静かに震えている。

「なんで……届かない……？ おまえに勝てない……？」

屈辱的な現実を否定するかのごとく、ボツシュは威勢よく魔手を振り回した。

「俺はまだ負けてない！ 負けてないんだよ！」

彼の口から出るどんな言葉も、いまや負け犬の遠吠えにしか聞こえなかった。

だが笑いたい気持ちの一つ起こらない。リュウにはただただ哀しかった。武器を失ってなお勝利に固執する彼の姿が。

リュウはゆっくりと紫音剣を逆さに持ちかえていく。絶命剣。これで終わらせてあげよう。彼を苦しみから解き放ってあげよう。

「ごめんな、ボツシュ」
そして終の一撃が、二人の間に閃いた。
。

(???) 憎しみの果てに - 前篇 -

少年は怯えていた。怯えて怯えて、息ひとつ満足に出来なかった。巨獣。あるいは生命の絶対的脅威ともいふべき存在を前に。その赤い双眸は獰猛にぎらつき、右手には戦斧、両端に牙を揃えた口^{くちべり}辺は荒々しい息吹を繰り返している。

少年は『死』を自覚するにはまだあまりにも幼かった。だが『恐怖』は分かる。二本の足で立ち、筋肉でふくらんだ胴を鎧で固めているとはいえ、目の前の者が人間のように話を聞いてはくれないということも分かっている。

これは獣^{けだもの}なのだ。血と肉に飢え、獲物の首を撥ね飛ばす以外に戦斧の使い道を知らない殺意の塊。これと対峙したということは、すなわち自分が生きるためには、この獣と戦って勝たなくてはならない。

そのために少年が持っているのは、ごく小さな鉄の両刃剣^{フロートソード}のみだった。母の温もりも、父の強さも、また世話人たちの優しさも、この場では何一つ少年に味方をしてくれない。少年は絶望のあまりに嘆いた。

「こわ……い……とうさま……」

足は震え、顔からは血の気が引き、その幼い身体は戦慄に打ちのめされてとくに動かなくなっていた。彼のために特注されたブロードソードを力いっぱい構え、刃先を相手に向けるだけで精いっぱいだった。

「恐れるな、ボツシュ。常に冷静でいろ」

どこからか父の厳格な声が響く。「戦場で恐怖に囚われれば、敵を見誤る。そこに待つのは、下劣な死闘だけだ……」

少年は思った。近くにいろのなら、どうして助けてくれないの？「ボツシュよ、おまえには力がある。だが……その使い方をまだ知らぬ。見せてみる。武人としての、おまえの力を」

これは試練なのだ。少年は悟った。

巨獣は肩を震わせ、鼻を鳴らし、いまにも戦斧を振り下ろさんとしている。

こわい。こわいこわいこわい。だけど　ここで力を証明しなければ、父さまはぼくを認めてくれない。

少年は裂帛を上げて獣に踊りかかっていった。その声はたくましい戦士のそれというより、死に逝く者の嘆きに近かった。悲痛な金切り声だった。

「　やりました、父さま」

はあ、はあ、と息を喘がせながら、少年は言った。

塔のようにそびえていた獣はいま自分の足元で沈黙している。脳天にはブロードソードが突き刺さっている。

具体的に自分がどう戦い、何を遂げたのか、過程はすっぱり頭から抜けているが、生きている。ぼくは生きている。

「よくやった、ボツシュ。今日はここまでだ……」

ブーツが大理石を叩く音が次第に遠のいていく。

「やりました、父さま。やりました。やりました……」

父が去ったあとも、少年はうわごとのように言葉を重ねた。彼の左半身はたつたいま血だまりから上がってきたとばかり獣の返り血で汚れている。

その翠緑色の瞳が鮮血の下でうつろに輝き、唇は笑っているとも泣いているともつかない格好で、壊れた機械のように同じ言葉を繰り返し続けている。

勝たなくちゃ。力を証明しなくちゃ。そうでないとだれもぼくを見してくれない。

だれも……。

* * *

「くそ……っ！　ちくしょう……っ！」

がばつと勢いよくボツシュの口から血が噴き出した。

先ほどの一撃で腕や足、額や胴、全身がくまなく切り刻まれた。痛い。苦しい。腹の奥底で魔物が暴れまわっているかのようなのだ。

一方であいつの涼しげな顔はなんだ？　なぜ傷一つ出来ていない？　蛇噛^{へびがみ}、獅子碎^{ししくだき}、麒麟翔、獣剣技のあらゆる技を尽くしたというのに？　身体の半分を悪魔に捧げたというのに？

なんてザマだ、なんてザマだ！

脳天を突き抜けるような激しい屈辱が全身を蝕み、それはいまにも彼の精神を食い破ろうとしていた。

「リュウ　ッ！」ボツシュは戦いをやめない。足はとつくに言うことを聞かず、立っているだけで精いっぱいだというのに。

「リュウ、おまえに……おまえに負けるわけには、いけないんだよ……っ！」

だが限界だった。ボツシュはまた血を吐き出し、がっくりとその場にひざまづいた。

嘘だろ？　動け、動けよ。リュウに、格下のローディに負けるということがあってはいけないんだ。

誰も見てくれなくなる。父は俺の元を去り、世界は俺を見捨てる。そんなことがあってたまるか！

「さあ、こいよ、リュウ！　殺してやるよ！」

リュウは憐れむような目でこちらを見つめていた。まるで透明な壁一つ隔てた向こう側から、いまにも溺れていく者の行く末を静観するかのよう。

なぜ俺がこつち側なんだ？　逆だろう？　ボツシュは言いようのない、燃え爆ぜるような怒りに駆られた。そして自分とリュウとを隔てる壁を打ち壊しにかかった。

が、ふと左腕が　自分の腕ではない悪魔の腕が　急に力を備え、ぐるっと躍動し、彼を後ろへと引っ張った。両足が無抵抗にもつれる。身体が傾ぐ。

「ボツシュ！」

リュウが事の顛末を察してとつさに駆け出した。ボツシュの足がデッキの縁を踏み越え、やがてその身体は情け容赦のない重力の井戸に飲まれた。

落ちる。落ちていく。寸でのところで手を伸ばしたリュウの顔が急速に、しかしゆるやかに遠のいていく。それは明確な一人の姿から、やがて判別の出来ない点となって、最後は闇に消えた。

ぶちゅ。あるいはぶちゅ。言葉にしてみればいとも安っぽい液体音、骨の、内臓の碎ける音を、彼は激しい衝撃のなかで耳にした。

うなじから背筋へと血が流れていくのが分かる。右手と両足があらぬ方向を向いてしまっているのが分かる。身体のだこにも力が入らず、息は出来ず、意識はリュウの顔を見たのを最後に止まっている。

死。

その瞳から光が失せ、彼はこのまま 生温かいのか冷たいのかもう分からなくなった血だまりのなかで 静かに息絶えるはずだった。もし彼が？人間？のままであったのなら。

？憎めるか……？？

知らない声だった。父のように厳格で、思わず平伏してしまうような声だった。

ボツシュは思う。リュウが自分の身体を傷つけたことを。同時に心までも深く痛めつけたことを。

俺は父に、人々に期待され、世を統べる者になるべく生まれてきた。それをリュウはいとも容易く、かつ徹底的に踏みにじった。

憎い。あいつが憎い。俺の生きる意味を奪ったあいつが。

？いいだろう……選んでやる？

悪魔の巢食う左腕が、急に意志を持ったかのように動き出し、高

々と掌を天に向けたあと、その鋭い爪でボツシュの胸を深く突き刺した。

そして破った。心臓を、彼の精神を。

血しぶきが辺りに散り、彼は完全なる死を遂げた。新たな存在に生まれ変わるために。

(???) 憎しみの果てに - 後篇 -

間に合わなかった。ボツシュを助けられなかった。

彼は凍えるような深い闇の、その底へとどこまでも落ちていった。悪魔に捧げた左腕に誘われるかのように。

だが落下の間際、彼にはリュウの手を掴む時間があつたはずだ。一秒、いやその半分にも満たない時間かもしれないが、リュウには分かつていた。

彼は敢えて手を取らなかったのだと。ローディに助けられるぐらいな孤独な死を選ぶと。

リュウは唇を噛み締めた。血が滲み出るぐらいに強く。右手が勝手に握り拳を作り、頸動脈が小刻みに震え、身体は異常なまでに熱を帯びていた。

怒りと悔しさがないまぜになっていまにも千切れそうな彼の心を抱きしめるように、ニーナがそっと身を寄せた。リンはボツシュが落下した先をちらと覗き込んだあと、途方に暮れたように短く息を吐いた。

「ボツシュは、おれの友だちだったんだ……」ふとリュウが口を開く。

「短い間だったし、完璧にそう言えるかは分からない……だけど、友だちだったんだよ。彼は叩きつけるように語尾を切り上げ、やにわに踵を返した。その動作はおよそ暴力的で、静かに寄り添ってくれていたニーナを押しつける格好になってしまった。

リュウは一瞬申し訳なさそうな顔をしたが、またすぐ二人に背を向け、黙り込んだまま歩き出した。ある見方をすれば逃げるように、またある見方をすれば障害の何もかもを蹴散らすような足取りで。

一行が曲がりくねったタラップを上り、上層区街へと続く通路へと進んだのち、コンクリートデッキに一人の男が忽然と姿を現した。それはデッキの縁に右足をかけ、手でひさしをつくって深い闇の

底を覗き込んだ。「こりゃあ……死んだな」

ジェズイット。彼は暢気とさえ言えるような口ぶりで独りごちたあと、顎に指を添えて思考をめぐらすように天井を仰いだ。

彼が決断を下すべき事柄は二つ。

その一。いよいよ統治者たちの本丸へと迫ったリユウ一行についていくかどうか。

その二。誰ぞに「趣味が悪い」と言われた尾行はここまでにして自分に与えられた使命を果たすべく中央省庁に帰還するか。

恐らくは統治者たちの間で再び会議の場が設けられるだろう。リユウはゼノ率いるレンジャー隊を蹴散らし、ネガティブを叩き潰し、成り行きながらトリニティまでも解体寸前に追いやった。そしてその手には空を開くための鍵を一つ持っている。

目に瞋る快進撃だ。勇敢なる彼に対し、我々統治者は最高のもてなしを用意しなくてはならない。今度の会議で決められるのはもてなしの内容、すなわちジェズイットが最も心躍る事柄が議題にされる。

「こっからが本番だな……」

ジェズイットは堪えきれない笑みを口の端からもらしつつ、上着のポケットから小型端末を取り出した。

モニターに現れたバーチャルコンソールを手早く操作し、すると彼の足元、コンクリートデッキ全体に青白い光を放つ魔法陣が出現した。

これは現在位置と中央省庁とを繋ぐテレポーション・ゲート（転送装置）。彼が統治者になって良かったと思うのは、何より移動に不自由しなくなったということだ。

まもなく彼の全身が青白い光の収束とともに跡形もなく消えた。彼は決断すべき事柄その二を選択したわけだが、密かにもう一つ思い悩んでいることがある。

それはかの剣聖・ヴェクサシオンに「あんたの息子は死んだ」と伝えるか否かだった。

* * *

「ヴェクサシオン？　どうかしましたか？」

クピトに呼びかけられ、ヴェクサシオンの鋭い瞳が八つと動き出した。

「すまない。一寸、^{じぱし}気が抜けていた」

「疲れているのでしょう。適格者のこと、ご子息のこと、近ごろは悩みの種が多すぎますから」

会議の場にはすでに五人の顔があつた。半円状に湾曲するアンテイク調の面長机には、端からヴェクサシオン、オルテンシア、一つ空席を挟み、デモネド、クピトの順で列している。

統治者の長たるエリュオンの椅子は用意されていない。彼は椅子に座らず、他の者たちの面前に立って会議を執り行うのが慣例となつているからだ。

静かに腕を組んで佇んでいた彼は、ちょうど真正面に見える空席をにらみつけてから口を開いた。

「相変わらず、無作法なやつだ……」

「誰が無作法だつて？」エリュオンの言葉にかぶせるように、どこからか声が飛んできた。

見れば空席が男の姿で埋まっている。「俺は初めっからここにいたぜ？　姿を隠してただけで」

ジェズイットは特に悪びれた様子もなく、むしろおどけるように両手を挙げた。

「ふん」白々しい言い訳に付き合うつもりはないとばかり、エリュオンは鼻を鳴らした。

他の者たちもジェズイットの突然なる登場に眉一つおどろかせることなく、また呆れる素振りさえなかった。至って日常的な光景だとばかりに。

「しかし、そろそろ会議の頃合かと思って戻ってみたら……まさ

が始まる寸前だったとはな」

「みんなには前もって召集をかけていたんです。だけど、ジェズイツトさんの行方が分からなくなってたから……」とクピト。

「俺の勘はよく当たるっていうのが、今回のでまた証明されたわけだな。で、今回の議題は……？」

直後にエリユオンが口を開く。「此度の適格者が、我々が戦うに値する？敵？であるかどうかだ」

木槌を高々打ち鳴らしたあのような沈黙が、しばし場を占めた。「また俺の勘が当たったな」とジェズイツトが得意げに言ったのを除いて。

「お察しの通り、俺は奴らの動向をうかがっていた。つまりしっかりと統治者としての努めを果たしていたわけだな。だからサボっていただの、統治者失格だの言われる筋合いはないぜ？」

で、俺がこの目で直に適格者を見てきた感想を率直に述べると「それまでだらしなく椅子に背もたれていた彼が、ぐっと前に身を乗り出した。

「あいつは俺たちなんかあつさりと倒して、空を開いちまうぜ」

およそ統治者とは思えない発言に、場が音もなくどよめいた。

すかさず隣から反駁はんぱくの声が上がる。「口を慎みなさい、ジェズイツト。ここは神聖な会議の場なのです」

オルテンシア。またの名を聖女。彼女はまぶたを閉じ、祈るように両手を胸の前で組み、その声、その姿にはいとも静謐な輝きがある。

肌は陶器のように白く透き通り、前をばつさりと切り詰めた髪は金。それがジェズイツトと並ぶと、白と黒、人と獣というような性質の真逆さがくつきりと浮かんだ。

「そう怒るなよ。綺麗な顔が台無しだぜ？」

「なんと不躰な……貴方は統治者と呼ぶにはあまりにも喋りすぎる」「同感だな」ふっと小さな笑いをこぼしつつ、デモネドが割って入った。

「だがジェズイトよ、おまえの無遠慮な口の聞き方は嫌いではない……。」

その者、リュウといったか。我々が直に手を下すに値する敵だと？」

「まず間違いなくな」

はっはっは、デモネドはいとも楽しそうに笑った。

ついでその筋骨隆々とした首をパキパキと鳴らし、片方の掌に揚々と拳を打ち込み、彼は敵が見えないうちから臨戦態勢に入った。

「このデモネドが初陣を飾ろう。そして勝利さえもな。他の者が出る幕はない」

彼は革の胴衣がはきれんばかりに発達した筋肉に更なる力をみなぎらせたが、「待つてください。まだ僕たちが戦うと決定したわけではありません」とクピトが例の中性的な声を響かせた。

決定を下すのはエリユオン。にわかに熱を帯び始めた議論を収束に導くには、彼の言葉が必要不可欠なのだ。

一同の視線が最高権力者に集められる。彼は血が渦まくような双眸で睥睨^{へいげい}するように座を見回し、「かつて、多くの者が……」と厳かに語り始めた。

「空を目指し、志半ばで死に絶えていった……。どれも我々が相手にするには及ばない凡庸ども。だが此度の適格者は違う。奴にはアジーンが味方している。

いや、違うな。アジーンこそが、我々の敵なのだ。やつは遙かな昔に達せられなかった夢を、リュウという少年の身体を借りて果たそうとしている。世界を作り変えようとしている。

では、神に代わって世を統べる我々が成すべきことは一つ。アジーンを食い止めることだ」

「では……？」とデモネド。

「最高統治者としてここに宣言する。？再生の試練？を、リュウに与えよう」

デモネドはニヤッと口元を歪め、クピトはどこか物憂いしそうにエリユオンを見、オルテンシアのまぶたは変わらず開かれることは

なく、ジェズイットは口笛を鳴らし、ヴェクサシオンは背筋をピンと張って固い表情を崩さない。

その彼にジェズイットはちらと意味ありげな視線を向けた。ヴェクサシオンの横顔には何か別のことに思いを馳せているような趣がある。恐らく行方が分からなくなった一人息子のことを想っているのだろう。

だが哀しいかな、行方はこれから分からないままなのだ。彼が絶大な期待を寄せ、厳しくも大事に育ててきた一人息子は、もう光の届かない闇の底に深く沈んでしまったのだから。

「よし！」デモネドが一打入魂とばかり拳をぶつけ、しばし物思いにふけていたジェズイットはそれに叩き起こされた。

「先刻言ったとおり、このデモネドが初陣を飾る！ ジェズイットよ、おまえなら敵の居場所が分かるだろう？」

「あ……？ デモネド、あんた自分から出張っていく気か？」

「待つなど俺の性に合わん！ さあ教える！」

はあ、とため息を吐きながら、ジェズイットは簡潔にリュウの現在地を述べた。

「ほほう、上層区街か。この中央省庁の間近ではないか。やりおる。やりおるな、これほど近くに来ているとは……」

デモネドはすつくと勢いよく立ち上がり、その拍子に弾き飛ばした椅子のことなど視野にも入れず、出入り口に向かって一散に歩き出した。

と、やにわに振り返り、鋭くエリユオンを指差した。

「オリジン！ おまえの前にやつの首を持ってくると約束しよう！」

「はっはっは！」そうして彼は会議室を去っていき、一同の間にはやかましい楽器演奏が終わったあのような静寂が残された。

「筋肉バカも消えたことだし、俺も退散するか」椅子から立ち上がったところで、ジェズイットの全身が現れたときと同様に忽然と消えた。

しばらくしてヴェクサシオンが鞘鳴り音を立てながら去り、その

後をオルテンシアが続いた。彼女はエリュオンの横を通り過ぎたあと、ぴたりと足を止めた。

「オリジン……私の見る未来に、？そのとき？は訪れていません。かの少年もまた、我々の前に果てることでしょう。」

あれは単なる災いに過ぎないのです。貴方が期待するような、空を開く者では決してない」

「それはこれから分かることだ」続いてエリュオンはちらと肩越しに顔を向け、「然るべきときが来たら、その開かれざる瞳を開き、しかと確かめてみるがいい。聖女よ」

彼女はしばらく物言いたげに佇んでいたが、やがてその場を去っていった。

聖女の寡黙なる瞳には未来を見る力がある。そのまぶたには未来の映像、人々が行き着く終局点が鮮明に浮かび上がっていることだろう。現に聖女の予言が外れたことは一度もない。

だが見るべきは現在いまなのだ。そしてそれは、瞳を閉じたままでは出来ない。

「よろしいのですか？ オリジン……」

クピトが心配げに声をかける。「事の真相、あなたの真意をみんなに知らせなくて……」

エリュオンは静かにかぶりを振った。

「聖女は私の心を見抜き、ジェズイットもあれこれ裏で嗅ぎまわって事の真相に気付きつつある……。他の二人はわざわざ知らせてやるまでもなく、統治者としての使命をまっとうしてくれるだろう」

彼は天窓の奥で燦然と輝く人工太陽を仰いだ。その真っ白な光のどこかに？神？の存在を見つけようとするかのように。

「再生の試練。それは神が我々にもたらした？救世くぜの儀式？だ。この世界はとつくに腐敗している。人々は空を、見上げるべきものを失い、未来の作り方を忘れてしまった……」

「でも、その空は……前の時代の儀式によって失われたのではないのですか……？」

「救世の儀式は古の時代、人が地上に生まれたときから連綿と続いている。あるときは剣士とドラゴン、あるときは人と邪神といった終わりなき対立の構図をもって。

それが今回は少年と統治者という構図になった。我々は儀式を完成させるために用意された？駒？に過ぎないのだ。あの少年も……」

だが、と彼は付け加えた。「私は楽しみにしている。リュウ。彼が私の前にやってくるのを」

つと歩き出したエリュオンの後をクピトは追ひ、更にその後を、一対の赤い羽を生やした小動物が追いかけていった。

(???) with you - 前篇 -

普段は整備作業員が使う通用口から出てきた一行を、壁に備え付けられたアーケ灯の青く静かな輝きが迎えた。

現在は人工太陽の消灯時間。街は眠り、明かりに引き寄せられた羽虫たちが飛びまわっている以外には寝息一つ聞こえない。

リュウたちは特に言葉を交わすことなく、横幅二人分の窮屈な道を進み始めた。位置としては街の裏路地。警備や監視の目もこんな埃くさいところまでは届いていないらしい。

犯罪者が大手を振って公道を歩くわけなどないのだから、むしろこつこつとした場所の警備を強化したほうが良いはずなのだが、多くの富裕層^{エリート}たちが何不自由なく暮らす上層区街では血なまぐさい事件はまず起こらない。

中層区から下の劣悪な衛生環境、治安情勢と比較すればこの街ははるかに優秀だが、一方で住人は平和ボケしているともいえる。警備兵は一日八時間の労働を半分は寝て過ごしているし、それで何か不具合が起こることもないため住人も気にしない。

そんな社会論理的に問題のある態度が、しかしリュウたちには都合が良かった。彼らはさしたる障害に出くわすことなく雑居ビル^{コンドミニアム}の合間から通りに出て、外壁コンクリート造りの共同住宅^{コンドミニアム}ごしにそびえる高層ビルに目と足を止めた。

「電力供給ビル……」リンがぼつりと呟く。

それは圧倒的な質量を持って二段も三段も高いところから街を見下ろし、黒々とした背景幕に角と辺の輪郭をくつきりと浮かび上がらせていた。

随所に設置された赤い誘導灯が一定の間隔で明滅している。まるで建物が呼吸しているかのようだ。

「あそこで電力を作り出してほかの階層に送り込んでるんだ。何せこつから最下層まで全部だからね、膨大な発電量を考えりゃあれぐ

らしいの大きさにはなるだろうさ」

ビルの表層が視認できるのは街明かりが届くわずかな範囲で、ほかの大部分は光の境界から外れて闇に紛れている。不気味なブラック・ボックス。

下層区街で暮らしていたときはバイオ公社のビルが世界で一番大きな建造物だと思っていたのに、リュウは驚きを通り越して恐怖すら覚えた。そして自分が今どこにたどり着いたのかということを改めて自覚した。

空は近い。リュウは両拳を握り、勇んで歩き出そうとしたが、「どこへ行くってんだよ。おまえ、ここより上層への行き方知ってるのか……？」

リュウはぴたりと足を止め、しばらくしてから「いや……」と気恥ずかしさを無理にこらえた顔で答えた。思えば行く当てなどどこにもなかった。

「ここから上は中央省庁区。統治者たちのいる階層だ。空に通じる扉もそこにあるはず……」。

だが、問題なのは？ 鍵？ だ。メベトから渡されたもののほかに、同じものがあと三つ必要になる」

「それはやつぱり、統治者たちが持つてるのか……？」

「だろうね。メベトは元々統治者の一人だった。だから私たちは政府と戦う気になれたんだ。

同じ統治者が味方なら、もしかしたら勝てるかもしれないってね。今じゃ馬鹿馬鹿しい幻想にしか思えないけど」

一拍、リンは何か思うことがあるようにまぶたを閉じて黙り込んだ。

「とにかく、今は中央省庁区へ行く方法を探そう。あそこへはエレベーターはもちろん、ライフラインみたいな裏道もない。

選ばれた人間だけの領域だからね。気軽に行き来できるような場所じゃないのさ。ただ、ひとつ……中央省庁区へ通じる転送装置がある」という話を聞いたことがある」

「それはどこにあるんだ？」

「分かってりや苦労しないんだよ。それをこれから探すって言うてるんだ」

かといって、何を手がかりに転送装置の在り処を探せばいいのか二人には分からない。

上層区に到着して早速の立ち往生だったが、ふと二ーナが「うー！」と指をさした。電力供給ビルの屋上に青い柱が出現し、一閃の強い輝きを放つと、そこはまた真つ暗な夜の天井へと姿を戻した。

「渡りに船つてのはこのことだね。今のが転送装置だとは断言できないけど、あの場所に何かがあるのは間違いない」

「でもタイミングがよすぎる……。敵の罠かもしれない」

「今さら怖気づくつてのかい？ 私たちはもうとつくに世界中を敵に回してるんだ」

「分かってるよ。行くさ。罠でも何でも、おれたちは進まなくちゃいけない」

リンの口元がふつとほころぶ。「そう言うと思ったよ」

電力供給ビルを目指して歩みを再開した一行は、ぽつぽつと人が行き交う小さな広場に差し掛かった。

広場にいるのは終夜勤務の警備兵、仕事帰りのレンジャー、テレコーダーが二基並ぶところでは一人の女性隊員が何事か受話器に話し込んでいる。

リユウたちは特に隠密行動を取ることもなく、広場を堂々と横断していった。それはリンが「下手にこそそこそしてるほうが怪しい」と言っただけだし、指名手配犯を見つけたところでこの上層区で騒ぎは起こせないだろうと判断したためだ。

実際、広場にいる者たちは自分のしている、考えていることに夢中で、数フィート前を横切っていく指名手配犯たちを誰も気にとめなかった。

別に彼らがお尋ね者でなくても、背中から一對の赤い羽根を生やした少女が裸足で歩いているという時点でかなり不自然だというの

に。もつとも、立つたまま眠り込んでいる警備兵たちにとって、この三人は夢の中の人物に見えているのかもしれないが。

広場を抜けて細い街筋に出た一行は、つと奇妙な光景に出くわした。赤いシルクを張ったテント風の小屋が鉄階段の脇に建てられ、その中で占い師の格好をした店主が客の男に品物を勧めている。

このブラザーマッスルを使えばたちどころに筋肉がどうの、このゴースト石を毎日持ち歩くだけで幸運がどうの。店主はいかにも占い師然とした、うさんくさい口調で長広舌をふるっているが、リュウはこの声に聞き覚えがある。

クリオ、だ。つい数刻前に闇市で服飾の露店を開いていたかと思えば、今度は上層区で金持ち相手に珍品を売りさばいている。

このわずかな時間にどうやってここまで移動したのか、彼女が勧める商品は本当に役に立つのか、そんな数々の疑問を押しつけて、リュウはまず彼女の変わり身ぶりに啞然とした。

「何やってるんだ……？」残念というべきか、ごく当たり前というべきか、くだらぬ商談に割く時間はないとばかりに帰っていった客と入れ替わりに、リュウはクリオ扮する占い師の館へと足を踏み入れた。

「お！ あん時のレンジャーさんやないか！」相も変わらず陽気で独特な口調だが、顔の下半分を紫のベールで覆った衣装で喋られるとかなり違和感がある。

クリオとの会話は、第一にリュウたちが政府に追われている身であることを知ったという彼女の言葉に始まり、次に「商売人にとってはどうでもいい」ということになり、ニーナとリンの紹介を改めてしたところで、ニーナの靴の話になった。

すると急にクリオの顔が曇った。「用意したことは、用意したんやけど……」

そこで彼女は、パンパンと小間使いを呼ぶ時にするような手の鳴らし方をした。テントの奥でシルクがまくられ、そこからクリオと色違いの衣装を身に着けた少女が二人、片方はたいそうに靴箱を両

手に乗せてやってきた。

「緑のほうはジャジュ。青はアルマ。うちの双子の妹や」クリオの言葉を受けて、長らくリュウの中で謎であった『クリオ移動術』の真相が解き明かされた。

これだけの大道具、品物の数々をクリオ一人だけで運搬できるはずがない。おおかた物静かで商売人の素質に欠ける妹たちに裏方をやらせ、姉であるクリオが客の前に出ているといったところだろう。というより、ジャジュとアルマが物資運搬その他雑事をやらずにここにいるというのなら、二人は片方は靴箱を乗せてリュウの前まで運び、もう片方がふたを開けて中身を見せるためだけにここにいるということになる。

さすがにそれはないだろう、このやたらと手の込んだ品物の見せ方も二人に任された仕事の一環なのだ。

「まあ、見せるだけ見せたわけやけど……。正直、な。政府に命を狙われてるあんさん方が生きてるとは思わなくて、その……。金持ちのお客さんに売るために、ちょっとゴージャスに改造してしまったというか……」

紫のサテンが仕込まれた高級箱に行儀よく収まっているローヒールは、日常生活で使うには不便すぎる装飾という装飾で装飾されていた。

表面は白銀の鱗が散りばめられ、先端部にはダイヤ、両面には羽がつけられ、また踵には幾本ものレースがつけられている。恐らくその一つ一つが限りなく本物に近いニセモノであることは、クリオの性格を考えれば明白だ。

リュウはしばらく靴を見つめ、ニーナと顔を合わせたのち、黙って箱のふたを閉じた。「裸足のほうがマシだ」という無言の反駁はんぱくである。

「申し訳ない……」クリオはがつくりと肩を落として、肺の中の空気をぜんぶ吐き出すように言った。

「何か、何か代わりをさせてや！ お客さんとの約束を裏切るのは

商売人のコケンに関わる！」

「ふーん、代わりねえ……」リンが口に人差し指を当てて言う。

「じゃあ、食い物とシャワーを用意してくれ。それと寝るところもだ」

「リン？ 一体何のつもりだ？」

「言葉の通りさ。アジトの時も満足に休めなかったし、正直身体が悲鳴を上げててね」

「だけど……」そこで言い淀むリュウの肩を、リンは軽く叩いた。

「気持ちが悪くのは分かる。けどさっきの青い光が転送装置だと決まったわけじゃないし、仮にそうだったとしても……私たちはいよいよ統治者たちの階層に乗り込むことになるんだ。」

「一、二時間でも休んでおいたほうがいい。ニーナの体調のこともあるしな」

ニーナの名前を出されると、リュウは何も言い返せなかった。

「で、クリオって言ったか。宿は用意できるのか？」

「そんならお安い御用や！ このテントの先は階段になってて、そこを下るとアパートメントの裏口に突き当たる。そん中が先祖代々上層区で店を出す時は決まって使ううちの秘密基地や」

「こういった按配で、一行はクリオの秘密基地で束の間の休息を取ることもなった。」

リュウはつきり持って来た品物やら小道具やらが山積み、狭苦しい倉庫のようなところを想像していたが、基地の中は思いのほか広々としていた。

その構造や内装はリュウが以前暮らしていたレンジャー宿舎を彼に思わせる。

またクリオは客人のもてなし方をよく心得ており、テキパキと妹たちに命じて空室の掃除、ベッドメイキングをさせ、更に風呂の用意から食事までとそれはもはや本物の宿屋のふるまいだった。

というより、この「秘密基地」は露天商がうまくいかなかった時に元から宿として使ったものかもしれないが、余計な詮

索はやめておいた。

クリオの言う「プライバシーの観点」から男女別々に部屋を割り当てられ、リュウはいま簡素なシングルベッドのうえに腰を下ろしている。リンとニーナは一緒にシャワーを浴びているところだ。

ジャケットをハンガーにかけた時に感じたことだが、自分の衣服、いや身体には生々しい血の匂いが染み込んでいる。このレンジャースーツはまだ買い替えたばかりだというのに。

その匂いに触発されて、リュウの中でこれまでの戦いの記憶がよみがえった。ゼノを殺した、ネガティブを殺した、ボッシュさえも……。

どれもこれも、廃棄ディク処理施設でドラゴンの死体を見た時からだ。アジーン。

彼の声を聞いてから、すべての歯車が狂い、運命は燃え爆ぜるような破滅に向かって驀進^{ばくしん}を始めた。怖い。自分が戦いの果てにどうなるのか。

リュウがたった十秒でも立ち止まることが嫌なのは、何もニーナの命に時間的制約があるからだけではない。ふと戦いから離れて、一人考える時間が出来てしまうと、恐怖が、絶望があふれて、どうしようもなくなってしまう。

肉体がどんなに変わっても、自分のこういうところは変わっていないんだな……そう思ったところで、しかしリュウは笑う気ひとつ起きなかった。

やがてノックの音が部屋に響いた。「どうぞ」と言う前に扉が開けられ、ドアの隙間からリンの横顔が見えた。

「シャワー、空いたぞ」

「ニーナは……？」

「私より先に出て、いまは部屋で休んでと思う」

リンはシャワー室の帰りがけにリュウのところに寄ったらしく、まだバスローブ姿だった。

かすかに湯気がのぼり、頭髪をくしゃくしゃに拭うタオルは、獣

耳の部分がちょこんと盛り上がっている。リンは男勝りな性格だが、その身体は立派に女性であり、リュウは目の置きどころに困った。

「何だか元気がないみたいだね。どうした……？」

「別に何でもないよ。身体が冷えるといけないから、早く着替えたほうがいい」

「二、三分立ち話するぐらい、何てことないさ。それに、『君は独りじゃない』って言ったのはどのどいつだっけ？」

リュウは「降参しました」というようなため息をつく。「おれは……死ぬのかな……」

「なんだよいきなり。そりゃ、人は誰だってそのうち」リュウはかぶりを振り、彼女の言葉を遮る。

「分かるんだ。あの力を使うたび、命が削れていくのが……」
「例の力か……。思えば、詳しい話を聞くのはまだだったな」

「おれにもよく分かってない。だけど、前に夢を見たんだ。ちょうど、ボツシュとバイオ公社のリフトを護衛する任務の前日に。

そこは真っ白い空間で、おれはとぼと歩いてる。すると人影が現れて たぶん男だと思う こう言っ たんだ。

『お前は選ばれた。千年の世界を壊す究極の破壊者として』
ほかに何か言ってたような気がするけど、覚えているのはこれだけだ」

「選ばれた、って……その力を使うことにか？」

リュウはこくりとうなづく。「そう考えれば、これまで起きたことに説明がつく。だけど、どうしておれなんだ？ この力を使って何をしろと？ 世界を、壊す……？」

もしそうだとしたら、と言いかけたところで、クリオが慌てた様子で部屋に駆け込んできた。

「大変や！ いま、あの子がうちの店を突っ切って……！」

「あの子って……ニーナが！？」リュウは即座に立ち上がり、ジャケットも取らず飛び出した。

ニーナの姿は部屋になく、魔法杖と傷ついたぬいぐるみが床に転

がつてゐるだけだつた。

リンがちょうどリュウの部屋を訪れていた頃。

一足先にシャワー室から出たニーナは、部屋で髪を乾かしていた。ドライヤーの使い方はリンが教えてくれた。「スイッチを押して、ゴォーッとやるだけだ」

彼女の言いつけ通り、ニーナは小さな化粧台の前に腰を下ろして髪に熱風を送り込んでいた。リンとリュウはニーナのことを、何も知らない赤子のように考えている節があるが、ドライヤーの使い方ぐらいは教えられなくても分かっている。

幼い頃、彼女が父と母と一緒に暮らしていた時に、彼女は風呂あがりに決まってそれを使っていたのだから。父と母。

両親はニーナを政府から匿った。D値の違いが判明すれば、我が子とはなればなれになってしまうからだ。二人とも娘のことを深く愛していたが、父は仕事で家を空けることが多く、ニーナはほとんどの時間を母と過ごした。

百冊を超える絵本をともに読み、お菓子を作り、編み物をし、もちろんお風呂にだって一緒に入った。シャワー室でリンに髪を洗ってもらった時、「きれいな髪をしてるね」という彼女の言葉が、ふと母の声に聞こえた。

瞳の色も、髪型も、口ぐせも、喋り方も、好きな食べ物も、母のことなら何だっと思いつける。「私のママは、私よりもずっときれいな髪をしてるよ」とリンに答えてやりたかった。

髪を乾かし終わると、彼女はふと部屋の中に友だちの姿を探した。なぜだか急に淋しくなった。

友だちはリンが持って来たバレル・バッグの中で、数々の黒くて物騒なものの下に埋もれていた。かわいそうに、お腹をけがしている。

ニーナはいたわるようにブキを手を持ったが 何か不自然に硬

い感触がある。友だちのお腹の中に手を入れるのは忍びなかったが、ニーナは謎の感触の正体を捕まえ、出来るだけそつと取り出した。鍵。リュウがメベトに渡されたものとは違い、ごく一般的な、キヤビネットを開けるときに使うような小さな棒鍵だ。

持ち手や鍵の部分はところどころ錆びついており、そのまだら模様がニーナには不思議と懐かしかった。彼女の家には、父の書斎ともうひとつ、母と一緒にでなければ入れない部屋があった。

その部屋の扉を開けると、母はこの鍵を使っていなかったか……？ いや間違いない。この鍵だ。

ニーナは確信を得るとともに、鍵を握りしめて部屋を飛び出した。この上層区は彼女の故郷^{ふるさと}。

かといって、彼女は家に帰るつもりもなければ、そのために駄々をこねるつもりも一切なかった。リュウとリンの邪魔にはなりたくなかった。

だが今は気持ちが抑えられない。廊下の曲がり角から二人の会話が聞こえる。幸いなことに、出口は二人のいる廊下とは別方向にあった。

問題は、裏口から外に出る以上どうしてもクリオの店を経由しなければならぬということだったが、彼女は奈落に飛び込む思いで、階段から一気にクリオの店を駆け抜けた。

「な、なんや!?」そう吃驚するクリオの横をニーナは素早くすり抜けていく。

クリオは反射的に彼女を追いかけようとしたが、足元に置いておいたゴースト石につまづき、倒れた拍子にしたたか頭をブラザーマッスルに打ちつけた。

「ぐぬぬ……」痛みに悶絶しつつ、顔を上げたクリオは妹たちがその場にぽかんと突っ立っていることに気付く。

「何しとるんや! 早ようあん子を捕まえて来い!」

ニーナはジャジュとアルマに追われる羽目になり、一度は息が切れたところをあわや捕まえられそうになったが、裏路地に入ったと

ところで二人をまいた。

二人が見当違いな方向へ走っていくのを物陰から確認し、ニーナはほっと胸をなでおろす。が、足を止めている暇はない。

鍵のことで頭がいっぱいになるあまり、魔法杖もブキも部屋に置いてきてしまったのだ。もしいま敵に襲われたらひとたまりもない。ニーナは右と左を注意深く確認したのち、かすかな記憶を頼りに自宅を探し始めた。家にいた頃はまともに外出したことがなく、街の地理は一切把握していないが、人工太陽が消灯したあとの時間帯に何度か家の外を散歩したことがある。

もちろん母と一緒に。家は街の中心から離れた静かな住宅地にあった。上層区民のほとんどが集合住宅で暮らしている中、ニーナは一戸建ての家に住んでいた。

赤い屋根が印象的な、門の脇に小さな花壇の庭を持つ家。その近くには何があっただろう。うまく思い出せない。

だが彼女は諦めなかった。ただ帰りたかった。家に、父と母のもとに。

* * *

クリオの秘密基地を出てから、もう二時間近くは経つだろうか。リュウとリンは今ごろ血眼になって自分を探しているに違いない。

そのことを申し訳なく思う余裕は、しかし今のニーナにはなかった。彼女は赤い屋根の家を、門の脇に小さな花壇の庭を備える家を、目の前にしていたからだ。

街の案内図によれば、一戸建ての家が並ぶ住宅地は上層区にひとつしかない。社会的には富裕層に当たる上層区民の中でも、自分だけの家を持てるのはごく一握りの人間である。

そのため一戸建ての住宅地は上層区に一箇所あるのみで、ニーナは案内図をよく頭に叩き込んでその場所を目指した。何度も迷いながら、つまづきながら、街の至るところに彼女の赤い羽根から灰色

の粒子がまき散らされていった。

長い彷徨の末にようやくたどり着いた我が家は、一点の明かりもつけられていなく、ただ静まり返っている。近くの街灯が蒼白の光を浴びせ、そうして家が暗闇に浮かぶ様は何だか死体を見ているような気分にさせる。

誰もいないの……？　そう心の中で問いかけながら、ニーナは背丈の低い門扉に手を伸ばす。それは鉄の軋む音を立てながら開き、ニーナはおずおずと敷地の中に入っていった。

門扉はいとも簡単に開いてくれたが、玄関の扉には鍵がかけられている。ニーナは自宅をぐるりと一周し、キッチンの窓が隙間ひとつ分開いていることに気付いた。

彼女は狭い窓枠に身体をぎゅうぎゅう押し込み、しばしの苦闘を経たあと、何とか屋内に進入した。「おかえりなさい」と彼女を暖かく迎える声はなく、あるのは冷え切った静寂だけだった。

キッチンは調理器具から食器類まで、どれもきれいに整頓されているが、ふと手をついてみれば埃でざらついていることに気付く。家族三人で食卓を囲んだダイニングテーブルも、リビングのソファも。

この家には長らく誰も帰っていないらしかった。ニーナは泣き出した。気持ちはだったが、寸でこのところでそれをこらえ、両親の寝室から浴室、自分の部屋、扉という扉を開いていった。

そして最後に、彼女は例の開かずの扉を前にした。掌の中にずつと持っていた鍵は、その扉の鍵穴に難なく収まり、かちやり、と解錠の音が小さく鳴った。

次にニーナは手探りで照明のスイッチを押したが、明かりがつかない。ここへ来るまでもう分かっていたことだったが、電気の供給が止まっている。

しかし一步部屋に足を踏み入れたところで、ニーナはごく小さな光の粒を暗闇の中に見つけた。それは彼女の目の前で風船のように膨らんでいき、室内を琥珀色の輝きで満たした。

父に書斎があるように、この部屋は母の書斎である。巨大な本棚が四囲を埋め、そこにずらりと並ぶ本の中身はどれも魔術に関することだ。

ニーナの母親は魔術士だった。彼女は魔術の初歩的な理論をニーナに教え、そうする時は決まってこの部屋が選ばれた。

『呪文を覚えたからって、むやみに使ってはいけません』それが母の口ぐせだった。

室内を照らす光は、ちょうどネガティブとの戦いで見た魂の輝きとよく似ている。

あの時はただ得体の知れない恐怖に身体が震えたが、今は逆だった。誰かの胸に抱かれているような、優しい温もりを感じる。

母の机には先端が鉤状になっている木製の魔法杖が立てかけられていた。その表面はうつすらと青みがかつたもやをまとい、ニーナは直感的に何か特別な力がこの杖には宿っていることを察した。

それを手に取った途端、ニーナの目から涙があふれた。これは母が使っていたものだ。これから覚える魔法がどのようなものか娘に実演して見せる時も、扉にかけた小さな黒板を指す時も。

それが自分の身体の一部であるかのように、母はこの魔法杖を肌身離さず持っていた。ではなぜここにあるのか？ 持ち主の姿もなしに？

涙は止まるどころか勢いを増し、やがてニーナはがっくりとくずおれてしまった。すると部屋に満ちていた光が集い始め、彼女を包んだ。

ふと母の声が聞こえた気がする。彼女は我が子に注意を促すときは、怒った顔ではなく、決まって優しい表情を浮かべていた。『いつまでも泣いてはいけません』

* * *

「ふーむ、なるほどなるほど……」

アルマはクリオの耳に何かひそひそと囁いている。

いつそのこと自分が喋ればいいのに、とリュウは思った。

「アルマはうちら『クリオ・スマイル・カンパニー』の武器・防具担当でな。」

鑑定人としての腕前はたいしたもんや。で、そのアルマが鑑定したところによると、ニーナが持って来たこの魔法杖は……」

クリオは魔法杖を高らかと掲げると、「逸品も逸品！ 一見すると量産型のマジカルワンドにそっくりやが、この柄の部分に渦巻きの模様があるやろ？」

ワンドスミス

これは伝説の杖職人が自分が作ったものに必ず入れる印で、量産型のものにはないんや。つまりこれは、マジカルワンドのモデルとなつた大元……ウィザードワンドや」

オリジナル

「そんなすごいものを？ ニーナは一体これをどこで……」

「こんな伝説級の代物を持つてるのは、この世に一人しかいない。」

ハイウエルン大魔導士や」

するとクリオはリュウの頭をぐいっと掴み、自分のほうへ引き寄せた。

「おい、兄さんラジオのニュース聞いとるか？」

「え？ なんだよ、急に」クリオは顔を上げてちらとニーナを見やる。

「つい一昨日の話や。反政府運動を続けていたハイウエルン大魔導士は、政府にとつ捕まって……処刑された。この人は女性でな、自分の娘と引き離されたのをきっかけに、ずっとD値制度の廃止を呼びかけてたんや。」

で、ハイウエルン大魔導士の娘の名前っていうのが、うちの情報収集担当のジャジュによると……」

「まさか、ニーナ……？」

こくり、とクリオはいつになく神妙な面持ちでうなづいた。

リュウは途端に言葉を失い、つい二十分前に帰ってきたニーナを「どこに行ってたんだ！」と叱りつけてしまったことを後悔した。

それは二人の話を聞いていたリンも同じらしかった。

恐らくニーナは自分の生まれ育った家に行ってきたのだろう。彼女が上層区の出身だとは思ってもみなかった。

しかし両親が家にいたのなら、ニーナが自分のところへ帰ってくることはなかったはずだ。それも母の形見を持つて。

リュウはクリオから杖を取り上げると、それをニーナに渡した。かける言葉が見当たらない。

でも、不思議と、ニーナの顔に絶望や悲しみの色は見えなかった。むしろこちらがハツとするような気迫を感じる。

ニーナは杖を受けると、胸のところできゅっと握りしめた。ついで彼女の小さな唇が静かに動く。

ありがとう、と言ったのか、さよなら、と言ったのか。リュウには分からなかったが、慰めの言葉なんて必要ないと思えるぐらい、彼女は強くなっていたようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7732v/>

プレス・オブ・ファイア ドラゴンクォーター

2011年12月30日22時48分発行